

---

# ゲットバトルドリーム

青春太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゲットバトルドリーム

### 【Nコード】

N9127H

### 【作者名】

青春太郎

### 【あらすじ】

普通の男子高校生、神谷遠時が『夢』を叶える戦い。ゲットバトルドリームに参加することになってしまふ。転校生の香美市絵里と共に戦い少年は夢を叶えることができるのか!?

## 第一話『夢と愛とお人好し』

ほぼ始めて小説を書きます。

よろしくお願いします。

夕焼けが見える坂道をいつものように歩いていた

俺の名前は神谷遠時。

何処にでもいる高校二年生だ。

二年生になってそろそろ大学のことを考え始め部活を辞め、日々勉強にはげんでいる受験生だ。

なぜこんな説明をしてるかって？

それは、自分の知ってる現実ではありえないことがおこっているからだ。

夕焼けに染まる坂道に黒いフードの男は立っていた。

「おい！」

その男は不機嫌そうに言った。

「なんだよ？」

おそろおそろ黒いフードの男に言った。

「もう少し驚いたらどうだ？」

男はまだ不機嫌なのか少し声をあらげて言った。

それは確かにいき

なり風が吹いたとおもったら、前の道が歪んでそこからこの男があらわれたんだ。

「いや、驚いてるけど……てゆうかお前何？人間？」

遠時はまた聞いた。「人間とも言えるし別の生き物とも言えるな」

男は先ほど違って愉快そうに言った。

「お前頭大丈夫か？俺に何のようだ？」

遠時はめんどくさそうに言った。

「そう言うな、お前には願いがあるか？」

「何？」

「これを受け取れ。」

ヒュツとゆう音とともにカードのようなものが投げられた。

「わっ！　なんだよこれ？」

遠時は声を荒げていった。

「なくすなよ。お前の願いを叶えるものだ。フフ。」

男は静かな笑いと、ともに歪みながら消えていった。

「なんなんだよいったい。」

遠時は驚きを隠せない様子でゆっくりと帰路についた。

朝になり、またいつもの坂道をめんどくさそうに自転車をこいでいると、後ろから声がした。

「おい、遠時」

振り向くとそこには目付きの悪い茶髪の男がいた。

「勝岡か？」

遠時は眠そうに言った。

「聞いたか？遠時、今日のクラスに転校生がくるんだぜ。」

勝岡は朝からニヤニヤしながら気分は絶好調です！と言いたそうな顔でスキップしながら俺の横をとりすぎていった。

「転校生がなんだってゆうんだよ」

遠時はため息混じりの独り言を吐いて坂道を登っていった。

「転校生の香美市絵理です。いろいろわからないことで迷惑をかけるかもしれませんがよろしくお願いします。」

（めっちゃくちゃかわいいな）

遠時は歓喜の声を心のなかで叫んだ。

「うわぁ〜めっちゃかわえーな。君」

クラスの男子で一人だけ心の中で叫ばない男子がいた。

言わなくても分かる勝岡だ。

「ぜひとも僕とおちかずきに」

「遠慮しておきます。」

速答！！

「うわぁーフラれたわ。」

（言わなくても分かるよ。でもああゆうのは高嶺のはなだね）  
時は諦め半分で呟いた。 遠

屋上ではすがすがしい風が吹いている。

「やっぱりここは気持ちいなあ」

遠時は大きくのびをしていた。

「遠時君」

（この声は…）

予想通り勝岡だった。

「さぁ一緒に飯食べよう」

相変わらずテンションが高かった。

「お前、クラスのみんなの前で転校生にフラれたのに、なぜそのテンション？」

「そんなん気のことちゃうで。」

（もう嫌だこいつは。泣きたいぜ。）

遠時はつぶやきながら昼食についた。

「そついえば知ってるか遠時？」

「なにが？」

遠時は気のない返事をした。

「最近起こった殺人事件のことだぜ」

「さ、殺人事件?!」

（そんなの知らねぞ）

新聞とニュースを見ない現代っ子の遠時は勝岡の言葉に驚いた。

「そうやで。えっと、3日前だっかな河野池の近くで死体が発見されたらしいで」

「へ、へえー」

「その死体変わっていてなあ、腹の右側がなくなっていたらしいんやで」

（食事中にそんな話するなよ、気持ち悪い。）

だが、遠時は何も言わなかった。

「そんなもん興味ねーよ」

「あ、そーなんごめんごめん食事中にこんな話はあかんね」  
（ん、今こいつ…）

遠時はとなりであんパンをかじっている友人に目をやった。  
「気のせいかな」

「え、なにが？」

「なんでもねーよ」

こうして何時もどおりの遠時の昼食は終わった。

一人、暗い道で音をたてるものがいた。

「たく、自分の飲み物ぐらい自分で買いに行けよあのくそ姉貴」

遠時は怒りながら自転車のペダルをこいでいた。

家での権力が紙よりも薄い遠時にとって姉の命令は絶対なのだ。

「だいたい、いい歳こいてオレンジジュースってなんだよ！」

不運にも家の近くに自動販売機がない遠時の家では一番近いコンビニに（それでも十分はかかる）行くしかないのである。



買い物を終え自転車を走らせていると、ある臭いに気がついた。

（なんだ、この生臭い臭いは。）

自転車を降り臭いのする方に足を進めた。

着いたのは暗いビルの路地裏だった。

（なんか嫌なことがありそうだが、ここまで来たら行くしかないよな）

彼は後悔するだろう平穩の別れと地獄の始まりに

そこで見たものは自分の考えではありえないものだった。

「なんだよ、これ」

遠時の前には赤い世界が広がっていた。

「これ、血じゃねえか！」

その路地裏には一人の男の死体が転がっていた。

「おい、あんた大丈夫か？」

遠時が近寄ろうとしたその時、一つの音が耳に入った。

カッーン カッーン カッーン

（やばい、犯人がまだ近くにいたか！？）

遠時は逃げようとしたが恐怖が興味で足が動かなかった。

徐々にちかづく足音。

遠時の頬から一筋の汗が落ちた時、暗い闇から一人の人間が姿を現した。

「お、お前は！」

遠時は驚愕の声をあげた。その、見た先の人物は

「こんばんは、神谷遠時君。」

少し茶色が混ざったロングヘアースタイル抜群の転校生、香美市絵里がそこに立っていた。

「お前がこの人怪我させたのか？」

「そうよ。あ、でも怪我させたんじゃないわよ。殺したのよ。」

恐る恐るの質問に最高の笑顔をみせる絵里。

「なんで殺したんだよ？」

遠時は混乱しながら質問を投げ掛けた。

「フフフ」

静かな笑い声。

「何が可笑しいんだよ！」  
声を荒げる遠時。

「ごめんなさい。なんでそんな無駄な質問するかわからなくて。」

「無駄な質問だと!？」

「だってそうでしょ、あなたこれから死ぬんだから」

その言葉の後、遠時は振り返らずひたすらに走り、自転車に乗り、ひたすらにペダルをこいだ。後に感じる強烈な殺意から逃げるように

家に戻るとすぐに自分の部屋に飛び込み、ベットの中で目を閉じた。  
見たものの全てを嘘であると信じて。

今日、俺は学校に行かなければならない。

朝に来たこのメールのせいだ。

『おはようございます。』

香美市絵里です。今日学校を休んだり、昨日のことを誰かに話した

りしたら家族を失いますよ

放課後、屋上で待ってます。P・S メールアドレスはあなたの親友に聞きました。』

俺は何時も通り学校に行き、授業を受けた。そして放課後、俺は屋上に向かった。

屋上では強い風が音をたてながら吹いていた。その風の中に香美市絵里は立っていた。

「あ、来てくれましたか？ けっこう心配だったんですよ」

絵里は笑顔で言った。

「俺の家族は無事なんだろうな」

遠時は声を荒げた。

「もちろんですよ。あなたの家族を殺すわけないじゃないですか」

絵里は遠時に一歩ずつちかずいていった。

「私が話したいのは神谷遠時だけですよ」

その瞬間、絵里の制服の手首からカッターが取り出された。  
(クソ、いきなりかよ！)

後ろに大きく跳ぶ遠時。

カチカチカチ  
…

カッターの刃が飛び出る

絵里は跳んだ遠時の首を掴みそのまま押し倒した。

「ぐっ、」

カッターの刃はすでに遠時の首に置かれていた。

「いい動きよ。誉めてあげるわ」

いつもの笑顔で言った。

「何か言い残すことはある？」

カッターを持つ手に力が入るのが伝わってくる  
(やばい、なにか言わなきゃこのまま殺される)

焦る脳をフルに使った。

「何のために人を殺すんだよ！？」

必死に探した質問がこれだった。

絵里は嘲る目を見せて言った

「何のため？そんなのきまつてるじゃない、自分の夢を叶えるためよ。」

「夢を叶えるため？」

「そうよ。だから、あなたも私を殺しにきたんじゃないの？」

不愉快そうに彼女は言った。

「おい、待てよ。俺がお前を？ バカ言うな。てゆうか、なんだよ

夢を叶えるって」

焦りながら疑問を投げ掛けた。

「ふーん。本当に知らないんだ」

カッターの押さえる手が弱まった。

「いいわ、教えてあげる。夢を叶える戦い－ゲットバトルドリーム－について。」

ゲットバトルドリーム…それは自分の夢を叶えるための戦い、参加するものは主催者から特別な力を与えられ夢を持つものどおし戦う。  
「わかったかしら？」

一通りの解説を受け遠時は混乱状態に陥っていた。

「質問が山ほどあるんだが」

すでに羽交い締めからとかれ腕組みをしながら座っている遠時であった。

「出来るだけ少なくてのむわ」

「まず、どうやって夢を叶えてもらうんだよ？主催者っていったな。そいつ誰だよ？」

「知らないわよ、誰かなんて。私が聞きたいくらいだわ。」  
質問にサラッと答える絵里。

「誰だかわからない奴信じて人殺してんのかよ？」

「少しは信じてもいいと思うわよ。この戦いは普通じゃないもの」

絵里の言葉に驚く遠時。

「普通じゃないってどう言う意味だよ？」

「さっきも話したようにこの戦いに参加してる者は特別な力を持つてるのよ」

「特別な力？」

疑問

「そうね。私はこれかな」

絵里がカッターを前にだす

絵里の手からカッターが消える。

（何！？）

その瞬間、風を切る音がした。

ギーン！！

カッターは先ほど遠時が横たわっていたコンクリートに突き刺さっていた。

「何だよ、これ！？カッターが刺さってる？」

またもや混乱状態に陥いる遠時。

「ムーブプレイス」

絵里が静かに言った。

「ム、ムーブプレイス？」

「そうよ、それが私の能力。触れた物を今までに触った場所に移動させる」

「マジかよ。」

遠時は驚きの声を上げた。

「マジよ。この戦いに参加してる者はみんな一人ずつ特別な能力を持ち、それを奪い合うのよ」

絵里は長い説明を終え息をはいた。

「奪い合うだと？」

「また質問？いい加減疲れたは。能力を使える相手を殺すか、この戦いの参加書を奪うかして自分の参加書にポイントを貯めていき最後の日にポイントが一番高い者が夢を叶えてもらえるもよ」

そう言い絵里はスカートの中から一枚のカードを取り出した。

「これが参加書よ」

そのカードを見た瞬間に自分の心臓の鼓動が一気に速くなるのを遠時は感じた。

それは遠時は知っているはずのないものしかし頭が、脳が否定する。

「俺は、そのカードを…持っている」

おもわず口からでた言葉



絵里の目の色が変わるのがはっきりとわかった。

その目は遠時の過去を思い出させていた。

- 暗く、黒く、絶望的で狂乱なあの目と似ていた -

「今、どこにあるの？」

先ほどと違い低い声だった。

遠時は自分のポケットに手を入れた。

あの男に言われてからなんとなく持ち歩いていた自分であった。

「そう、そこにあるのね。今すぐ私に貸しなさい」

絵里の始めての迫力のある声だった。

遠時はすぐさまポケットからカードをだし、絵里に投げた。

絵里はカードを見て、すぐに投げ返してきた。

「よかったわね。私はあなたを殺さずにすみそうよ」

少し安堵した声だった。

「なんでだよ？て言うか殺すきだったの？」

胸をなでおろしつつの驚く疑問。

「あなたはまだ能力が目覚めてないのよ。奪う能力が無いんじゃないわ、ポイントにならないわ」

そう言い残すと遠時の横を通り過ぎ出口に向かった。

その背中を見ながら遠時は最後の質問をした。

「お前の夢は何なんだ？」

ずっと考えていた謎、絵里は口を開き言った。

「母を救うの」

夕日に染まる姿の彼女の瞳は美しかった。

夕日の日が落ちる坂の下に神谷遠時は寝転がっていた。

香美市絵里の話しが真実なのかまだ自分でもわからない。

「なんだかな」

ため息混じりの自分の声。

その時、

ビューン！！

空間が揺らぐ

遠時は寝転がっていた坂から飛び起きた。

「久しぶりだな。元気にしていたか？」

黒フードの男が現れた。

「この戦いのことを知りたいだろ。教えてやろうか？」

嫌味たらしくその男は話してきた。

「教えてくれんのかよ？」

ゆっくりと一歩後退る。

「どうだろうな」

ゆっくり一歩近ずいてくる。

周りには誰もいない。

世界でこの男と自分だけのようだった。

「願いなんで叶えられないんだろ」

「叶えられるさ」

男は高らかに言った。

「なぜならば…」

「なぜならば？」

手に汗がにじむ、男からはとてつもなく異様なものを感じた。

「俺が神だから」

「ハッ!？」

驚きの声。

黒フードの中で男は笑っているように見えた。

「信じる、信じないは勝手だが能力を与えてるのは俺だからな。もちろんお前にもやったぞ、能力をな」

遠時は自分の手のひらをのぞいた。

変わらない、いつもの手だった。

「お前が聞きたいのは戦いの敗者の行方と最後の日のことか。質問の多い奴だよまったく」  
男は静かにそう告げる。

（何、心を読まれた!？）

ゆっくりゆっくり近ずいてくるその男に遠時は恐怖を感じた。

「敗者は死ねば無になり、カードを失えば記憶が消える。そうゆう仕組みだ。」

男は当然の様に言うが遠時にはまったく理解できない。

「おい、ちよつと待て消えるって

「最後の日は時がくればわかる」

男は最後にそう言って歪みの中に消えていった。

「結局、一個しか質問してねーよ」

と、遠時はあきれた声をもらした。

家に帰ると晩飯の用意が出来ていた。

「遠時やつと帰ってきたのゝ遅いつて！」

三人分の皿を並べながら姉は

「おかえり」も言わずに文句を言ってきた。

今日の晩飯は鉄板焼だった。

「あゝなんもやらねえな」

姉はテレビのチャンネルを変えながらぼやいた。

遠時が黙々と箸を動かしている時、テレビのニュースが耳に入った。

『昨夜、北川中学の近くの路上で男性の死体が発見されました。男性の体は鋭い刃物で切られたような跡が残っていました。』

ブツン

「まだ捕まってないのかよ。あの通り魔」

テレビを消しながらブツブツと言う姉。

「通り魔か…」

遠時は小さな声でつぶやいた。

その瞬間姉が

「しまった」と、言いたげな顔になった。

そう、家族だけが知っているが俺にとって

「通り魔」はタブーなのだ。

なぜタブーかと思い出したくない。思い出そうとすれば頭が痛くなる。

君だから殺すんだよ、遠時

あの時のあいつの目はおそらく一生忘れない。そんな目だった。

遠時は素早く食事を済ませて立ちあがった。

母にアイコンタクトで怒られ、下を向いていた姉がこちらを見た。

「ごちそうさま。ちょっとコンビニに行って来る」

遠時は出来るだけ笑顔で言った。

コンビニに行くと、思わぬ人に出会った。

香美市絵里が手にカゴを持ちながら店内をまわっていた。

「香美市」

遠時は確認しておくべきだった。彼女のカゴの中を

「あら、こんばんは。神谷君」

カゴの中にはハサミやらカッターやらとにかく危ない物が詰まっていた。

「お前それ」

指を指して言う遠時。

「ああ、これ？今きらしていて、買いにきたの」

絵里はしらじらしい嘘をつく。

「香美市、話があるけど、いいか？」

絵里は少しニヤけながら

「わかったわ」といい会計を済ませにいった。

外に出るとすぐに絵里が出てきた。

「さあ話って何？」

絵里の手に買い物袋はなかった。おそらくはすでに体に仕込んだのだろう。

「今日、お前は誰かと戦う気か？」

いきなり確証をつく遠時。

絵里は笑いながら

「どうしてよ。コンビニに来たら誰かと戦うの？私は普通の女子高生よ。そんなことしないわ」

あくまでシラを切る絵里。

「能力使える時点で普通じゃねーよ。それにこんな時間にハサミやらカッターなんかコンビニで買わない」

遠時は息をきらしながら言った。

「じゃあ、今から戦いに行くって言うたら神谷君はどうするの？」

絵里は遠時を試す目で見てきた。

遠時の答えは決まっていた。



「俺も行く」

「なぜ？能力もないあなたが？」

遠時はひたすらに答えた。

「お前に協力したい。俺には叶えたい願いはないけど、だから力になりたい」

心から素直な気持ちで言っただつた。

絵里は少し近ずいてきて言った。

「能力が無いんじゃ協力してくれても死ぬだけよ。でも

絵里は遠時の顔のギリギリのところまで来た。

「ありがとう、その言われたの始めてよ。場所だけ教えておくわ、多分間に合わないと思うから。北川橋の下よ、そこにあの通り魔をおびきだすの」

頭がまた痛くなりそうになったがこらえて言った。

「お前そんな危ない奴と戦うのかよ。ならなおさら俺も

「私が生きてたらまた会いましょ」

香美市絵里は最高の笑顔で遠時の肩に手をおいた。

その瞬間、遠時は北川高校の前に立っていた。

肩に触れられた時に能力を使われたのだ。

ここから北川橋までは速くても30分はかかる。

（だから間に合わないか…）

遠時は絵里の言葉を思い出していた。

「おもしれー！ やってやろうじゃないか。ぜったいに間に合ってやるよ、香美市！-」

遠時は夜の明かりのない道を全力で走り始めた。

香美市は北川橋の下で静かに息をひそめていた。  
犯人は必ずここに来る！、確証があった。

昨日の晩、参加者を捜しているとあの通り魔をみつけた。そいつは能力を使い非参加者を殺していた。死体が消えてないのがその証拠だった。

この戦いで命を失えば死体は無になり、参加者以外の人達のその死亡者に関する全ての記憶が無くなる。それがルール。

そのおかげで絵里は人を殺してもなんの問題にはならなかった。

絵里は昨日、犯人に

「明日の晩、北川橋の下で殺しあいをしましょう」と言い全力で逃げ、今日戦う準備をし、たりない武器を買いにいった所遠時にあつてしまったのだ。

「ついてないわね、私。」絵里は静かにつぶやいた。

（あんなこと言われたら刺し違える事が出来ないじゃない）

絵里は強く思った。

その時、ゆっくり歩いてくる音が聞こえた。

（きたか…）

絵里は服の袖からカッターをだしながら身を潜めた。

男は橋の下に降り、中央に移動し始めた。

（神谷君。もう一度あなたにあってみせるわ）

絵里は勢いよく物陰から飛び出した。

カチカチカチ！

カッターから刃をだして全速力で男に近づく。

男は絵里に気づきふり返るが、

「遅い！！」

絵里は叫びながら地面を蹴り、男の眉間にカッターを突き刺した。  
ブシューッと血が水道の水のように出てくる。

絵里は地面に手をつき

「やった」と思った。

その直後

血を流す男の手が鞭のように伸び、絵里の腹を浅く切断する。

「痛ー！？」

絵里の脳では疑問が殺到する。

（なぜ？致命傷のはずよ）

絵里は男の体をよく見た。

すると服に見えていた部分は形をなくしていき、手は先ほどよりも鋭くなり

「赤い死神」と言える化け物が立っていた。

「クソ、まずいわ」

こんな能力があるなんて。

「やるねお嬢ちゃん。でも僕的能力      メタモルフォーゼ      には  
勝てないよ」

男は陽気に言った。

「この能力はね、僕の血を媒体として身体を思いのままに変化させられる。さっきの攻撃はよかったけどギリギリ僕的能力で血を止めさせてもらったよ」

男は笑いながら近づいてくる。

絵里は動こうとするが、痛みが激しく脚が動かない。

（動け動け動けー！）

焦れば焦るほど痛みは増してくる。

男は絵里の前に来ていた。そして手を上にあげ、

「じゃあね。お嬢ちゃん」

手を振り下ろす！！

（母さん！）

「待ちやがれ！」

遠時の声は静寂の闇に響きわたった。

寸前の所で止まる刃。

赤い死神の男はゆっくりと後ろをむいた。

遠時は激しく息をきらしながら絵里に言った。

「見たか！まにやったぜ香美市」

どうしてだろう　絵里は思った。

普通、ここは遠時を追い返すべきだ。しかし、絵里は追い返せなかった。

「ありがとう」

そつと絵里の口から言葉が漏れた。なぜだか痛みもひいていた。

「君はこのお嬢ちゃんの友達かな？」

男は遠時にニヤけながら質問する。

「ああ！俺の大事な友達を傷つけたお前は許さねー！」

叫び、拳を握りしめ男のもとに走った。

「アハハ！面白いこと言うね君ー！」

赤い死神も遠時のもとに向かう。

（駄目。能力のない彼じゃ殺される）

絵里は遠時を止めたいがその手段が彼女にはない。

「神谷君！！」

絵里は叫んだ。

赤い死神の手が振りまわされる。その刃は遠時の首を狙っていた。

「終わりだよ！少年」  
ドゴーツ！！

赤い死神は地面に転がりながら倒れた。

（どう言うこと？）

遠時は自分の拳を拡げて男に近づいていく。

（あの男の動きが止まった！？）

絵里は疑問の眼差しで遠時を見る。

遠時はその視線に気づき笑顔をつくり

「俺がなにもせずここにくるかよ」と言っ  
てポケットからカードを出した。

カードには金色の色が着いていた。

「色が着いてるってことはあなたまさか

「そうだ。俺はこの戦いに参加する」

そう言っ  
て絵里の手からカードをとった。

「デステイニー  
チョイス      それが俺の能力だ」

遠時は笑顔で笑いかけてきた。

「何時からなの？」

絵里は遠時に質問する。

「お前と話した後  
に主催者と話した直後かな」

遠時は絵里の目をしっかりと見ながらアバウトに言った。

「そんなことって

「貴様ー！よくも僕を殴ったな。殺してやる殺してやるるー！！」  
絵里が言い終わる前に赤い死神の男は起き上がりながら叫んだ。

「まだ気絶してなかったのか。しぶとい野郎だ」

遠時は笑顔から殺意のある顔になり拳を握りしめ、しっかりと相手を見た。

男は刃となった手を乱暴に振る。その一撃は完全に遠時を捕らえていた。

「死ねー！」

「残念だがそれは無理だ。止まれ」

遠時が目を見た瞬間、男の時が止まった。

「これで

遠時は拳を引き力をためた。

「終了だ！」

男は遠時のアッパーカットにより宙にういた。

「俺の勝ちだ」

拳を上にあげ、堂々と言い放った。

デステイニーチョイス

自分の寿命の10日間を払い自分が見据えている生物の時を1秒間だけ止められる能力。

「自分の命を払って使う能力か…」

絵里は昨日、遠時に教えてもらった能力を思い出していた。  
通り魔の男に勝った後、カードを私に渡して

「俺は疲れたから帰って寝るよ。また明日学校で」と言って帰ってしまったのだ。

（何のつもりかしら。勝ったのは自分なのに）

ブツブツ呟いているとその本人が自転車に乗って伸びをしていた。

「ちよつと神谷君！」

慌てて駆け出して遠時のもとに向かう。

「おつ、香美市か。おはよう。」

遠時はあくびをしながら呑気に言った。

「おはようじゃないわよ！なんでカードを私に渡したの？」  
めんどくさそうにこつちを見る。

「香美市。」

「なによ」

ニツと笑いペダルに足をのせハンドルを握りしめる。

「後ろに乗れよ」

最大の笑顔の遠時。

「えつ、えつと…何？」

「ほら、速くしろ」

絵里は遠時の自転車にまたがり二人乗りで学校に向かった。

しばらくは遠時のペダルをこぐ音だけが聞こえていた。

「ねえ。どうして協力してくれるの？」



しばらくの無言

そして遠時は口を開いた。

「別に理由なんてないさ。ただ、自分のクラスメイトが困っていて自分に助けられる力があっただけだよ」

遠時は前を向いてひたすらに全進しながら笑いかけた。

「お人好しのね」

絵里は微笑んだ。

「ああ！かなりのな」

「それなら、まだ協力してくれるかしら？お人好しさん」

「考えとくよ」

二人は笑い合いながら学校の門をくぐった。

## 第二話『険と翼と救済者』（前書き）

通り魔事件以来、香美市絵里と協力して戦う事になった神谷遠時。  
ある日、香美市が跳ばしたボールを探している遠時は不思議な女性  
に出会う。

夢を叶える戦い ゲットバトルドリーム の新たな幕が開く!!

## 第二話『険と翼と救済者』

夕焼けが照らすグラウンドに俺

「神谷遠時」は立っていた。

少し前まではどこにでもいる普通の高校生であった。しかし、あることをきっかけに転校生に殺されそうになったり、時を止めることができるようになったり、犯罪者と殺し合いをすることになったりとさんざん日々をすごすことになってしまった。

「ちょっと、なにばさつとしてんの。いくわよ」

少し茶色の混じったロングヘアーの彼女

「香美市絵里」である。

遠時をカッターで殺そうとした張本人である。今は和解し、仲良く野球をする仲である。なぜ野球をするかは不明。

香美市はボールの持った手を大きく振りかぶった。そして、遠時に向けてものすごい速さで投げつけた。

ビューン

ブン！

見事な空振りだった。

ボールは遠時の背後にボトボトと転がり後ろの壁にぶつかった。

「三振！ 交代よ。まったくやる気あるの？」

砂ぼこりを蹴り上げながらバッターボックスに歩いてきた。

「二人なら普通、キャッチボールだろ？」

バットを地面に放り投げて遠時はピッチャーマウンドに歩いていった。

「キャッチボールしても野球をしたとは言わないわ」

「意味がわからん！ お前は野球がしたいのか？」

「違いわよ！これは戦いの時に必要な運動能力を鍛えてるのよ」

香美市は顔を少し赤めながら否定した。

（なんかこいつ前よりわかりやすくなったな）

初めてあった時とは大違いな態度に笑みがでる遠時であった。

「ほら、さっさと投げなさい！」

香美市はバットをブンブンと素振りしている。

遠時は落ちているグローブとボールを持った。

あの戦いから俺と香美市の仲は良くなり、夢を叶える戦いゲットバトルドリームに二人で協力して参加している。

（香美市と協力してけっこう参加者を倒してきたけど、最後の日は何時なんだろうな）

「は！ や！ く！ 投げろって言うてんの！」

絵里の素振りが空中から地面に変わって土をえぐっていた。

「わかったわかったほらいくぞ」

ボールをしっかり握りとりあえず全力で投げてみた。

カキーン！！

（ああ、いい音がしたな）ボールは遠時の頭を通りこし、校舎の方に飛んでいった。

「やっぱ俺が捕りに行くのかよ」

ボールが在るであろう所で搜索している人物が一名。ピッチャーの遠時である。

バッターの人物は打たれる方が悪いなどと、まったくもって意味のわからん屁理屈をこね、一緒に探すという合理的な選択は、彼女の頭の中では存在せず、打った張本人は影で自販機のジュース（これも俺が無理矢理おごらされた）を飲みながら優雅に休養をとっているのである。

「あれー？ 確かこの辺のはずなんだけどな」

あたりを見回しながらボールを探す遠時。  
なかなか見つからないため香美市が怒ってそうだな、っと考えていると後から車輪の回る音がした。

「探しているのわ、これ〜？」

振り向くと車椅子に乗った短髪の女性がいた。

彼女の手には香美市が飛ばしたであろうボールが握られていた。

「えっと、あの、そのボールなんですけど…」

「このボールが当たって脚がこんななったわ」

「ええー！！؟؟」

（嘘だよね？嘘でしょ？嘘であって下さい。お願いします！）

「どう責任とってもらおかな」

車椅子の女性は腕を組みながら維持の悪い笑みをうかべた。

「えっと〜その〜すいませんでした？」

「なんで疑問文！」

「すいませんでした！！」

大声で叫ぶ遠時。

車椅子の女性はクスクスと笑いながら

「冗談や。本気にしんといて〜や」

「やっぱり遊ばれてましたか！」

遠時も自然に笑っていた。

初対面とは思えないほど彼女とは馬があっていた。

「君、おもしろいなあ。私、三年の音羽みゆき。君は？」

「俺は二年の神谷遠時です。先輩だったんですね」

頭をかきながら言った。

「そうやで。ちゃんと敬まいや」

苦笑いをしつつ

「ハイ」と答える遠時であった。

「で、なんでボールが飛んできたん？その姿は野球部じゃないやろ？」

「ハイ。友達と野球してたらそいつ無茶苦茶に打ちやがったのに俺が捕りにいくことになったんですよ」

（ハハハ。マジで笑えね〜）

「フフフ。おもしろい友達やな」

みゆきはニコニコしながら

「気を付けなあかんで」

と言つてボールを遠時の手に渡した。

「ありがとうございます。あの、音羽さんは

「音羽じゃなく、名前で呼んで」

話の途中で素早く訂正させられた。

（出会つて五分でそこまでの仲！？）

「じゃあ遠慮なくみゆきさん」

戸惑いながらもさん付けで呼んでみる

「うん。で、なんやっただけ？」

「こんなところで何してたんですか？」

ここは校舎からけっこう離れており、近くには運動部の部室ぐらいしかない。

車椅子の彼女が何をしていたか気になって当たり前だった。

「ああ、そんなこと」

みゆきは車椅子を手でまわした。

「私は弓道部の部長やねん」

「弓道部？」

遠時はみゆきの車椅子を後から押した。

「そうやで。もしかして遠慮君、弓道部あること知らなかったん？」

みゆきの驚きの声に先ほどと同じように苦笑いしつつ

「ハイ」と答えた。

「なんで知らんにゃー！けっこう表彰とかされてたやん」

「イヤ、表彰式は何時も寝てましたから」

表彰式以外でも、朝礼、集会、ホームルームですら遠時は爆睡している。

「なんか今の一言、ものすごくイラつときたわ」

「ごめんなさい」

車椅子を押しながら頭を下げる遠時。

「じゃあ罰として弓道部の見学に来ること」

みゆきが人差し指を立てて言うが

「あのー、弓道部ってどこで活動しているんですか？」  
ズル！

車椅子から脚をすべらしかけるみゆき。

「ハァー。ここまで知られてへんとは、ガックリや」  
ため息を吐いて肩を落とす。

（やべー！マジでガツカリしてる）

慰めの言葉を探す。

「あつ、そーだ。俺前から弓道やりたかったんですよ」

「なんか嘘臭いな」

「そんなことないですよ」

（ハゝイ。大嘘でーす）

もう誰か助けて！と願っていると願いが通じたのか、

「じゃあ見学来てな」っとみゆきの機嫌は直っていた。

「弓道場は運動部の部室裏にあつて、剣道場の横やで」

「へえー。そんな所にあつたんですね」

「ちゃんと来てや。あつここで止めて」

止めたのは校舎の中の下駄箱付近だった。

「私これから病院やからここでお別れや。車椅子、押してくれてありがとう。友達またしたらあかんしもう行き」

みゆきは器用に靴を履き替えながら手をふった。

「バイバイ遠時君。見学来てや」と言つて車椅子を押して校門前のおそらくは自家用車であろう車に向かっていった。

「なんとも不思議な人だねえ」  
遠時はボールを指の先で回しながら、かなり遅くなってしまつて怒つてゐるはずの香美市への言い訳を考えながらグラウンドに向かつた。

「おかえり遠時。今日は遅かつたな」

10対3のあまりにも白熱しない試合を終え、香美市の高々な勝利演説を無視し、家に帰ると母がおらず姉が台所に立っていた。

「もしかして姉貴、料理と言うものをしていますか？」

「仕方ないだろ。母さん仕事で朝まで帰らないんだから」

姉はニンジンをでこぼこに切つて鍋の中に入れた。

本人はカレーを作るらしいのだが、こちらから見ればサリンでも作つてゐるんじゃないかと疑問のあがる臭いが鍋からただよつてきた。

「出前をとることに一票！」

「私の料理を食べることに十票」

「選挙権は一人一票では！？」絵里にも勝る横暴が現れた一瞬だった。

（まずいぞ！まずい。非常にまずい。姉貴が料理するのはいろんな意味で不味い）

姉が台所で料理している姿を後から眺めながら最大のピンチにおちいつていた。

姉の料理は不味い！、どんなことよりも立証できる真実だった。

（こうなつたらデステイニーチョイスで姉貴の時間を止めて…駄目だ一秒止めただけで十日も無くなるんだぞ。こんなところでつかえねーつづの。あつてもここで死んだら終わりか。あーどうすればいいんだー！！）

数々の考えが遠時の頭の中を駆け巡っていた。

「ほら、できたぞ」



テーブルの上に妖しい湯気をたてる物体が置かれた。

「せっかく作ったんだから食えよ」

姉の一睨み。

何も言えない遠時はかんねんしてイスに腰かけた。

「いただきます」

「痛だ来ます」

「お前私にケンカ売ってんのか？」

姉の言葉を聞かず無言でスプーンを取る。姉もあきれたのかスプーンを取って食べ始めた。

スプーンですくって口にはこぶ……ゴフウー！

（口の中が熔けとる！？）

「ホントに失礼だよな、お前」

姉はパクパクとカレーもどきを食べながら嫌な目をしてこちらを見た。

「ちゃんと食えよ。残したら殺すから」

（食っても死ぬから。それよりなんで姉貴は大丈夫なの？）

姉はなんともない様子でもうほとんど食べていた。

（蛇の毒は蛇にきかないってことか）

遠時は覚悟を決め毒物（自称）を口にはこんだ。

次の日、俺こと神谷遠時は腹痛で学校を休むことになった。その腹痛があまりにも激痛なため、遠時は病院に足を運んでいた。

病院には平日なのにけっこう人がおり、待っている間、雑誌をパラパラと見ていると前から声をかけられた。

「やっぱり遠時君やん。今日はどうしたん？」

私服を着て車椅子に乗った優里さんとその後ろに黒髪でポニーテールの遠時と同じ制服を着た女性が立っていた。

「いや、昨日食べたものが悪くてお腹壊したんですよ」

少し違うがだいたいはあると思った。でも、それが姉の作ったものとは言えなかった。

「それはお大事に」

みゆきは気の毒そうな目をして言った。

「いえいえ。けっこう大丈夫ですから。それより後ろの人は？」

「ああ、この子は私と同級生の雫緑さんやで」

「初めまして。雫緑です」

「神谷遠時です。あの、二人はどんな仲なんですか？」

「緑とは小さい頃から友達やったんよ」

みゆきは笑顔で言った。

「まあ、いわゆる幼なじみですね」

緑が続けて言った。

「緑は剣道部の主将なんやで」

「えっ、そーなんですか。弓道部部长と剣道部主将の組み合わせですか」

「そやでーすごいやろ」

みゆきは胸を張り緑は照れていた。

「神谷遠時さん。奥の部屋にどうぞ」

ナースの女性にカウンターから呼ばれた。

「じゃあ俺いつてきます」

遠時はイスから腰をあげる。

「うん、行つてらっしゃい」

「行つてらっしゃい」

みゆきは手を振り、緑は頭を軽く下げた。

検査の結果、食中毒である事が判明した。

かなりの毒性で医者に

「いったい何を食べたんですか!？」とせまられ、嘘を並べるのに苦労した遠時だった。今は回復しており薬を飲んで今日は安静にし

ておけば明日には学校に行けるそうだ。

待合室に戻ると雫緑が一人で座っていた。

「お疲れ様です。どうでしたか？」

「なんともなかったです。今日、安静にしとけばいいらしいですから」

「それはなによりです」

緑はにこやかにこちらを見る。

大人の女性だ！…遠時の感想。

「あれ、みゆきさんはどこに？」

周りを見てもどこにもいなかった。

「みゆきならあっちの部屋で脚のリハビリです。彼女、毎週一回この病院でリハビリしているんです」

「へえーそうだったんですか。みゆきさん脚はどんなかんじなんですか？」

その質問に緑は少し深刻な顔をして言った。

「彼女の病気は急なもので治らないわけではないんですが、リハビリにかなりの苦勞をする必要があつて苦痛かと」

緑は自分のことのように悔しそうだった。

（それなのにあんなに明るくできるのか。辛いはずなのに）

遠時は校舎であつた時のことを思い出した。

「ところで、緑さんは学校行かなくていいんですか？」

今まで聞くのを忘れていた。同じ学校なら今日は普通に授業がある日だ。

「ああ、それなら心配いりません。私は今日、特別に休むことを許可されています」

「なぜ？」

そんな裏技みたいなのがこの世にあるのか。

「今日はみゆきの家の親がどおしても一緒に病院へいけなくて、代

わりに私についていつてほしいと頼まれたので、そのことを学校に話すと特別に許可がてました」

「なるほど。学校もなかなか優しいな」

遠時は学校に連絡すらいれてないので欠席扱いである。

「二人の家は近いのか？」

「ハイ。歩いて五分もかかりません。遠時さんの家はどの辺りなんですか？」

「えっと、俺の家は場所を言う。」

「まったく逆の方向ですね」

聞いてすぐさま言った緑の言葉に少しガツカリする。

家はかなりきつい坂の上にあるのであまり人は住んでいない気がする。て言うか俺もあの家はけっこう嫌いだ。コンビニに行くためにいちいち坂下りて、帰りの坂登りきった後は汗だくだくだし、なにぶん不便である。

「俺はもう帰ります」

病人であるし腹痛もまだする。

「そうですか。お大事に」

そう言つてわざわざイスから立ち上がって頭を下げてきた。

（律義な人だな）

勝手に遠時の頭も下がっていた。

遠時は目を覚ました。

「寝過ぎだな。今何時だ？」

ベットから身体を起こして時計を見る。

「げっ、夜中の二時かよ。それよりも腹減った」

家に帰ってからずっと寝ていたため昼ごはんも晩御飯も食べていなかった。

「なんか冷蔵庫にあるかな」

遠時がベットから立ちあがったその時、  
ドゴーン！！

轟音と同時にトラックがつかっんできたように遠時のベットごと部屋が吹っ飛んだ。

「???!!」

あのまま寝ていたらこの世にはいなかっただろう。

「くそつたれ！俺の家族を殺す気かよ」

遠時は穴のあいた部屋から辺りを見回した。そして坂道ではなく駅に続く裏の道に人影を見つけた。

「逃がすか」

勢いよく部屋の扉をあけ靴を履き駅に駆け出した。

（電車で逃げるきか？）

遠時は踏み切りを渡ろうとする脚を止めた。

この暑い夜中にコートを着て頭をかくしている人物がそこにはいた。考えれば解ることだった。終電の時間はとくに過ぎている。それなのにここまで奴が逃げた理由

「はめられたな」

苦笑しながら遠時はつぶやいた。

この近くにはあまり人が住んでおらず、終点の駅とあればなおさらだった。

「俺を殺すには絶好の場所ってか？」

コートの人物はなにも言わず、ただ立っていた。

「無視かよ。て言うか来るならこいよ。早くしないと誰か来るかもしれないぜ？」

遠時が両手を挙げて挑発した瞬間、頭に強い衝撃を感じたと思うとそのまま身体ごと吹っ飛んだ。

「グウーツ！」地面にぶつかりながらも体制をととのえ前を見る。

（何が起こったんだよ）

コートの人物は遠時がいた場所に立っていた。

「今、俺に何したんだよ？」

コートが身を縮めたと思うとロケットのように迫ってきた。  
目の前で止まる。

（蹴りが来る！）

とっさに守った手にコートの蹴りが当たる。

ギギー！

腕に鈍い音になる。

後から来る激痛！

遠時は痛みをこらえながら左手で拳を作り振り抜く。

当たった！と思った瞬間、胸に痛みがはしる。

（先に膝蹴りを当てられた？）

コートは身体を回し、左脚で蹴りを放つ。左アバラに直撃！

そしてコートは脚で強く地面を蹴り、そのスピードのまま右膝を遠時の顎に当てた。コンクリートの地面を何度も転がり壁にぶつかり止まる。

壁にもたれたままコートを見る。

（相手の目を見なかったら止められない）

すでに鼻や口から血がでておりアバラも右腕もヒビははいっているはずだ。

（やばい！）

顎をやられたせいた頭がクラクラしてまともに相手も見れない。

「時間を止められるから勝てる」そんな自信があったのかもしれない。しかし、現実はこのざまだ。

「見えなきや意味ないよな」

声を絞りだして言う。

ゆっくりと近ずいてくる。

もう、終わるか

コートの動きが突然止まった。

「ずいぶんと情けないカツコね、遠時」

上からの声に見上げると香美市絵里が壁の上で腕を組んでこちらを見ていた。

「私のパートナーたるあなたがそんなんでどうするのよ」

「黙れ。パンツみえてるぞ」

「変態」と言つて壁から下りてきて横に立った。

「なぜお得意のデステイニーチョイスを発動しないの？ああ、目が合わないから使えないのね。役に立たないわ」

手を振りヤレヤレとポーズする。

「よくしゃべる奴だな。お前こそ何でここにいるんだよ」

「簡単よ。私は夜型で眠れないからこうやって町を徘徊してるの」

「それらしい理由に聞こえるけど、ほんととはただの不健康な女子高生じゃねーかよ」

「うるさいわね。さつさと死になさい！」

「何しに來たのお前！？」

その時、爆音と共に土を蹴りあげ、コートが高速で近ずいてくる。

「やつと來たわね」

香美市もコートに向かって走り始める。

「香美市そいつはむちゃくちゃ強いぞ」

コートが脚を振り抜こうとする。それに合わせて香美市も脚を振り抜く。

二人の脚が当たる。

続けて遠時の時と同様の膝蹴り！

香美市はあの速さを見切りカウンターでコートの右胸に蹴りをいれる。

コートは予想外の攻撃に動揺したのか、後ろに大きく跳んだ。

「お前、そんなに強かったのか？」

ただいつも威張っているだけではなかったようだ。

「当たり前よ。あなたのような変態撃退のためにテコンドーを習っていたのよ」

「俺は変態じゃねー！！」

「大きい声をださないでよ。近所迷惑よ」

香美市は冷たい目でこちらを見る。

本当に口と行動が一致しないやつだ。

「さてと、そろそろ終わらせましょうか」

絵里は指をならしてコートを睨む。

コートは香美市に向かって来るわけでもなく、背を向けて去っていった。

「ふん！根性ない奴ね」

鼻を鳴らして腕を組んだ。

「助かった。痛っうー！」

気を抜いた瞬間、身体中に痛みが走った。

「大丈夫よ。視たところ骨は右腕しかヒビは入ってないし、後はほぼ内出血よ」

「ぜんぜん大丈夫じゃない！」

「ああもうー！うるさいわね。私は帰って寝る」香美市は後ろを向き大股で帰ろうとする。

「ええー？俺このままおいてけぼり？ちょっと香美市さんー！」

一人の怪我人の声が夜の駅に響いた。

目覚ましの音でベットから目を覚ます。

昨日、部屋が破壊された言い訳を考えながら家に帰っていると、完璧に直っている我が家とこの戦いの主催者である黒フードの男が家の前に立っており、

「一般人に知られるわけにはいかない」と言い残して歪みの中に消えていったのであった。

（まあ、家が直って家族にもバレずによかったけどな）

遠時は右腕を包帯で固定していた。

ほんとは休みたい所だが、

「また一人の時に狙われたら困るでしょ」と香美市に言われたので泣く泣く学校に行くしかないのである。



学校につくとクラスメートの勝岡が話しかけてきた。

「遠時、どうしたんやその腕？」

「ノーコメント!!」

勝岡の質問を一蹴する。

「何でや! ブーブー」と勝岡が言っている時にクラスの扉から香美市絵里が入ってきた。

思わず目が合う。

「ふん!」

昨日と同じように鼻を鳴らして自分の席に着いた。

(心配ぐらいしろよ)

自分のパートナーに悪態を心の中で呟く遠時であった。

授業が終わり、下校の時間になった。

「遠時、今日どうするの？」

彼女の手にはバドミントンのラケットが二本握られていた。

ここで何もないと答えるとバドミントン確定だったので急遽、みゆきに誘われていた弓道部の見学に行くことにした。

そのことを話すと包帯を巻いている右腕にラケットでスマッシュされた。

ハッハッハ! もう痛みを感じない……あれ? おかしいな涙がでてきた。

涙をこらえて弓道場に脚をはこんだ。

弓道場につくとそこにはみゆきの姿がなかった。

(あれー? 部活来てないのかな?)

遠時は弓道場をうろつくと往復していた。

「あつ遠時さん？」

後ろからの声に振り向くと雫緑が剣道具を着けて立っていた。

「優里さんに部活の見学に来いと言われまして」

「そう。みゆきは今日お休みなのよ」

「えっ、どうしてですか？」

昨日はあんなに元気だったから信じられない。

「くわしくは知らないけど今日、みゆきの家に行ったら熱がでてるから行けないってみゆきのお母さんが言ったの」

「へえー。昨日、リハビリ頑張っていましたからね」

「みゆきは頑張り過ぎなのよ。いつも無茶するんですよ」

珍しくむきになる緑。いつものクールさはなかった。

「みゆきの脚は大会の決勝前日にいきなり発症してね、その大会も部長が抜けたせいでみんな集中できなくて負けちゃったの」

「そんなことがあったんですか」

緑は頷き弓道場の方を向いた。

「あの子も責任感じちゃってるみたいで、無茶してるみたいなの」

（あの笑顔の下にはそんな苦悩があったのか…）

遠時は弓道場に少しだけ顔をだすことにした。

弓道部員の温かい歓迎を感じた気がした。

弓道部員と少しの時間話して遠時は帰路についた。

帰り道のコンビ二には思わぬ人がいた。

「よお少年。怪我は大丈夫か？」

自称『神』と名乗る黒フードの男がいた。

「こんなとこで何してるんだよ？」

「イヤ、財布落としちゃて、おごってくれない？」

「フッフッフッ！俺は学校には財布を持っていかないことにしたんだよ！！」

主に盗難防止と香美市に無駄金を使わせさせないためである。

「ケチが！地獄に墮ちろ！！」

「お前が言つとホントに墮ちそうだからやめて」

ふん！と鼻を鳴らして「使えねー！」とブツブツ言う自称『神』。

「用がないなら俺は帰るぞ」

自転車のペダルを踏む力を強くした。

「まあ、ちよつと待てよ」

「何なんだよ！用件は何？」

「敵が誰かわかっているのになぜ殺しに行かない？」

黒フードはゆつくりとはつきりと見透かすように言った。

「何の事かさっぱりだな」

「とぼけるなよ。いつもみたいに殺しに行けよ。自分の夢を叶えるために」

「黙れ」

静かに言い放つ遠時。

「それとも今までさんざん人をキズつけておいて知り合いは殺せません、か？」

「黙れって言つてんだよ！！」

今度は激しく怒りをこめて黒フードに右拳を振り抜く。が、意図も簡単に止められる。

「怒るなつて、悪かったよ」

黒フードの男は謝りながら自分の後ろに歪みを作っていく。

「お前みたいな甘い奴にサービスで教えてやる。カードを今持つてるか？」

遠時は拳をおさめて質問に答える。

「持つてるけどなんだよ？」

「そのカードが自分の手元に無ければ能力は発動しない」

「な！？」今までなんとなく自分が持つてる方が安全かな～と思つてそうしてたけど

「そんな大事なことは先に言え！」

まったくである。

「それともう一つ」

男は歪みの中に消えながら言う。

「お前の能力は時を止める事じゃないぞ」  
「またしても大事なことを今更言っ」  
「今度は突っ込むヒマがなかった。」

次の日

「遠時」

「せいやー！」

「ぐぼおー！」

学校に行くと勝岡が飛びかかってきたので回し蹴りで応戦した。

「なにすんにや」

「えっいや…ごめん条件反射で」

目付きの悪い奴がいきなり襲ってきたら誰でも蹴るだろ。

「そんなことより。遠時、今日俺の代わりに文化委員の集まり行ってく」

「やだ、無理、拒否」

「人の話は最後まで聞こうよ。今日どうしても早く帰らなあかんねん。お願いします」

頭を下げて頼む勝岡。

用事は得にないが、めんどくさかった。

「遠時、今日はヒマなの？」

勝岡の後ろから絵里が話してきた。その手にはバスケットボールがおかれていた。

さあ読者のみなさん選ぶ選択肢はもちろん

「勝岡！その頼み引き受けたぜ！！」

「ホンマ〜！？遠時大好きや」

「どりやー！」

「ギャース」

またもや飛びかかってきた勝岡に条件反射が発動した遠時であった。

「そう言うことで今日は用事があるんだよ香美市」

「死ねー！」

バスケットボールがみぞに直撃！

放課後、遠時は文化教室に向かった。

もともと委員会に入っていない遠時にとって専用教室は初めてだった。教室に入ると車椅子に乗ったみゆきがいた。

「みゆきさん。文化委員だったんですか？」

「うん、そうやで。遠時君は文化委員とちゃうやろ？」

みゆきは笑顔で答えた。

元気そうには見えた。

「友達の代理できたんですよ。それよりも熱は下がったんですか？」

「うん、心配かけてごめんね。もうぜんぜん平気やし」

両手を挙げてアピールする。

そのすぐ後に三年生の委員長が来て委員会が始まった。

委員会の内容は今度の文化祭のプログラムを明日までにクラス分作ることであつた。

プログラム用紙が配られ委員会が終了して、みゆきの方を向いてみると困っている顔をしているようだった。

お人好しの出番である。

「みゆきさんどうかしました？」

さりげなく聞いてみる。

「明日、リハビリで学校来ないから今日中にクラス分のプログラム一人で作らなあかねん」

みゆきはかなり困った様子だった。

「それなら俺手伝いますよ。俺、代理なんで明日文化委員の奴に渡したらいいだけですから」

委員会に代理で出席してやっても勝岡のためにそこまでしてやる義

務はない。

それに、時計は4時半を指している。一人でやれば何時間かかるかわからない。

「ほんまゝ？助かるわゝ。緑が部活でいないからどうしょと思ってん」

みゆきの心からの笑顔が遠時は正直には受けなかった。

開始から二時間半が過ぎ時計の針が7時になっていた。

「想像以上に時間がかかりましたね」

みゆき一人でやっていたら何時間かかったことだろう。

「うん。手伝ってくれてありがとうなあゝ」

帰り支度をしながら笑顔で言った。

作業中は時々話すぐらいで黙々と作業をしていたため久しぶりに話した気がした。

「あつ、私部屋にノート忘れてきたわ」

「明日来ないんだったら、取りに行った方が良いですね」

「一緒に行ってくれる？」

「もちろんですよ」

遠時はみゆきの車椅子を押した。

夜の弓道場は暗く静かだった。

「校内だつてのにここはまるで別空間だな」

遠時は弓道場の的を見ながらつぶやいた。

みゆきが更衣室にノートを取りにいつている間、弓道場で待っている遠時。

（きつと俺の考えは間違っているはずだ）

そうあつて欲しいと思った。

「おまたせゝ。ノート見つけたよ」

更衣室から車椅子を押しながらみゆきは出てきた。

「そうですか。じゃあそろそろ帰りましょうか」

時刻は8時を過ぎていた。生徒はすでに帰っている時間で教師も帰りだしている時間である。

「それよりさ、遠時君」

みゆきは的が置いてある芝生に車椅子を進めながら言った。

「なんですか？」

「どう、この弓道場。すごいやる？」

両手を大きく広げる。

「そうですね、俺は弓道場なんて初めて見ましたよ」  
簡単に答える遠時。

みゆきは先程よりも、もっと先に車椅子を進める。

「やる」。ここの弓道場は高校でもすごい方なんやで」  
車椅子を止めるみゆき。

話の内容がまったくわからない遠時。

（いったい何が言いたいんだ？）

「こんなすごい所で弓道できてよかったわ。でも、なんでこんなことになってしまったんやろなあ」

みゆきは自分の脚をさすりながら言う。

ここからではみゆきの表情が見えない。

「ねえ、遠時君」

今まで聞いた声の中で一番静かな声で言う。

遠時は言葉を返すだけだった。

「なんですか？」

静かな風が吹く

「なんで死なへんかったん？」

みゆきのノート中からゲットバトルドリーの参加書が取り出された。

「これ何か分かるやろ」

車椅子ごと振り向くみゆき。その顔は笑ってはいなかった。

「さあ？なんかの会員証ですか？」

とぼけてみる。

「そうやね。夢を叶える会の会員証かな」

笑って言うみゆき。目はまったく笑っていない。

「気付いてたんやろ？今日、私に対する態度おかしかったもん」  
車椅子を近ずける。

「正直に言つてよ。遠時君は何時から気付いてたの？」

みゆきの目がこちらを睨む。もう、逃げられない。

「初めからですかね」

遠時はみゆきの目を見て言う。

「へえー。どうして？」

「まず、俺の家が狙われたってことです。俺の家はけっこうわかりにくくて知ってる人少ないんですよ」

「それで？」とみゆき。

「俺は病院で会った日、緑さんに家の場所を言いました。その夜に敵が来るなんておかしいでしょ？」

「確かにそうやな」

うんうんと首を振るみゆき。

「でも、それやったら疑うのは私じゃなくて緑じゃないの？」

正論を言う。

「そうです。でも、俺の部屋が吹っ飛ぶ時、一気になくなるって言うよりも一直線に貫通する感じだったんですよ。まるで弓矢みたいに」

事件の現場を知る本人が言う。

みゆきは静かに笑っていた。

「それともう一つ緑さんはこの戦いに参加する理由がない」

「それは確証なん？」

「いえ、勘ですよ」



お人好しのね

遠時の話が終わる。

みゆきはゆっくりと上を向き、意を決した様に車椅子から立ち上がろうとする。

「ちよつと、みゆきさん!？」

驚いてみゆきのもとに駆け寄ろうとしたその時、

みゆきは何の苦悩も何の痛みも感じる事なく、普通に地に足をついて立っていた。否、浮いていた!？

その背中からは羽が　美しい翼が現れた。

「『エンジェルコンタクト』」

みゆきは静かに告げる。

「発動中、自らを天使もどきにできる能力や」

みゆきは言う。そんな嘘のような馬鹿げたことを

「天使ですか。あんまり信じられないですね。神様はいるって思っ  
てないんで」

「この戦いの主催者が神様やのにか？」

につこりと笑って言う。

「確かにそうなんですけどね」

(だから信じてないんだよ)

みゆきの頭の上にはマンガなどでもよくでている天使の輪が浮いていた。

その姿は少なからずも天使に見えた。

車椅子の後ろの部分から弓を取り出す。

そして、自分の羽を一枚ちぎる。その羽は矢の形に姿を変えていく。

「遠時君、あなたがこの戦いをやめると言うのなら私にカードを渡して。そしたら危害をくわえないと約束する」

弓を引き狙いを定めるみゆき。

ここで言う通りにすれば何もないだろう。しかし、遠時にはそれはできないことだった。

「すいませんみゆきさん。俺は無理です」

少し後ろに下がりながら距離をとる。

「やっぱりか」

言いみゆきは矢から手を放した。

ビューン！！

風を切る鋭い音と共に矢は遠時に向かう。

大きく横に跳び矢をかわす遠時だが、矢は遠時の右脇をかすめ血をあげる。

（デステイニーチョイスでみゆきさんを止めてカードを奪うしかねえ！）

覚悟を心の中で叫び前を見る。その瞬間 二本目の矢が遠時の右足をえぐっていた。

「ぐうー！」

うめき声をあげるも休む暇なく矢が放ち続けられる。

一本目避ければ二本目が来る。二本目を避ければ三本目が来る。みゆきの目を見るどころか矢を避けるだけでも精一杯であった。

「くそ！ 死んでたまるか！！」

弓道場の柱に跳び、矢を避ける遠時。

何本かの矢は柱に刺さる。

自分の能力もそれなりに卑怯だが、矢の数に制限がなくて空飛べるのは反則だ。

「あつ、そや遠時君。言い忘れてたことがあった」

雨のような矢を射ち続けながら言う。

「なんですか？天使のお言葉、ありがたく頂戴します」

半場やけくそ気味で挑発する。

「遠時君の推理、確かに当たってる。でもな、一つだけ間違ってるよ」

みゆきの放った矢が柱を貫通して遠時の顔の横に刺さる。

「へ、へえー。どんな間違いですか？」

裏返った声で聞く。

「簡単なことや。遠時君を襲ったコートの人物は」その瞬間、矢の雨が止まる。

「脚が地面に附いてた？」

あのコートの人物は確かに脚が地面に附いていた。しかし、みゆきの脚は浮いている。天使のように浮いている。

頭に強い衝撃を感じた。

世界が回る。

身体が痛む。

必死で前を向く。

そこには一本の木刀を持った雫緑がいた。

「不意打ち失礼します。神谷遠時さん」

緑は何時もと変わらぬ顔でこちらを見ていた。

初めにみゆきの能力を見たときにきずくべきだった。襲われた時、脚が地面に附いていたならあれはみゆきじゃない。あの日遠時の家の場所を知っているもう一人の人物。雫緑だ。

「遠時さん。今すぐカードを渡してください。貴方を傷つけたくありませんから」

緑はゆつくりと遠時の目を見て言う。

その目には一つの迷いもなかった。

「悪いんですけど無理ですってば」

遠時は脚に力をいれ立つ。

「どうして？ 貴方の願いはないはずよ。今、貴方が戦っている理由は香美市絵里のためなの？」

緑の質問。

けっこうしゃべるな、このひと。

「始めはそうでした。ところでみゆきさん。あなたの願いは何ですか？」

遠時の質問に少し戸惑うもはつきりと言う。

「決まってるやん。脚を治して欲しい」

「その病気は治ると聞きました。人を傷つけて叶える願いじゃない」  
(香美市の願いもな…)

「うるさい！ そんなん解ってる。でも地道に治してたら大会に間に合わへん」

「確かに大会も大事かも知れませんが、それで治ったとしてみゆきさんは前見たいに弓道ができるんですか？」

遠時の叫び声にひるむみゆき。

「でも、でも、早治さな…早く治さへんかったらまた部員のみんなに迷惑がかかる。気をつかわせてしまふ。邪魔になつてしまふ」  
呼吸を上げながら必死に訴えるみゆき。

「迷惑なんてかかってないですよ。俺、みゆきさんが休んでる時に弓道部に来ていろいろ話したんですけどみんな始めにみゆきさんのことを誇らしげに話してましたよ。部長はすごい。かつこいいつて」  
「ほんまかそれ？」

目を見開くみゆき。

「本当です。誰もあなたを邪魔だと思っていけません。だからこんなことやめてください」

「でも、あの、その」

「夢は自分の手で叶えるものです」

みゆきは混乱している。今までしてきた事すべてが間違いだときず

いてしまった。

「ああああああああー！！！！？？？」

頭を押さえて抱え込むみゆき。

「みゆきさん！！」

駆け寄ろうとする遠時を一本の木刀が遮った。

「なんのつもりですか？緑さん！」

睨み付ける遠時。

「みゆきをこれ以上苦しめないで」

緑の木刀が横に振られる。

右手を上には上げガードをする。

激痛に耐えながら緑の目を見る。

しかし、緑の目線とは合うことはなかった。

（能力が知られている！？）

「もう少し考えて戦うことですね。貴方達の戦いは何度も見させてもらいましたよ」

遠時と香美市は何度もこの戦いの参加者と戦っている。

（見られてたとは思わなかったな）

遠時の後悔もつかの間に緑はすでに後ろにまわっていた。

ブーン！！

女子高生とは思えないほどの速さで振り抜かれた木刀が遠時の右頬をかする。

「痛っうー！」

頬からは赤い血が流れていた。

「私の能力は『ユーセイバー』」

遠時の目の前に現れる。

「その力は」

何度も振り下ろされ、振り抜かれる木刀！！

遠時はただ防御を繰り返す。

「高速移動です」

後ろからの声と共に首を切断されたような痛みが走る。

遠時は体を引きずりながら距離をとる。

（くそ！目が霞む）

ボロボロの身体で立ち上がる。

「立たないでください。もう貴方を斬りたくありません」

緑の勝ち誇った目を向ける。

その目が、どうしてもその目が許せなかった。

「みゆき！！早く弓を放ちなさい！」

緑の激しい叫び声。

みゆきはビクツと身体を震わす。

「でも、でも私の理由で人を傷つけたらあかなくて」

「敵の言ったことです。気にする必要はありません！貴女には叶える夢があるんですよ」

みゆきの言葉を制する緑。その顔は普段では考えられないほど乱れていた。

「えっ、あ、そうだ。そうだよ敵の言うことなんて聞かなきゃいいんだ！！」

翼のはえたみゆきは弓を構え放つ！！

放った矢は空を切り遠時の左足に直撃した。

「がっ！　ぎあー！！！！」

足の肉がひき千切られる音が聴こえる。

矢は遠時の足を勢いを止めないまま貫通していく。

多量の血が足から溢れだす。必死で涙をこらえることも今では不可能になっている。

「え、遠時君？　だだ大丈夫よね緑」

みゆきの視線は血が溢れだす足に向けられ、動揺を隠せない様子だった。

「ええ。大丈夫私が次で終わらせるわ。遠時さん次に会うのは病院のベットです」

言い放ち高速で向かって来る緑。

遠時のボヤけた目でもはっきりと見えた。

（まだだ！まだ終われない。みゆきさんにはまだ言いたいことがある。緑さんにもちゃんと話がしたい。それに、ここで死んだら香美市にカツコつけられない。

俺はこんなことで - 終われない！！）

その瞬間、白と黒の世界が押し寄せた。

緑の殺気のある目、みゆきの焦りの表情、振り下ろされる木刀すべてがコマ送りのようにスローモーションで見える。

遠時は木刀の攻撃を難なく避ける。

緑は驚きの顔を見せ、後ろに下がろうとする。しかし、それすらもスローだった。

遠時の拳は緑の腹に刃のごとく突き刺さり、吹き飛ばした！！

「がはっ！？」

緑は理解ができなかった。瀕死の状態の男に自分の最大のスピードから打ち込んだ一太刀を意とも容易く避けるだけでなく、反撃を受けたことだった。

（どうゆうこと？彼は動ける身体じゃないはずなのに）

緑は脚でステップを踏みスピードを上げ遠時の周りを高速移動する。遠時の目はしっかりとそのスピードを追っていた。

緑のフェイントをいれてからの攻撃を遠時は軽く避け相手の顎に向けて拳を振り上げた！！

「ぐあっ！」

苦痛の声をあげながら緑は地面に倒れた。倒れた緑を見下ろす遠時。

緑は顔だけをゆっくりとあげ遠時を見る。

「卑怯ね。まだ何か隠していたなんて」

笑顔を作りながら言う。

「隠してませんよ。ただあの瞬間に自分の力の本質がわかっただけ

ですよ」

「力の本質？」

「俺の力は時を止める事じゃなくて時を外す事だったんですよ」

黒フールドの男に言われた言葉を考えた結果だった。

「時を外すって意味がよくわからないわ？」

「簡単に言えば何時も俺達が生きてる世界軸から少しだけ指定した物を外すんです」

「私よりズルい能力ですね」

緑が不貞腐れて言う。

「そんなことないですよ」

みゆきの方を見ながら返事をする。

みゆきは呆然とコチラを見いる。

「遠時さん」

緑が木刀を杖がわりにして起き上がりながら言う。

「なんですか？」

「私達のカードは貴方に差し上げます。だから、もうこれ以上みゆきに何も言わないでください」

木刀を支えにして何とか頭を下げる。

「すいません。それは無理です」

言い放ち、みゆきの方に足を進める。

みゆきは後ろに下がりながら弓を構える。

「来ないで！！それ以上来たら射つで」

みゆきの最大限の威嚇を無視し直進する遠時。

「う、うわー！！！！！！」

放たれる無数の矢。

だが、自分自身を世界軸から外した遠時にとって一秒は一分に思えるほどゆっくりと世界は動いていた。

無数の矢が遠時を避けるかのように通りすぎていく。

徐々に距離を縮まっていく。

「来るなって言ってるやん！！」



放たれる矢が遠時を囲むように降り注ぐ。

だが、遠時の足は止まらなかった。優里に一つの言葉を伝えるために――

矢は時に肩や膝にかするが直進を続ける遠時。みゆきは矢を射つのを止めていた。

目からはいくつもの涙がこぼれていた。

「みゆきさん。もう一人で全部背負わないでください」

遠時は静かに言う。

涙で溢れた目が向けられる。今まで誰にも弱さや辛さを話さなかったボロボロの目が向けられる。

「あなたは一人じゃないんです。俺や緑さん、弓道部員が側にいます。だから――」

言葉を切って優里を優しく抱きしめる。

天使の翼が消えた優里から伝わる涙。

「もっと俺達を頼ってください」

何にも頼らず自分の力で戦い続けた少女の戦いは終わりを告げた。

## 後日談

みゆきさんはゲットバトルドリームから辞める事にはならなかった。これまで傷つけた人の罪滅ぼしのために戦いをせずに最後の日を待つと言っていた。

緑さんも同じようなことを言っていたような気がする。

なぜこんな曖昧かと言うとみゆきさんの話を聞いた後すぐに倒れたらしい。

病院に運ばれ全治三週間と言う素晴らしい結果だった。

医者には階段から落ちたで突き通して、家族からの心配の言葉はもちろんなかった。

今は個室のベッドの上で退屈な土曜日をすごしているところだった。するとドアのノックもなく香美市絵里が入って来た。

「車に退かれたの？」

「階段から落ちたんだよ」

医者に言っただ通りの嘘をつく。

「へえー。よかったじゃない」

勝手に緑さんからの見舞いの林檎を剥きだす香美市。

お前は何かも持ってこなかったのかよ！！

「何がよかったんだ？」

不機嫌に言い返す。

「自分の力の本質がわかって」

ニヤーと笑う香美市。

こいつ初めから見てもやがったのか！！

「てめえ見てたなら助けやがれ！」

「そんなに叫ぶとキズ開くわよ」

剥けた林檎を皿にのせていく香美市。

「今回の戦いは私が手をだすべきじゃないと思ったのよ」

確かにそうである。今回の戦いは俺一人が勝手に始めたものである。

香美市はみゆきさんや緑さんの顔すらも知らなかったのだ。

「そうだな。悪かったよ。怒鳴ったりしてさ」

「じゃあ死んでちょうだい」

「俺はそんなにひどい事をしたのか！？」

クスクスと笑う香美市。しだいに自分も笑ってしまふ。

「遠時。私決めたことがあるの」

真面目な顔をする香美市。

「なんだよ」と答える。

「私、願いを叶えるの諦める」

真剣な眼差しをむけてくる。

「どうしてだ。俺がこんなふうになったからか？」

「違う。あなたがみゆきさんに言ったこと、私も考えたの」  
なるほどその事が。

「母さんが病気になったのは私のせいなのだから、自分の出来ることをしたいと思ったの」

「そうか」と短く返事をする。

詳しくは聞かない、深くは訪ねない。それが一番とわかっているから。

こいつは絶対に話さないだろう。自分と母親の話を…

それでもよかった。香美市がきずいてくれて、それが嬉しかった。

「そういえば、あなたの願いは何なの？」

林檎を食べながら聞いてくる。

「そうだな、俺の願いは」

少しだけ考える。目をつむり上を向く。

「こんなくだらねえ戦いを二度と起こらないようにすることかな」

香美市を見る。彼女は見事な笑顔でこちらをみていた。

「じゃあ私もその夢を叶えるの手伝っわ」

香美市は言う。当たり前のようにその言葉を言う。

遠時は笑いながら言った。

自分の一番の親友に言った。

「ああ。じゃあまた頼むよ香美市」

「任せなさい。私が協力するからには絶対に叶えるわよ」

香美市の雄叫び、遠時の笑い声。

土曜日の個室の病室では二人の賑やかな笑い声が響いていた…

### 第三話『正義と悪と生徒会長』（前書き）

学校の放課後、補習で残された遠時と付き添いの香美市の教室にあらわれたみゆきを追って来た人物は最強の生徒会長！？  
ゲットバトルドリームの三幕目がついに始まる！！

### 第三話『正義と悪と生徒会長』

月夜の暗がりの道に男の目が鋭く光っていた。

男は一人の人物を追っていた。

「この辺りか」

地面には敵の男のものと思われる血が居場所を教えていた。

確かこの先は行き止まりのはずだ。

男は路地の角を曲がった。

想像通り敵は胸を押さえてしゃがみこんでいた。

息はかなり上がっている様子だった。

「ハアハアハア……糞が！どうなってんだよ。てめえみたいなガキに」

死にかけの状態で吠える

なにも言わずに少しずつ近づく。

しかし、敵まであと三步とのところで地面に違和感を感じた。

地面が囲むように割れ、鋭く突き刺さるように迫って来る。

「馬鹿が死にさらせ！！」

敵の叫び声。

一歩下がり避けようとするが間に合わず、刀のように尖った土が胸に突き刺さった。

大量の血が地面に色をつける。

敵の歓喜の声があがる。

しかし、男はなに食わぬ顔で土の刀を抜き敵に近づく。

「『アタラクシア』発動……」

静かな声と同時にキズは再生を始める。

「な、何!？」

その言葉を最後に敵の男はゲットバトルドリームから退席した。

男は敵の首から挿していた指を抜く。血は止まることを知らないように首から流れ続ける。

手を拭き、死体の懷からカードを奪い去っていく様子をビルの屋上から一人の参加者が視ていた。

夕日がまばゆい教室に俺、「神谷遠時」だれていた。

数学の補習をくらい、もらったプリントを出来るまで帰れないのであった。

「まだゝ遠時。私、眠くなってきたわ」

少し茶色の混じったロングヘアの女が前の机でうつ伏せになっている。

「香美市絵里」

いろんな騒動の中で夢を叶える戦い - ゼットバトルドリーム -  
の協力者である。

「そんなこと言っただったら少しは手伝ったらどうだ」

「嫌よ。めんどくさい」

速答!!

この女は普段の生活では何故こんな冷たいのだろう。

三週間前の病室での優しさが懐かしく思えるぜ。

「お前、あれだろ。世間一般的に言うツンデレなんだからたまにはデレろよ」

「失礼な!! 私はずんデレじゃないわよ」

机から跳ね起きて否定した。

「じゃあお前は何なんだよ？」

（ただのツンか）

「あれよ、あれ。何て言っただかな。あつ！！」

一拍あける

「ヤンデレよ。そう、私はきつとヤンデレなのよ」

「お前は違うから絶対にそうなるなよ」

屈託のない笑顔で言う香美市に警告をだす。

もしこいつがそうになったら何かの弾みでカッターが飛んできたような予感がする。

（マジでそれは怖いぜ）

そんなくだらない事を考えていると教室の扉が開く音がした。

「ヤッホー！元氣か！遠時君」

ショートカットの活発そうな印象の女性 「音羽みゆき」 がそこに立っていた。

以前は脚が悪く車椅子に乗っていたが弓道場での戦い後、原因は不明だが驚異的な回復を見せ、今ではほぼ完治に近い状態で普通に歩いている。

「うーん？見たところ補習かな。上級生のみゆきさんが手伝ってあげようか？」

「必要ありません」

ニコニコして近ずいて来たみゆきに香美市が冷たい一言を放った。  
なんでお前が答えてんの！？しかも断るのかよ！

「馬鹿！！お前なんて失礼なこと言っただよ」

「馬鹿に馬鹿って言われたくないわ。この愚図！」

「すぐく傷つくことを言われた！！」

やっぱりこいつはただのツンだ。間違いない。

「そんな嫌わんというて。別に取って食うわけやあらへんし」

そう言つてとなりの机の椅子にすわる。

「ふん！どうですかね」

かなり不愉快な様子である。て言うかなんでこんなに二人は仲悪いの！？

「疑り深いな。あつ、遠時君そこ間違えてるで」

先程やった問題が訂正される。

自信あつたのに……

「教えちゃダメですよ。遠時のためになりませんから」

どの口が言う！どの口が！！

「そうか？でも、見たところ正解してる問題は始めの一問と二問だけやで」

「えっ、マジですかそれ！？」

十五問中、二問しか合つてないつてどうなつてんだよ。

「待てよ。じゃあ香美市、お前始めから俺が間違つてる答え書いてるの知つてたつてことか？」

「まあ、そうね」

あつさり言いやがつたぞこの女！！

「笑いをこらえるのつてしんどいわね」

「お前、絶対に友達いないだろ」

今までの時間を返せ！

「まあまあ。私が教えてあげるしおちつき」

みゆきがおさめようとする。

「だから、教えちゃダメなんですつてば！それより、なんで三年のあなたが二年の教室にいるんですか？」

確かにそれは疑問に思った。

「ああ。それわな

ガラガラガラ

閉めきつていた教室の扉が開く。

「こんなとこにいたのか？」



扉の方を向くと黒髪の男いた。

「げっ！！彦一」

みゆきは椅子から飛び上がる勢いで男の名前を呼んだ。

「文化委員の仕事サボってなにやってるんだ？」

彦一と言う名の男は不機嫌そうにみゆきに質問をする。

「えっとな。かわいいかわいい後輩を助けてたんや」

「そうだったんですか？」

こちらをむいて目で聞いてくる。

「あつ、はい。教えてもらったと思います」

「遊んでましたよ」

またこいつはいらんことを！！

「だって」

「イヤイヤ！違うよ。絵里ちゃん嘘ついたらあかん！！」

めずらしく焦ってる様子だった。

「みゆきさん。この人誰ですか？」

「「えっ！！！？？」」

全員が驚いた顔でこちらを見る。

「なに？俺なんか悪いこと言った？」

「悪いもなにも、あんた本当に知らないの？転校生の私でも知ってるわよ」

そんなこといわれても今日、初めてあつたはずだ。

「遠時君はいつも集会は寝てるって言ってたしな」

「いろんな意味で傷つくよ」

みゆきと彦一が冷たい目で睨む。

「すみませんでした？」

「なんで疑問文なんやー！」

「なんで疑問文なんだよ！」

（わくすごい！二人とも息ぴったりだよ）

「まあいいや。今から知ってもらうか」

彦一はしぶしぶそう言った。

「俺の名前は神童彦一。この学校の生徒会長をしている」

「あつ、だからか」

「やけに反応が薄いな」

「あつ、DAKARAか」

「カツコよく言っても同じだ!!」

生徒会長か。どおりで知らないわけだ。俺は集会やホームルームなどでは爆睡してるからな。

「まあ、とりあえずよろしくな。えつと…」

「神谷遠時です」

「そうか。よろしく神谷遠時」

右手が前にだされる。

差し出された手を強く握った。

……握り返された。

「痛い！痛い！痛いですつてば」

手から異様な音が聞こえる。

「ハッハッハ。悪い悪い」

手はなされ、彦一はみゆきの方を向く。

「さてと、みゆき。仕事だ仕事。文化祭のポスター貼りにいくぞー！」

「ハ―イ！頑張つてな」

「お前も来るんだよ!!」

言つてすぐにみゆきの襟首を掴みひきずりながら教室から出ていった。

「あいかわらず騒々しい生徒会長ね」

ボソツと呟く香美市。

確かにテンション高かったな。よく合うコンビだな、あの二人。

「なにやってるの？さっさとプリントやりなさいよ」

消しゴムでプリントの間違つてる答えを 消す香美市。

「だから、手伝えつての」  
遠時は再び問題を解きはじめた。

すっかり暗くなつた道を神谷遠時は自転車で自宅にむかっていた。  
あれから香美市はまったくの無視で結局自力でするはめになった。  
「ホントにたまには優しくなれつての」

文句を言いながらコンビニの前を通ろうとした時、遠時の自転車は止まった。

コンビニの前で女の子が何人かの男達に絡まれてる。

お人好しとして見逃すわけにはいかなかった。

自転車から降り、近寄つたその時だった。

一台のバイクが目の前に止まった。

運転手はバイクから降り、遠時が向かおうとしていた所に進んで行く。

「あん！なんだよテメー！！」

不良の男達は気づき、睨んでいる。

運転手の男はヘルメットをはずす。

その後ろ姿は見覚えのある姿だった。

「なんか文句あんのか！　グベラー！？」

一人の男が近寄つた瞬間に右の拳で殴り飛ばされた。

チラリと見えた瞳は恐ろしいほどの殺意を放っていた。

それは間違いなく彦一だった。

「なんだよ！殺ろつてんのか」

「ぶっ殺すぞ！！」

口々に言葉を話す不良達。

彦一はなにも言わず男達にむかつて行く。

結果は一方的だった。

向かって来た不良達はみな彦一の拳の一撃で地面に倒れている。

「強すぎだろ……」

言葉が漏れる。

彦一は少し息をきらしながらこちらを見てくる。

「神谷遠時」

とてつもなく低い声で呼ぶ。

「なんですか？」

「お前はこいつらの仲間か？」

……えー！？どんな勘違いしてんのこの人！！

「ぜんぜん関係ないですよ。むしろ助けようと思いました」

「ほお、今になってそんなことがよく言えるもんだ」

殺気でてますよ！？マジで勘違いしてるのかよ。

彦一は距離を縮めてくる。先程、不良相手にやったように。

「お前には失望したっ よー！！」

一瞬にして間合いをつめ右のジャブをくりだす彦一。

「のはつと！」紙一重でかわす。耳元で空を切る音が聞こえる。

彦一はなおも距離を縮め逃げられないようにしてくる。

「ちょっと、彦一さん。誤解で

後の言葉を言うよりも速く彦一の左拳が頬を殴った。

……痛い。

緑のように能力で強化したわけでもないが同様の痛みが走った。

彦一は聞く耳を持たない様子。拳は当たるとかなり痛い。それにく

わえて反射で避けれるスピードじゃない。

ここは

「仕方ないか……」

少し目つむり、カッと開く！目線の先には彦一。

『デステイニーチョイス』発動！！

その瞬間、彦一の時間が世界軸から外れる。本人はなにもわからな

い。

「すみません、彦一さん」

拳をつくり彦一の顎に振り抜く。

ドガッ！！

鈍い音がする。

彦一は後ろにのけぞる、その動作によって遠時の目線が外れる。

「ぐうー！？」世界軸が戻り、動けるようになった彦一は不思議そうに自分の殴られた箇所をおさえている。

「落ちていてください。俺はあなたと同じように女の子を助けようとしただけです」

「お前、なかなか強いじゃないか」

嬉しそうに笑顔を作る。

あれ！？話しが噛み合ってなくない？

「俺を殴れた奴は久しぶりだよ。フフ、興奮するじゃないか」

ファイティングポーズをつくりまたも一瞬で間合いをつめてくる。

速い！！

突き出される右手の一撃。

先程よりも断然速い攻撃。避けることもギリギリだった。

「やるな！！さあ次だ」

満面の笑顔で言う彦一。

口調変わってますよ？

左足の蹴りを右手の手のひらで弾き、彦一の目を見る。

しかし、彦一はいなかった。

「何？どこに

左胸に激痛が走る！

重い一撃が入る。

（マジかよ！？緑さん並のスピードだと！）

この人ただの生徒会長なのか？

「ボツとしてたら終わっちまうぜ！」

彦一の咆哮。

飛び蹴りを転がりながらかわす遠時。

（駄目だ。緑さんの時と一緒にで速すぎて能力が使えない）

彦一のフェイントからの右のアップー！

避けれずガードする。

腕から鈍い音が響く。

さらに、彦一は間合いをつめて踵落としを放つ。

遠時の右肩に直撃する。

「ぐあー！」

まずいこのままじゃ殺られる！！

（『デステイニーチョイス』発動！！対象は自分）

その瞬間、世界が白と黒に染まる。

全てのものがスローモーションに見える。

彦一のくりだす攻撃すら止まって見える。

（これなら何とかなる）

彦一の攻撃を避け、右の腕を掴み、後ろにまわす。いわゆる関節技をかける。

今の自分にとっては造作も無いことだった。

「がつ\* & amp; #て…：ッ…」

彦一の言葉もスローで聴こえてしまうのでまったく分からない。

（おっと、『デステイニーチョイス』解除）

同時に元の世界に戻って行く。

彦一は腕をまわされた状態のままうめいている。

（どうしたもんなかな…）

この手をはなせば、また殴りかかってくるのは明確だけど、彦一さんを説得する方法もわからないな。

「あの…」

横からの声。

手を絞めながら向くと先程、男達に絡まれていた女の子がいた。

そういえば忘れてたなこの子のこと。途中からぜんぜん関係ないことになってたし。

「あつ、ごめんね。もうちょつと待  
その時だった。

ゴキッ！！

「あああああー！」

異様な音。

鳴り響く叫び声。

「おい、嘘だろ！？」

自分で間接をはずしたのか。

左の頭部に激痛が走る！！

後ろを向いた状態のまま蹴られた。

視野がぶれる。

まっすぐ前をみれない。

（やばい！！また、殺られる）

「くっそ！『デステイニーチョイス』発動！！」白と黒の世界が再度訪れる。

彦一は体制を立て直し、睨み付けてくる。

ダランとした右腕をかばいながら静かになにかを呟いた。

「『ア：\$クシ\*』発&amp;p:@、……！」

信じられない光景が目映った。

垂れ下がっていた右腕が動いたと思うと鈍い音と共に間接がはまっていた。

それだけじゃなかった。

一秒を一分と感じている自分と同様に彦一も動いていた。

「どうなっただよ」

デステイニーチョイスは発動しているはずなのにどうしてこんな速く動けるんだよ！！

彦一の動きは先程のように高速でこちらに間合いをつめていた。  
能力なしで戦うしかないのか。

覚悟を決めたその時。

助けられた女の子がゆっくり自分と彦一の間に入って来た。すると、彦一は急にとまって女の子と話し始めた。

能力を解除する。

「もう！お兄ちゃん勘違いしすぎ！」

「いや、違っただよ亜理子」

えええー！

この二人、兄弟だったのかよ！そりゃ兄貴助けるよな。

「ほら、あやまって。この人は私を助けようとしてくれたのよ」

彦一はしぶしぶといった表情で「悪かったな」と言った。

「ホントにごめんなさい。じゃあ、そろそろ帰る。晩御飯はオムライスでいい？」

「オッケー！！またな遠時」

二人はバイクに乗りいなくなってしまった。

と言うか俺の体の心配しろよ！

と言うか内の高校バイクの免許とるの禁止だろうが生徒会長！！彦一に殴られた箇所を気にしながら帰路についた。

次の日、何時もどおり自転車で登校していると校門前で呼び止められた。

生徒会長様である。

「ハッハッハ！おはよう。遠時君」

「ああ…おはようございます」

テンション高！？

「ちょっと降りてきてくれないか？」

笑顔で手招きをする。

「なんですか」

自転車から降り、彦一のもとにむかう。

ガバッ！！

ヘッドロックをかけられた！？



「バイクのこと、話したら『殺す』!」

ボソッと告げられた一言。

恐れ〜!

なんだよ畜生。なんで俺だけ態度違うんだよ。

今日は暗い1日になりそうな予感がした。

残念ながいきなり予感は的中した。

早朝からの香美市の毒舌をくらうことになった。

「遠時昨日、コンビニの前でケンカしてなかった」

「してねーよ」

泥棒の始まりである。

「遠時昨日、生徒会長にボコボコにされてなかった?」

「ボコボコじゃない。接戦だった!」

すかさず訂正が入る。

ここは譲れない。男として。

「えっ、待てよ。なんで知ってんの?」

「見てたからに決まってるでしょ」

何なんだよこいつは!?俺のストーカーかお前!!

「えっ!その考え方キモい!!」

「思考を読まれた!」

そういえばこいつは夜型で毎晩、町を徘徊してるんだったな。

「でも、お前の家まで送ったよな」

「家に誰もいなくて、暇だったしコンビニに行ったらあんたが生徒会長にボコボコにされてたの」

「ボコボコじゃない。二人、一步も譲らない勝負だった」  
すかさず訂正が入る。

ここは譲れない。プライドが許さない!

「えっ!その考え方うざ!!」

「だから、なんで俺の思考読めるんだよ!」

お前の能力にそんなんあったか?

「あんたみたいな奴の思考は簡単に分かるわよ」

「じゃあ、今俺なに考えてる？」

頭では生徒会長がバイクの免許を持っている事を考えた。

大丈夫だよ。話してないし。

「マジで！？でも、私がそのこと知ってあんた大丈夫なの？」

伝わってしまった…

「香美市頼むから誰にも言わないでくれ」

「ええ…私のためにもそうしておくわ」

お互い気まずい空気になった所で授業のチャイムが鳴った。

今日の放課後には予定があった。

昨日、あまりにもひどい俺の学力を心配してみゆきさんが勉強を図書室で教えてくれるそうだった。

しかし、ルンルン気分で図書室にむかうと、みゆきさんはおらずメールで「遅れる」の一言だった。

待っている間、本を見ていると声をかけられた。

かけてきたのは生徒会長の妹「神童亜理子」だった。

「昨日は本当にありがとうございました」

ツインテールの黒髪を揺らしながら頭を下げる亜理子。学年は一年生で後輩だった。

「いや、こちらこそお兄さん止めてくれてありがとう。あのままだったらけっこう危なかったし」

「ボコボコでしたもんね」

「接戦だったしな」

さりげなく訂正。

ここは譲れない。社会的に。

「でも、お兄ちゃんとケンカで怪我しないなんて、すごいです」

「イヤイヤ！？してるよ。内出血とか！見えない所で怪我してるよ。」

「でも、なんであんなに強いんだ？生徒会長だからか？」

「お兄ちゃんは中学時代は不良のトップでしたから」

「あゝなるほど。つて、ええー!!」

不良!?生徒会長様が不良!?

確かに強い理由にはなるけどまさか不良とはびっくりだ。

「やっぱり驚きました。でも、頭はよかつたんですよ」

「何があつたんですか?」

その質問になると亜理子は急に黙りだした。

「話したくないなら言わなくていいよ」

「いえ、お話しします」

少し間を開ける。

「お兄ちゃんは不良の中でもかなり悪かつた方で、警察沙汰も何度かありました」

そりゃ、あのパンチは普通にくらつたら病院送りだしな。

「それで、世間からも色々言われて母が耐えきれずに自殺を…」

「母親が!?大丈夫なのか?」

「お父さんがいましたから生活には困りませんでした。でも、それからお兄ちゃん人は人が変わったみたいに問題を起こさず勉強をしてこの高校に入つたんです」

馬鹿な俺が言うのも何だがこの高校はかなり頭が良く、簡単に入れる高校ではない。

「よかつたじゃないか」

亜理子は首を左右に振った。

「お兄ちゃんはこの高校に入ってから昨日まで本当に笑ったことはありませんでした」

「昨日まで?」

「遠時さんとケンカしている時のお兄ちゃんすごく楽しそうだったんです」

嬉しくねー!どんだけ悪かつたんだよあの人。

「遠時さん!これからお兄ちゃんと仲良くしてくださいね」  
強く呼びかけられた。

「まあ、頑張ります」

亜理子はニコツと笑ってから図書室から出ていった。

それと入れ違いにみゆきさんが入ってきた。

「今の子。彦一の妹やね」

「そうですね」

「彦一と言えば…」

嫌な予感。

「昨日、ボコボコにされたらしいなあ」

「そうですね…」

訂正はしない。

自分的に。

「香美市絵里」は一人の人物を追っていた。

息を殺しながら、きずかれないようにまっすぐ歩き続ける男の後ろを電柱に隠れて歩いていた。

いつもなら放課後は神谷遠時と一緒に遊ぶ時間なのだが、今日はおしてもやらなければいけない使命があった。

香美市絵里はゲットバトルドリームで夢を叶えることは諦めているが、パートナーの遠時の願いである「ゲットバトルドリームの廃止」を協力する立場になっている。

その願いを叶えるために香美市絵里は放課後から一人の男の追跡を開始した。

男は何もない田舎道を早足で歩く。

ついていくために少し影から身をのり出したときだった。

「どこまでついてくるきだ？」

間一髪入れずに振り向かれ見つかってしまった。

「神童彦一」に見つかってしまった。

「たまたま、帰り道がこっちなだけですよ」

「ならお前はいつも電柱に隠れながら下校しているのか？」

「ええ。実は私電柱フェチなんです」

「君のイメージがどんどん悪くなっていくな」

ため息を吐く彦一。

「で、何の用だ？」

するどい目でこちらを睨む。

「別に用って程じゃないんですけど。昨日のコンビニのことで」

彦一は「なるほど」と言い。

「確かにあれはすまなかった。ムキになったし俺の勘違いだった。遠時君を殴ったことは謝るよ」

そう言って頭を下げる。

「そのことじゃないんですよ」キョトンとした顔をする彦一。

「じゃあ何のことだい？」

「外された右腕の間接の治り方やその後の常人離れた動きです」  
「少しだけ彦一に近ずきながら言う。」

「なるほど。そう言われれば変な直し方だったかな。動きの方は覚えてないよ」

ニツコリ笑って話す彦一。警戒心はまったく無いように感じた。

「もついいかな？今から晩御飯の買い物に行かなきゃならないんだ」  
振り返って帰ろうとする。

「あつ！じゃあ最後に一つだけいいですか？」

「いいよ」と彦一。

「『アタラクシア』とはあなたの力の名前ですか？」

その瞬間、笑顔が消える。

今で感じたことのないような殺気を放たれる。

まるで首を締め付けられるような息苦しさに襲われた。

この殺気を彦一がだしているのが信じられなかった。

「そうか…迂闊だったな。遠時以外の奴には聞こえたのか」  
とても低い声で呟いた。

「やっぱり神童さんはゲットバトルドリームに参加しているんですか」恐る恐るきいてみる。声は震えていた。

「もう隠しても仕方ないな」

彦一は胸のポケットからカードを取り出した。

「ご名答。神童彦一は夢を叶える戦いに参加しているよ」

高らかに、先程と同じ笑顔で告げた。

縮めていた距離はいつの間にか一人分ほどになっていた。

「それなら、あなたはこの戦いに何を願っているんですか？」

「聞いてどうするんだい？」

「私や遠時はゲットバトルドリームを無くそうと思っています。だから、私達はこの戦いに勝たなければいけないんです。だから、最後の日に残るためにカードを集めているんです」

「ほお…」と腕を組ながら言い

「つまり、俺に願いを叶えるのを諦めてカードを渡せと言うことが静かにうなずく。

「断ると言ったら？」

「言わないで下さい」

鞆を背中に掛け右手首の袖からカッターを、左手首の袖から短いナイフを取り出す。

「まいったな。自分の高校の奴とは戦かわないって決めてたんだけど…」彦一は鞆を地面にほうり投げて両手をかまえる。

「正当防衛ならしかたないな」

言い終わるよりも速く間合いをつめてくる。

ナイフを振りかぶって投げる！！

空を切りながら彦一へ一直線にむかう。

彦一は当たる寸前のところでカッターを掴む。

二人の距離は三歩ぐらい。香美市は一気に間合いをつめ、あいた右脇に蹴りをいれようとする。

しかし、左手の掌ではじかれる。

「やっぱり強い！」

後ろに跳び距離をとる。

香美市の蹴りは簡単に防げるほど軽くはない。それをはじく彦一も相当の強者である。

「でも、私にふれたわよね」

後ろに掛けた鞆に手をつ込み中からコンパスや鉛筆、彫刻刀などの武器を右手で握る。

「『ムーブプレイス』発動！」

その瞬間右手の武器が消え彦一の左の掌に突き刺さる。

「グウアー！？」

うめき声。左手は香美市が先程まで手にしていた武器で赤く染められていた。

「神童さん。これ以上の戦いは無理です。カードを渡して下さい」  
血は予想以上に流れている。

「フッフ…ハッハッハ！」

にもかかわらず不敵に笑いだす。

「何がおかしいんですか？」

「なに、お前が想像以上に愉快な奴だと思ってな」

流れだす血をもっともせず笑顔で向かって来る。

「愉快？どう言う意味ですか？」

「お前は俺の能力を知っているのか？」

そう言つて体勢を低くして高速で走り始める。

「『アタラクシア』発動！」

叫び声と同時に香美市のつけた傷がテレビの巻き戻しのように塞がっていく。

「くっそー！！」

向かって来る彦一に両手に持った武器を投げつける。

しかし、彦一は止まらず、顔を腕で守りながら突っ込んでくる。

投げられたカッターなどの刃物は彦一の腕や腹、脚などに突き刺さるが、それでも止まらず香美市の目の前に到着した。

右手に持ったカッターを突きだす。

「反射神経いいですね」

グシャリ！！

そう……ありえないことだった。まだ聞いたことのない人の手を握り

「いつつ ああああ ああああ ええええ ええええ ええええ ！！！！ ？？？？」

彦一に掴まれているところから後ろがダランと情けなく垂れていた。

「痛い痛いイタイイタイイタイ……」

「74ぐらいかな」

「俺の握力」

「そ……それがどうしたのよ」

「俺の能力『アタラクシア』を使えば計測は不可能だ」

「なっ……なんですって!？」

「なら、何故あなたのケガは治ったの？」

「最後だから教えといてやるよ。」  
『アタラクシア』の能力は人体の

「人体のリミッター？」

「人間は普段の生活では自分の本来の力の20%もだしていないん

87



彦一は夕焼けに染まった空を見ながら言った。

「その本来の力を自分で制御できるようになるんだよ。だから受けた傷も体の治癒能力をあげて一瞬で治したんだ」

「そ、そんな能力があるなんて……」

勝てるはずがない。否、彦一がもし能力を持っていなくてもきつと勝てない。

どんな傷を治せても人は痛みから逃げようとする。

しかし、

神童彦一と言う人物には「死」の恐怖がない。

だから、自ら腕の間接を外せる。投げられた刃物を紙一重で掴める。いくつもの刃が突き刺さっても向かって来ることができる。

「神童彦一」に勝つことはできない。

香美市は心で感じてしまった。

「終わりだな。安心しろ。殺しはしない」そう言い右腕を香美市の頭上にあげる。

シュビッー！

風を斬る音が聞こえた。

それは彦一の攻撃の音。ではなく、一本の木刀の音だった。

「生徒会長が自分の生徒いじめてもいいの彦一？」

一本の木刀を背負った雫緑が立っていた。

「売られたケンカは買う主義なんだよ」

緑の一撃を避け、少しだけ間合いをとりながら言った。

「残念だけどまだこの子はゲットバトルドリームに参加してもらいます」

「お前が決めることじゃない」

「貴方が決めることでもありません」

緑が木刀をかまえ、彦一がファイティングポーズをとる。

「俺に勝てると思ってるのか部長さん？」

「まさか。勝てるはずないですよ生徒会長さん」

「やっぱりな」

緑の能力『ユーセイバー』の高速移動で後ろにまわり木刀を振り抜く。

「あまい!!」

身体をかがめ攻撃を避け、緑の腹に蹴りをいれる。

「ぐふうー!」

口から血を流して蹴られた腹をおさえる。

「お前らしくないな。勝てない勝負はしないんじゃないのか?」

「最近が変わってきたんですよ。人間性がね」

まだ口から血を流しながら立ち上がる。

「無理するな。脚のリミッター外して蹴ったんだ。骨は折れてなくとも続けられる状態じゃないよ」

「続ける?何をですか。私は貴方と戦う気はまったくくないですよ」  
そう言い木刀を振りかぶって彦一に投げつけた。

「無意味だ」あたる直前で木刀を掴み、握り潰して前を向く。

しかし、その場所に緑はいなかった。

「こちらですよ。生徒会長さん」

後の声の方に向くと香美市を抱えた緑が数百メートル先に立っていた。

「ここから私が本気で走ればついてこれないですよね?」

嫌味っぽく言う。

「本当に逃げるのか?つまんないな」

「大丈夫ですよ。もう貴方と次に戦う人物は決まりましたから」

「ああ。なるほどな」

うんうんと頷く彦一。

「じゃあ、楽しみにしておいてください」

と言って高速でその場から消える。

「神谷遠時か…」

静かになった道で彦一は不敵に笑った。

「ちょっと緑さん！離してください。どこまで行くつもりですか？」  
抱えたまま高速で移動を続ける緑に耐えきれずに香美市は質問した。  
「病院に決まってるじゃないですか。それ折れてると言うよりも潰れてますよ」

彦一に潰された腕を見て言う。

確かにかなり痛い。

「緑さん。一つ聞いていいですか？」

強く地面を蹴りつけながら「なんですか？」と言う。

「彦一さんと遠時を戦わせるきですか？」

「場合によりますね」

「絶対に駄目です！」

声を張り上げて言った。

「遠時は戦えば必ず傷だらけになります。私はそれが嫌だから彦一さんと戦ったんです。遠時を戦わしたら意味ないじゃないですか！」

「なら、貴方は傷ついてもいいと？」

ブレーキをかけながらするどい目で睨む。

「貴方が遠時さんの傷つくところを見て悲しいように、彼も貴方が傷いてる姿を見るのも悲しいはずですよ」

「じゃあどうしろって言うんですか！！」

「さあ？私にはわかりませんよ。ただ――」

高速移動が止まるとそこは病院の前だった。

緑はポケットから携帯電話を取り出してなにかの操作をする。

「彼は自分の相棒がやられて黙ってる人とは思えませんけど？」

携帯電話には『神谷遠時』と『通話』の文字が表示されていた。

小さい頃の自分は何でもできた。

勉強では苦手な教科がなくどんなテストも満点だった。

スポーツも同じでどんな競技でも活躍できた。

周りの人間からは「天才」だと誉め称えられた。

しかし、それは小学校までだった。

中学生になると周りの目が変わり始めた。

何でもできる自分を信頼することが恐れや妬みに変わり始めた。

「なんであんなことできるの？」

「あいつ無理なことつてないのかよ」

「いいよな」天才はなんにもしなくて」

ある日の事だった。

クラスの女子が他校の生徒に絡まれているところを助けた。

しかし、女子は礼を言うよりも先に叫びながら逃げていった。

その日から気づきだした。

自分は陰で言われているんだ。「異常」だと。

そして自分が壊れ始めた。

信じた「正しさ」が理解されなくなった。

それからは氣にくわれない奴を男女関係なく殴り飛ばした。

周りの目はより恐れていた。

そんな目をしている奴らもぶっ飛ばした。

「善」を捨て「悪」になった。

「悪」になることで自分を解放できた。

その代償で母親は自殺した。

耐えられない周りからのストレスで自ら命を絶った。

葬式では包丁を持った妹に殺されそうになった。

「お前が殺した！！お前のせいだ！！！！お前なんか死んじゃえ！！！！母さんを返せ！！！！」

親父や親戚に止められて泣きながら言われた。

自分にはもうわからない

自分に正直に生きれば傷つき、自分に嘘をついて生きれば傷つける。自分には生きる理由がない。妹の言う通り死ぬべきなのか、と考え始めた頃にこの戦いのことを知った。

この戦いで勝てば『答え』がわかる。

そのためなら何でもする。例え「悪」になっても戦い続けると決めた。

今日もまた戦いに出かける。

一人の男を倒すために。

己の夢を叶えるために。

神童彦一はバイクにまたがりアクセルをかけた。

休日の昼下がりの誰もいない公園

「神谷遠時」はベンチに腰かけながらボーと空を眺めていた。予定の時間よりも早く来てしまったため暇をもて余していた。何をするか考えていると静けさを壊すバイクのマフラーの音が響いた。

「やあ、神谷遠時。いきなり呼び出して何の用だ？」

バイクを公園前に止め微笑む。

「俺の携帯電話の番号は誰から聞いたんだ？」

中央の階段を一段一段のぼりベンチに座る遠時に近ずいていった。

「どうした？ なにか言えよ」

「芝居はやめてくださいよ」

階段をのぼりきり目の前にいる彦一を睨んだ。

「あんたがゲットバトルドリームに参加していることは知ってるん



ない」

「えっ!？」

「俺を自分のせいで母親が死んだ過去を生き返らせてなかったことにするようなクズな人間だと思うな!！」

全身に寒気が走るほどの強烈な殺意をむけられる。

「じゃ…じゃあ、なんなんですか。あなたの願いは？」

声は信じられないほど震えていた。

彦一は睨むのを止め先程、遠時がやっていたのと同じように空をじつと眺めてゆつくりと言った。

「生きる答えが欲しいんだ」

彼の姿は今にも消えそうなほど儚かった。

雫緑は自分の家の道場で剣をふるっていた。

出した額の汗が動くことによって周りに飛び散る。

雫緑の能力『ユーセイバー』は高速移動を行える代わりに異常なまでに体力を消費する。しかし、それを補う膨大な体力が雫緑にはあった。

高速移動で道場の端から端まで移動する。

「やつぱり速いな。その能力」

腕組をした音羽みゆきが入口に立っていた。

「今は稽古中なので後にしてよ、みゆき」

「稽古よりも話や!」入口から中に足を進める。

「なんで遠時君に彦一のこと全部話したんや?」

「彼が聞きたがっていたからですよ」

シレッと答える。

「言つて良いことと悪いことがあるやろ!」

「あのままにしてたら香美市さんはまた戦いに行くと思ったからあ

あするしかなかったんです」

そう言つとみゆきは「うつ…」と口ごもった。

「さてと、話もこれくらいにして行きましょうか」

緑は二本の木刀を袋にいれながら言った。

「えっ！行くつて遠時君を助けに行くの？」

「違います」

素早く否定する。

「じゃあどこ？」

少しすねたように言うみゆき。

「やらなきやいけない仕事があるんですよ」

口元に笑顔をうかべながら道場から出ていった。

「生きる答えが欲しいだ！？」

彦一を睨んだ。

「ぜんぜん意味がわからない！！！どう言う意味か説明してください」

遠時は大声で叫んだ。

彦一はうつとおしそくに頭をかきながら「うるさい」と言いながら

「俺のことばかり質問するな。今度は俺が質問する」

「なんなんですか？」

「あの女から聞いたが、お前の願いはこの戦いをなくすことなのか？」

「そうです」

迷わずに速答する。

「ふんっ！俺はその願いのほうの意味がわからないな」

強い殺意の目をむけてくる。

「どう言つことですか！？人を傷つけ自分の願いを叶えていいと思つているんですか？」

「その考え方が間違つてるんだよ」



遠時と同じように速答する彦一。

「この戦いを参加することでそんなことは全員知っていることだ。知っているうえで、それでも夢を叶えたいから他の人を傷つても戦っているんだよ」

ゆっくりと一つ一つの言葉を話した。

殺意は先程よりも強く、鳥肌が立つほどだった。

しかし、遠時はひるまなかった。

「人を殺すことにもなるんですよ!!」

「正義を語るな!」

彦一は声を荒げた。

「お前は正しいことをしているつもりなのかは知らないが、お前をしていることは参加者に対する侮辱だ!!」

「なに!？」

「お前こそ願いもないのに人を殺す覚悟をした者達を倒すこの戦いの破壊者だ!」「てめえ!!言わせておけば」

気づいたのは本能だった。

突然、彦一の拳が顔面に飛び込んできた。

ギリギリかわした遠時は彦一を見る。

彦一はその場から動かずじっとこちらを睨む。

「神谷遠時。俺はお前のことが大嫌いだ」

「気が合いますね。俺もです」

二人の戦いが始まった。

『デステイニーチョイス』の能力により全ての物をスローに感じる遠時から見て彦一の動きは止まっているに等しかった。

彦一の左側に回り込み右ストレートを放つ。が、彦一は軽く避け膝で腹を蹴ろうとする。しかし、その動きもスローに見える彦一にと

って避けるのは簡単だった。

膝を避けてからの左手でのフック！

だが、またも軽く避けられる。彦一は右足で蹴り飛ばそうとする。動きはゆっくりなのでかわせると遠時が思った時だった。

スピードが急激に速くなった。

ドギヤーン！

三メートルほど宙に浮き地面を転がりながら公園の砂場にめり込んだ。

「ううう…ごふっ…！」

吐血。

蹴られた部分は服が破け血がひどく出ている。

なぜあたたったかが分からない。なぜ自分の攻撃が避けられたかも分からない。

前と同じようにデステイニーチョイスが発動しているのに彦一は普通に動いていた。

彦一は吹っ飛んだ遠時を動かずに見ている。

訂正

彦一はすでに遠時の真上にいた。

「うまく避けるよ…！」彦一の上空からの踵落とし！

砂場ごと地面がえぐれた。

遠時は吹き飛ばされる砂に埋もれながら体勢を立て直す。

辺りはまい上った砂により煙がたっていてまったく見えなかった。

「ゴホッ！つ…クソ、どこだよ」

吐血をしながら毒づいた。

「ここだよ！」

背後！？

左足の回し蹴りが一撃！！

今度は吹き飛ばされずに絶える。

「やるな」

彦一は笑って言った。

「これがあなたの能力ですか？」

「そうだ。『アタラクシア』…簡単に言えばリミッター外しだ。緑に聞いてないか？お前がどんな能力を使って攻撃をしてきても反射神経のリミッターを外した俺は、あとから攻撃してもお釣りがくる」  
「なるほどね。じゃあさっきの蹴りもそうなんですか」

「ああ。弱点をいえばこの能力は外せる箇所は一つずつが限界なんだ。だから、一気には攻撃できないんだよ」

敵に弱点を普通に教えやがった！？

それなら相手の時間を止めればいい。

遠時は彦一の目を見る。しかし、彦一は身体をかがめる。

「緑に聞いたぜ。目を合わせたら動きを止められるんだろ。誰が合わすかよつと！」

そからのアッパーカット！！

遠時の顎を捕らえて見事に打ち抜く。

「ガハッー！」

身体が二、三步後退する。その瞬間に彦一は距離をつめてパンチのラッシュをくりだす。

ゆっくりに見えるパンチもあればまったく見えないパンチもあった。遠時も隙を見つけて拳を振る！

しかし、彦一はかすりながらも避け、右手で遠時の腕を掴んだ。そして、左の手で遠時の左の手を掴む。

「終りだ！！神谷遠時」

グシャーー！

掴んだ両方の手を握り潰した。そう、香美市絵里と同じように。  
「ウッアーー！！！！！」

遠時の悲鳴がこだまする。

「諦める。どうやってもお前は俺には勝てない。だが、よくやったほうだよ」

遠時は地面に丸まりながらうめいる。

「俺が答えが欲しい意味を聞きたがっていたな」

彦一は遠時を見下ろしながら言った。

「俺は小さい頃からなんでもできた。いわゆる天才だったんだ。俺は自分の力を使っているんな手助けもした」淡々と一人で話した。  
「しかし、徐々に周りの人間が思うようになってくる。あいつはおかしい、と」

どこか哀しそうな声をだしていた。

「笑えるだろ？本人は普通に生きているだけなのに異常と言われる。今までに何度も助けてやった奴にだ。俺はそれが許せなかった。だから -

「悪に… なったんですか？」

痛みに必死で耐えながら言う。

「ふん！」

彦一はダランと垂れた遠時の左手を踏みつけた。

「あああああっ！！」

身体中に駆け巡る激痛。

「神谷遠時。この世に正義はない。人が自分の意思を持ちそれを違うと思う者が悪になる。逆もまた然りだ」  
踏みつける力を強くする。

「普通に生ればけなされ、侮辱され、異常とされて、悪として生きれば他者を傷つける。なら、俺はどうやって生きればいいんだ？ 俺のために生きるんだよ！！」

「知るかよ！ そんなこと」

踏みつける足を潰された右手で掴む。

そして、神谷遠時は神童彦一に殺意をむける。

「なんのために生きるだ！ ふざけるのもいい加減にしろ！！ そんなものは自分の力で人生の中から見つけだすもんだ。あんたはただ現実を見るのが怖いだけだ！！！」

遠時は潰された右手で彦一の足を握る！

「ッー！！」

彦一は手を振り払い飛び退く。

遠時は震える膝を押さえながら立ち上がり彦一をめがけて走りだした。

「そんな奴に俺は絶対に負けない!!」

遠時の拳と彦一の拳が交差する。

クロスカウンター

遠時の拳は彦一の頬を捕らえていた。

だが、遠時の拳は異様な方向に曲がっていた。

「くっそ」

彦一の目の前で倒れる。

今でも信じられない目をしている彦一。

「俺の負けです。カードは右のポケットに入っています」  
息を切らしながら観念して言う。

「この勝負、引き分けにしないか？」

驚愕の一言だった。

「どう言うつもりですか？」

「簡単なことだ。お前をここで消したくないと思っただけさ」

言葉には裏もなくただただ正直に言う。

「情けのつもりですか？」

「礼のつもりだよ。答えはまだ見つからないがお前の言葉は考えさせられるものがあつたからな」

そう言つて停めてあるバイクの所に向かおうとする。

「待つてください。勝ち逃げするきですか？」

彦一は振り向いて笑いながら

「再戦はいつでも受け付けるぞ！腕を磨いてくるんだな」

「期待しといてくださいよ」

彦一はニヤリと笑い、またバイクの所に向かおうとした時だった。

ドスッ！

長細い包丁が彦一の胸を貫いた。

「お疲れさま、お兄ちゃん。そしてさよなら」

神童亜理子は笑顔で微笑んだ。

### 第三話『正義と悪と生徒会長』（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

どうも、青春太郎です。

今回は更新が遅くてすみません。しかも、まだ少し続きます。

次は早めに更新しますのでこれからもぜひ読んでいてください。

#### 第四話『完璧を求めた虚像』（前書き）

突如、現れた亜理子の攻撃により瀕死の状態となる彦一。

能力系統最強の製造型の力。

そして、新たな能力『固有スキル』

絶対的なピンチの中で神谷遠時の戦いが今始まる！！



#### 第四話『完璧を求めた虚像』

赤かった。

ただ、赤かった。

胸に刺さる一つの刃物。

目の前で笑う少女。

崩れ落ちる自分の身体。

わからなかった。

理解ができなかった。

少年は少女に笑って欲しかった。あの時の涙から努力をずっと続けていた。

しかし、少女は一度たりとも少年には微笑まなかった。

その少女が、『神童亜理子』が満面の笑みでこちらを見ていた。

そうか、そう言うことだったか……

薄れゆく景色の中『神童彦一』は忘れかけていた少女の笑顔をじつくりと眺めながら意識を失った。

「彦一さん!？」

少しの間は何が起きたのかわからなかった。

目を離れた瞬間声が聞こえたと思うと、胸のあたりを赤く染めて倒れる彦一と、返り血で自分の頬を汚しながらも笑っている「神童亜理子」がそこにはいた。

なんとか足だけの力で立ち上がり彦一のもとに寄ろうとする。

しかし、あと一歩のところで亜理子が立ち塞がった。

「何のつもりだ!」

「それはこっちのセリフですよ。邪魔しないでください」

笑顔ではなく、うつとうしそうな顔をして亜理子は言った。

「なにが邪魔だ!」

そう言っただけで痛みをこらえながら携帯電話を取り出して番号を押す。

三回目のコールの後、繋がった。

「あつ、もしもし…重傷の人がいるんです。場所は -

スパッ!

「それが邪魔なんです」持っていた携帯電話がいきなり二つに切断された。

「次、邪魔したらそのボロ雑巾みたいな手を切断しますよ」

後ろを向いて倒れている彦一を観察するように見ながら言った。

「なに言ってる!？お前の兄貴が死んじゃうんだぞ」

「いいから殺したんですよ。まあ、ギリギリ避けて即死にはならなかったみたいですけど!!」

言い終わると同時に横向けに倒れている彦一の腹を踏みつけた。

反応はないが彦一の出血量の増加は真つ赤な地面を見れば嫌でも理解をしてしまう。

あのままじゃマズイ!!

亜理子は追い討ちをかけるようにもう一度踏みつけようとする。

「やめろ!」腹から声をだして叫ぶ。

ドグシャッ!

えぐるような音と共に血しぶきが上がる。

「アハッ!!」

亜理子は悦びの声をあげながら更に踏みつける。

「やめろって言ってるんだろー!」

遠時の身体は動きだした。

亜理子が例えゲットバトルドリームの参加者で、どれだけの能力を持っていたにしても、遠時には関係なかった。

どんな事があっても彦一を救う!!

強い気持ちがあった。

この事が起こるまでは…

遠時の左手が切断された。

「————っあ————!!!!!!???」

強烈な痛み!!

バランスを崩して彦一と同じように倒れこむ。

油断はしてなかった。デステイニーチョイスを発動して、どんな攻撃がきてもかわせるつもりだった。

それなのに、亜理子を蹴り飛ばそうとした瞬間、左上の方が歪んだと思うとギロチンが降りてきて左手を切断した。

左手があつた場所からは大量の血が流れだしている。目も霞んできた。

しかし、腕を握り潰された時の激しい痛み比べ、腕を切られると言つのは、もはや痛みを通り越しているため、痛みよりも死を感じていた。

（切られたの手首よりもちよつと上ら辺か……。止血しねーとやばい）  
痛み能耐えながら身体を起こして右手と口を器用に使つて止血をする。

「手際がいいですね。もつと焦つて泣き叫ぶと思つたんですけど、少し残念です」

亜理子は遠時を見下しながら言つた。

「そいつは悪かつたな」

止血は完了したが、大丈夫とは絶対に言えない状態。

「亜理子！これは冗談抜きでやばいんだ！彦さんは確かに母親を自殺に追い込んだかもしれない、でも彦さんは自分の罪を改めて変わるうとしてたじゃないか！？一番近くにいたお前ならわかるだろ？」

「黙れ」

声を荒げるでもなく、ただ静かに言い放つた。

「あなたが私の何が分かる？死にそうならさつさと病院に行けばいいじゃないですか。私はお兄ちゃんが死ぬまではここを動きません。また私の邪魔をしたら次は歩けなくしますよ」

遠時にむけられる殺気。それはまさしく彦一と同じものだった。しかし、遠時は動いた。

貫かれるような殺気の中を全力で走つた。

「歩けなくするんだつたらやりやがれ！！何が起ころうとも俺は彦一さんを助ける！」

「本当にバカですね！」

亜理子が両手を左右に広げる。

（今しかない！）

遠時は亜理子に視線を合わす。

亜理子の瞳が遠時を映す。

「『デステイニーチョイス』発動！」

亜理子の時間を操る。

時が止まる。

「うおー！」

攻撃が届く距離まで三、二、一！！

右手を振り上げる。

「終いだ！」

振り抜く！！

ザクッ！

「があっー！？」

両足に西洋風の短剣が突き刺さった。

「何でだよ！？時間は止めてたはずだぞ」

先程の自分を世界軸から外すのとは違い今の能力は止められている  
相手はなにもできないはずだ。

「残念」

ズガッ！

亜理子に頭を踏まれた。

「やっぱり遠時先輩は強いですね。まだ能力を隠してるなんて、さすがはお兄ちゃんが認めた人ですね。利用できてよかったです」

笑う亜理子。

その笑顔に遠時は恐怖を覚えた。

「待てよ、利用だと？」

「ええ。あなたを利用したんですよ。おそらく私がお兄ちゃんに普

通に戦ったら負けてしまいます。だから、私はずっと待ってたんです。お兄ちゃんが全力で戦える相手を」

踏みつける力が強くなる。

左手だけでなく両足からの出血でもはや遠時の意識はあるかないかの瀬戸際だった。しかし、遠時は質問をする。

「全力ね、あの人はぜんぜん本気じゃなかったぞ」

「実力の話じゃないですよ。お兄ちゃん的能力『アタラクシア』は人体のリミッターを外す、強化型タイプです」

倒れている彦一を見ながら言った。

「肉体強化型の能力はどれもバランスが良くて戦う時に非常に便利な反面、強化した肉体の負荷が尋常じゃないんです」

「肉体の負荷？」

「お兄ちゃんはリミッターを外すことで一時的に身体能力が高まりますが、一日に五回ほどしか身体がもたないんですよ」

なるほど、俺と彦一を戦かわして能力を使わし、肉体がボロボロの所を殺すか。

敵ながらアツパレな作戦だ。誰でも思いつきそうな作戦だけど、普通の人間は絶対にしない作戦だ。

だってそうたる？

こいつは俺が勝っていたら、俺を殺して彦一に止めをさしたはずだ。どう転んでも自分の兄が死ぬようになってる作戦だ。

「彦一さんが本気で戦える相手が出てくるまでどのくらい待ったんだ？」

「覚えていませんけど、お兄ちゃんを殺そうと思ったのは小学六年生の時ですよ」

神童家は血の気の多い奴ばっかなのかよ。

「さてと、お話はこれくらいにしましょう。私はやることあるんで」

そう言い、頭から足を退け彦一の方にむかう。

遠時は地面を這いながら亜理子の後を追おうとする。

後ろを向いたまま亜理子は言った。

「遠時先輩。いい加減にしてください。あなたの能力と私の能力では相性が悪すぎです」

「そんなことは関係ねーぞつとー!」

右手でももいつきり地面を押す!

その反動で体をなんとか立ち上がらせる。

両足からはシャレにならないくらいの血が流れだしている。

人間は血を2リットルぐらい流すと死ぬと言うがそれなら、もう少しで自分が当てはまりそうだと実感した。

亜理子は信じられない顔でこちらを見ていた。

「なんだ? そんなに見つめるなよ。照れるじゃないか」

頭に血が行っていないせいか、シリアスな状況なのにそれらしい言葉が一つも言えてない。

「どうしてそこまでするんですか? 他人なのに」亜理子の眼には哀れみの色さえあった。

「さあな。ただ、俺は彦一さんにケンカで二回負けてるから、勝ち逃げされるのはごめなんだよ」

両足、左手は出血しそのせいで目はほぼ見えずまともに歩くことすらできない。

それでも遠時は立ち向かった。

「ケンカ! ボコボコでしたもんね」

亜理子は悲しい顔で笑顔を作り、右手を上挙げる。

すると、次元が歪み中から槍と西洋剣が現れ空中に浮く。

「接戦だった」

遠時の訂正が入る。

シュバッー!

武器が空中から遠時の心臓に向けて放たれる。

遠時に避ける手段はない。

（また、俺の負けか）

遠時は静かに目を閉じた。

ズドッ！

一本のカッターナイフが遠時の目の前の地面に突き刺さった瞬間、ドゴーンー！

轟音と共に槍と西洋剣をまきこんで公園の遊具の一つ、滑り台が遠時の目の前に現れた。

「なに諦めてんのよ？まだまだここからよ」

「すごい怪我やな。ちよつと待つときやすぐ病院連れて行くからな」

「ご無事でなによりです。少しの間休んでください」

三人の遠時の仲間がそこには立っていた。

「来てくれたんですか。ありがとうございます」

身体に限界がきたのか、崩れ落ちそうになったところを左手に包帯を巻いた香美市に助けられた。

「しつかりしなさい。それぐらいの傷で倒れるんじゃないわよ！」

「このツンだけ女！！これは傷のレベルじゃねーよ！左手が無いのが見えないのかよ！！」

「あつ、ホントだ左手無いや」

「見えなかったの??？」

香美市に肩を貸してもらいながら後ろに下がる。

「一回貸すので三百円よ」

「こんな時に商売をするな！」

「外すのと潰すのもあるわよ？どう？」

「しねーよ！どんな商売だよ！て言つかお前は彦一さんか！！」

叫ぶと傷に響いて痛みが走る。

「香美市さん、その怪我では戦えないでしょう。遠時さんと一緒に



下がっておいてください」

緑が亜理子の方を見ながら言った。

「そうさせてもらっわ」と言って香美市は遠時を連れて下がった。

「さあ、みゆき。始めましょう」

「うん。そやね」

二人が前に出る。

亜理子はつまらなそうな顔をしている。

「なんで邪魔ばかりするんですか？それに、神谷先輩女の子に守られてかつこ悪いと思わないんですか？」

「ごもつとも。」

「私達は遠時さんを助けるために来たんですではありません」

緑は木刀をとりだしこまえた。

「じゃあなんなんですか？」

亜理子が手を挙げ空間が歪みいくつもの武器が宙に浮かぶ。

「貴方のお兄さん、彦一さんに頼まれたんですよ。もし、自分が死んだら貴方をゲットバトルドリームから退場させるように」

「へえ。お兄ちゃんでも卑劣な事考えるんだ。自分の仲間に仇討ちさせるなんて」

亜理子は彦一に蔑む視線を送る。

「ホンマにアホやなこの子。彦一とは大違いやわ」

みゆきはため息をつきながら言った。  
ブチッ！

「その言葉は私にとって禁句なんですよー！！」

浮かんでいた武器がみゆきに降りそそぐ。

「みゆきさーん！」

土ぼこりが上がり視界が曇る。

「だってそうやろ」

みゆきの声。

「あんたの為に彦一は頼んだんやからー！！」

真っ白で美しい純白の翼がそこにはあった。

「『エンジェルコンタクト』発動」

みゆきの身体が空に上がる。

「私の為!？」

「そうや。彦一が生きてる時はあんたを守れるけど死んでしまったらあんたを守る人は誰もいなくなる。それが危険やからあんたをゲツトバトルドリームから退場させるように頼んだんや！」

「馬鹿なこと言わないでください！お兄ちゃんは私の計画を全部知っていたって言うんですか？」

「少なくとも貴方に殺意を抱かれている事は知っていたと思います」  
よるける亜理子。

「本当にバカですね。天才のくせにバカなんだから」声は震えていた。

「ええ。だから、遠時さんと気があったんでしょう」

「どう言う意味だそれはー！」

離れててもちゃんと聞こえてるわ！

「でも、私はやめません。私の憎しみは何があっても消えませんか」  
「ら」

「でしょうね。そうでなければこんなことはしませんから」

亜理子の周りにまた武器が現れる。

「私の願いは兄がいない人生のやり直し……間違っているとわかってるけどでも、私にはこれしかないの！」

緑は姿勢をかがめて飛び出す準備をする。

「では、始めましょうか!！」

ドスンッ！

鈍い音。

「始まりとちゃう。終りや」

みゆきの矢が亜理子の胸に突き刺さった。

「みゆき!ー!」

「大丈夫や。急所は外してる」

みゆきは地面に足をつけて言った。

「早く病院に電話しなあか」

「いきなりですか。容赦ないですね」

亜理子は身体を起き上がらせて言った。

「あんた…不死身か？」

「それはお兄ちゃんに言ってくださいよ」と

胸に突き刺さった矢を抜く。傷からは垂れるように血が流れだした。

「驚きました。あなたは強化型じゃなく製造型だったんですね」

「なんやそれ？」

首をかしげるみゆき。

「この戦いの主催者から聞いたんですよ。私達的能力にはタイプがあるんです」

自分の傷を確認しながら話す。

「タイプは三つ。強化型、操作型そして製造型」

「そうなんや。で、私が製造型やからなんなん？」

「製造型はこの三つの中で一番強い能力なんですよ。だから、あなたと戦うのは時間がかかりそうですね」

「心配ないで。すぐ終わるから」

弓を構えなおす。

「それが無理なんですよ。だって私も」

亜理子は両手を広げる。

「製造型ですから」

みゆきの矢が放たれる。

が、亜理子は軽くかわす。

「『ファンタジークリエイト』発動！」

その瞬間、亜理子の周りに包帯が現れたと思うと、傷を一気にふさいでいった。

「この能力は私の想いを現物にすることが出来ます。この包帯は自

動で傷を治しますよ」

につこりといやらしい笑みをする。

「やれやれ。彦一といいこの子といい、能力が強すぎる」

緑は木刀を握りしめ直した。

「緑。時間を稼いで。『あれ』をやるから」

みゆきは睨みながら緑に言った。

「でも、あの技は貴女も亜理子にも危険すぎます」

「手加減はする。回復されるんやったら動けなくするぐらいがちょうどいいはずや。それにあまり時間を長引かせたらな」

みゆきの眼から殺意が溢れ出していた。

「彦一を殺した奴を私が殺してしまうかもしれないやろ」

みゆきの持つてる弓が強く握られる。

「使っんですね？とっておきの『固有スキル』を」

「うん」

緑は亜理子に視線を合わせた。

「では、急いでくださいっね！」

能力を使い一步で距離を縮める緑。

「無駄ですよ。強化型のあなたが私には勝てないですよ」  
空間より武器をだす。

ブン！

木刀をなぎ浮かぶ槍を叩き落とす。

「えいつ！」

亜理子の周りの刀が緑に向けて投げられる。

「『ユーセイバー』！！」

高速移動で後ろにまわる。

「もらった」

「こんのー！！」

しゃがんで攻撃をかわし、後ろに飛び退く。

「『ファンタジークリエイト』発動！」

空間が歪む。

「想い欲するのは英雄の短剣。知識を残したまま姿をなせ！！」  
光の集束と同じくして西洋型の短剣が空中に浮く。

「遅い！！」

もう一度亜理子の後ろをとる。

振り上げた木刀を力の限り降り下ろす。

ギーン！

「なに！？」

宙に浮いていた短剣が勝手に緑の一撃を防ぐ。

それだけでなく自動で攻撃までしてきた。

「驚きました？これが製造型の力！実力の差など物質で補えばいいんですよ」

またも空間が歪み光が集束されていく。

「想い欲するのは絶対命中の弾。守を破壊し姿をなせ！！」

亜理子の右手にライフルの銃弾のようなものが握られる。

「当たれー！」

緑めがけて投げられた四つの弾丸。

「くっ！」

高速でその場から離れ公園の端まで移動する。

「ウフフフ。絶・対・命・中！」

投げられた銃弾は向きを変え緑のもとに進んでいく。

「チッ！弾き落とすしかありませんね」

銃弾と向かい合い一番前の弾丸を木刀で振り抜く。

バキッ！

弾丸が木刀を貫通する。

「なっにー！？」

三発が緑の身体に着弾し、一発は頬をかすめそのまま公園の外に出

て消えた。

「言ったでしょ。絶対命中だって。無駄なんですよ私と戦うのは」  
そう言ってまた右手に弾を握る。

「終わりです!!」

「うん。あんたがな」

低い声。

振り向く亜理子。

そこには空に浮いたまま弓をかまえるみゆきの姿。

その矢には恐ろしいほどの殺気がこもっているのがわかった。

（あれはマズイ!）

前方に手を突きだす亜理子。

「想い欲するのは守護の盾。傷をつけずに姿をなせ!!」

その瞬間、巨大な逆台形の形の盾が現れる。

みゆきは矢を強く引いた。

「固有スキル『善良の讃歌<sup>バルドル</sup>」!!」

矢から手を離す。

その瞬間に竜巻のような風が周りに吹き荒れる。

矢は風をまとったまま巨大な盾にぶつかる。

ゴシャーン!!

盾はまるでガラスのように亜理子の目の前で碎け散った。

「えっ?」

矢は先程刺さった箇所と同じところに刺さり地面にめり込みながら  
亜理子を公園の端まで吹き飛ばした。

「残念やったね」

笑うでもなく蔑むでもなくただ無表情でそう告げた。

「みゆき」

緑がこちらに戻って来る。

「大丈夫やったか? 血いでてるで」

「なんとか無事です。それよりも貴女の身体は?」 「うん。大丈夫

やでまだまだいけるよ」

「もう終わりですよ」

緑は微笑んで言う。

「そやな」つとみゆきも微笑む。

シュビツ！

二人の間に槍が通りすぎる。

「まだ…ですよ」

目の前には何重にも包帯を巻いた亜理子がいた。

みゆきがつけた傷が治っていく。

「やられましたよ。まさか私の想いが破られるなんて。それがあなたの固有スキルですか？」

亜理子の息切れはすでに回復していた。

「そやで。よう知ってるな」

「確か自分の能力を極めた時に追加される個人独特の力、でしたっけ？」

亜理子は何本か包帯をほどいて言った。

「うん。私の場合は私以外の能力の消滅。まあ発動するのは放った矢だけやけどな」「みゆき。敵に喋りすぎです」

「大丈夫やって。喋った所で止められへん」

もう一度矢を強く引き狙いをさます。

「次は手加減抜きや。死ぬかもしれへんし降参するんやったら今のうちやで？」

「ご冗談を。降参する必要はまったくありません。次は止めて見せます」

ギリギリギリ…

矢に殺気が集められる。

「そう」

さらに矢を引く。

身体を宙に浮かせ放つ準備をする。

「緑、離れて。射つで!!」

高速で移動する緑。

「『善良の讃歌』!!」

激しい突風と共に矢が一直線で亜理子にむかう。

亜理子はまたも手を前にだす。

しかし、次は違った。

「固有スキル『完璧を求めた虚像』!」

「なんやて!?!」

前方が大きく歪む。

そして、光が集まり、束となり真ん中に鏡のついた丸い盾が具現化した。

「無駄や!私のバルドルは能力を無効化する」

亜理子はニヤリと笑う。

「それは場合によりますよ」

竜巻をまとった矢は亜理子の作った盾に突き当たる。

ギギーーン!

高回転する矢が鏡を削り摂ろうとする。

「さあ。ここからです!!」

鏡に矢が写る。

その瞬間に矢にヒビが入っていく。

「なんでや!?!」

バキーン!

みゆきの放った矢は粉々に砕けた。

「嘘でしょ?」

緑が言葉をもらす。

「危なかった。全ての攻撃をそのまま返すイージスがここまで壊されるなんて思いもしませんでした」

盾が消え、服についた土を払う亜理子。

「あんた…固有スキルが使えたんか?」

「使えませんかなんて言ってますけど?」



馬鹿にするように笑う。

「さてと、そろそろ終わらせましょう」

神谷遠時は感じとっていた。このまま行けば二人は殺られると。

「香美市、俺の左手と両足、右手の固定を頼めるか？」

香美市はかなり驚いた顔で「本気で言ってるの？」と言った。

「ああ。確かに今の俺はみゆきさん達を助けられないかもしれないけどこのままじゃ二人とも危ない気がする」

「私もそう思うわ」香美市は遠時の右手を気の棒で固定しながら言った。

「でも、どうするの？」

「とりあえず、俺が囷になるからその間に彦一さんを助けてくれ」

香美市は両足を布で強く結んだ。

「了解したわ」

「よし！作戦スタートだ」

遠時と香美市が動き出した。

「こんのー！」

木刀で投げられた全ての攻撃を叩き落とす。

「てりゃ！」

亜理子の投げたナイフが緑の肩をかする。

緑は気にせずに亜理子の懐に居続ける。

（自分の想いで製造するなら多少の時間はかかるはず。時間を与えずに一気に決めれば勝機はある）

超スピードで木刀の攻撃を繰り返す緑！

亜理子の周りにあった武器が徐々に消えていく。

「もう少し…」

さらに近づく緑。

「くっ！」

緑に押され後退をしていく亜理子。

「いい加減どいてくださいよ！！」

残っていた周りの武器が一斉に攻撃をする。

だが、緑は紙一重で全てをかわす。

「勝負に焦りましたね」

ニツと笑う緑。

「くっそ！想い欲するのは -

製造を始める。

「甘い！！」

右足に力をためて一気に蹴りつける。

地面の爆発と一緒に緑の身体が一気に亜理子に近づく。

「もらった！！」

横に持った木刀を今まさに振り抜く！

「なんてね」

亜理子の赤い舌が現れる。

「固有スキル『完璧を求めた虚像<sup>イジス</sup>』！！」

「なっ！？」

ガゴーン！

緑の身体は肩から全てをそのまま返す盾にぶち当たった。

「あああー！！」

倒れて肩を押さえ込む緑。

「すごいスピードでしたね。トラックに突っ込まれたみたいでしたよ」

盾を消し、上から覗き込む亜理子。

「その分のダメージはあなたが受けたんですけどね。アハッ！」

亜理子は無邪気な笑顔で微笑んだ。

「貴様——！」

みゆきが弓矢からいくつもの矢を射つ。

「『ファンタジークリエイト』——！」

空間よりでた武器が矢と当たり地面に落ちる。

「どうしたんですか？固有スキルを使ってくださいよ。イヤッ！使えませんか？あれだけの能力ですから自身の負担も大きいはずですよ」

「ごちゃごちゃうるさいな。舌噛むで！」

矢が放たれる。

亜理子は西洋剣で弾き落とす。

「まあ、私は違いますけど……」

亜理子から強い殺意が発せられる。

手のひらを地面につける。

「固有スキル『破戒をもたらす呪いの鎖』」  
マントウマリナウト

その瞬間、飛んでいるみゆき下の地面からいくつもの鎖が現れ手や足、翼を覆いみゆきを地面に打ちつけた。

「グハッ——！」

鎖はみゆきの全身に絡まり身動きがとれない状況となった。

「どう言うことや？固有スキルが二つあるなんて」

上半身を無理矢理起こす。

「それだけ私がお兄ちゃんに対する憎しみが大きいって事ですよ」  
空間から槍を取り出しながら言う。

「さてと、これでさよならです。ああ、言っておきますけどその鎖は私の力でしか壊せませんから」

槍は投げられた。

みゆきの心臓に向かって高速で——！！

ガシッ！

「つとに危ねーな！」

神谷遠時は飛び出してボロボロの右手で槍を止めた。

「遠時くん!？」

「みゆきさん、逃げますよ。今、香美市が彦一さんと緑さんを助けてるんで俺達はこのまま逃げましょう」

香美市の方を確認する。

香美市はすでに彦一を背負い、緑の所に向かっていった。

「さあ。速く!」

急かす遠時。

「遠時くんだけ逃げて。私はこの鎖でここから動けへんから」  
みゆきは立ち上がるうとするが、鎖は一行に外れない。

「そんなことできません」

鎖を引つ張り外そうとする。

「私が隙を作るから速く逃げ!」

「何をコソコソ話しているの? 誰も逃がしませんよ」その声と同時に地面からいくつもの鎖が現れる。

「くっ! 『デステイニーチョイス』!」

対象を自分にし、ギリギリ鎖をかわす。

「やりますね。でも、お仲間は違いますよ」

亜理子が指をさす方向には鎖によって自由を奪われた香美市がいた。

「ごめん。捕まった」

香美市は苦笑い。

遠時の苦笑。

「さあ。後は神谷先輩だけです。どうします?」

「決まってるだろ! 全員助ける!」

遠時が亜理子のもとに走りだす。

「やっぱりそうですか…」

空間からの武器が遠時にむけて放たれる。

「うおー!」

ドガッ!

横からおもいつきり腹を蹴られた。

「ぐえー！？」蹴飛ばした男は迫り来る剣、槍、斧、鎌などの全ての武器を拳一つで打ち破った。

亜理子の驚愕の顔。

否！！

周りにいた全ての者が驚きの声をもらした。

「いいね。その人を化物みたいに見る眼」

男は静かに笑い言った。

「さあ、終極だ亜理子！もちろん俺の勝ちでな！！」

「神童彦一」は高らかに宣言した。

小さい頃の自分は何一つできなかった。

勉強でも、スポーツでもどんなことも私は兄に負けていた。

家族には事あるたびに比較された。

「お兄ちゃんあんなに頑張っているんだから貴女も頑張きなさい」

「少しは兄さんを見習ったらどうだ？」

家族だけではない。

友達も私が兄の妹だからよって来る人はあとをたたない。

「あなたって彦一さんの妹なんですか？」

「すごいですよね。あなたのお兄さん」

「お兄さんの話をもっとしてください」

自分はまるでこの世界にいないようにすら思えた。

しかし、それでも自分の兄を憎めなかった。

才能溢れ誰からも信頼されている兄を自分の目標にしていた。  
しかし、兄は変わってしまった。

私が中学に入る時兄の性格は急変した。  
誰とも交わろうとせず、氷のように冷たい人になった。  
周りの人間の目も変わり兄を異常に見るようになった。

そして事件は起こった。

母親がストレスからの自殺。信じられないことに葬式時の兄はまったく悲しみの顔をしていなかった。

私は頭が真っ白になった。

知らぬ間に台所の包丁で兄を刺そうとした。

それからの兄は全てを閉ざした。

その瞳には喜怒哀楽のどの色も映ってはいなかった。  
それが許せなかった。

しかし、自分にはどうすることもできなかった。

そんなある日、この戦いを知った。

私は心がはち切れんばかりだった。

兄を殺して全てのやり直しができる。

その希望が現れた。

そして今日、一つの夢が叶ったはずだったのに……

「どうして生きてるの!？」

「さあ。不死身だからじゃないの」  
軽く言う彦一。

そして蹴飛ばした遠時のもとに近ずいていく。

「回復…できないんじゃない?」

もうろうとした意識で遠時は質問した。

「まあ、それよりもっと!」

彦一が公園の外まで遠時の身体を蹴り上げた。

「のはー!？」

道に植えてある木にぶつかりながら落ちていく。

「ちよつと彦一？」

「何してくれてんのよ!」

彦一の行動にみゆきと香美市が突っ込む。

「よく見てみる」

彦一が指を差す。

その遠時の姿は全ての傷が治っていた。

「どう言うことや？」

左手はちゃんとあり、両足の出血の傷もなかった。

「これがあいつの能力だよ」

にやける彦一が見る先の亜理子は強烈な殺意をだして睨み返してきた。

「製造型とか言ったな。確かにそのタイプの能力は強い。しかし、力が強ければ強いほど条件が出て来てしまうもんだろ」

彦一はにやにやして亜理子に近づく。

亜理子は武器を製造して彦一に投げつける。

武器を全て叩き落としながら彦一は言う。

「お前の能力の条件はいくつかある。まず一つ目が能力を使える範囲」

「範囲やて？」

鎖から身体を外そうとしながらみゆきは尋ねた。

「緑が絶対命中の弾を喰らった時に一発だけ公園の外に出た弾はその場から消えた。さらに、みゆきの固有スキルで吹き飛ばされた時、まだ傷が治っていないのにもかかわらずこいつはすぐに近づくってきた」

二本の指を立てる彦一。

亜理子の頬から一筋の汗が流れた。

「この二つの事からこいつの能力の範囲はこの公園の一周分ぐらい

だ、そして、この範囲から出れば傷は消えるし、亜理子が出ればこの能力は解除される。だから、すぐに公園の端から離れなきゃいけなかったんだろ？」

嫌味ったらしい顔で亜理子に問いかける。

「ウフフフ…。正解だよお兄ちゃん。さすがは天才だね」

「まだだろ？」

亜理子の言ったすぐに彦一は声を上げた。

「なにが？」

周りには先程よりも多くの武器が現れていた。

「どうして緑やみゆき、香美市の四肢を遠時の時のように切断しなかったんだ？」

「ッ！！」

亜理子が口ごもる。

「どうして自分の奥の手でもある固有スキルをわざわざ使ったんだ？勝てない勝負じゃなかったのに」

「それは」

「どうしてそんなに血を流せさそうとしないんだ？」

彦一からは殺気がでていた。それも、遠時にした時と同じように自分の妹へ。

「うるさいー！！」

亜理子は彦一ではなく鎖で動けない香美市と倒れている緑の方をむく。

「友達なんですよ？だったら死ぬ気で守ったら！」

浮いていた武器が二人に向けて放たれる。

「こ…の……」

「緑さん！？」

緑はなんとか立ち上がり香美市の前方に立ち塞がる。

「緑さん。やめてください。速く逃げてください！」



「その通りだ。やめておけ。俺がなんとかする」

神童彦一は緑にも遅れをとらない高速移動で目の前に現れる。

「彦一さん」

二人の声が被る。

「この量は多いな…。よし、緑！木刀を貸せ！！」

言われるがままに木刀を彦一に渡す。

彦一は右手に木刀を左手で拳をつくる。

「『アタラクシア』発動」

左手に力がこもる。

ビビューーン！

ガガガガギギー！

木刀で弾き落とし、左手で碎き壊す。

何百本とあつた武器が欠片も後ろに飛ぶことなく彦一は全てを破壊した。

「な…そんな嘘でしょ」

亜理子が驚愕の声をあげる。

「お前のもう一つの条件、それは能力中に相手が流した出血量分お前の血も無くなっていく。だから、出血量の多い攻撃ができなかった。そうだろ？」

「くっ！それは」

「お前の能力は相手に負けを認めさすか、殺すしかない。お前に人は殺せない、かといって負けを認めさすには流す血の量が一緒なら相討ち覚悟で挑むしかない。二つともお前には不可能だ」

キッパリと言いきった彦一。

亜理子の顔に怒りが現れる。

「そんなことお兄ちゃんきわかるはずないでしょ！」

「わかるさ。お前は俺と違って優しすぎる。そんな奴が人と戦えるはずがない」

「うるさい！うるさい！！そうやって自分は全部知ってるみたいに言って！そこが」

亜理子は地面に手のひらをあてる。

「嫌いなよ!!」

彦一の地面が揺れる。

「彦一さん、逃げてー!」

緑が叫ぶ。

「固有スキル『破壊をもたらす呪いの鎖』!!」  
アンドヴァリナウト

いくつもの鎖が彦一を襲う!

「チツ!!」

舌打ちと同時にその場から大きく跳躍し離れる。

鎖は数を増し一気に押し寄せる。

「あの生徒会長でもこの鎖はマズイくない?」

香美市は必死に逃げる彦一を見ながら言う。

「おそらくですがこの鎖は彼女の精神力で出来ていると思います。

遠時さんと同じ量の血を失っていてもあそこまでの鎖がだせるんです。彼女の精神力は尋常ではありません」

肩の怪我は酷いが、さっきのような攻撃を警戒して緑はその場から

動けなかった。

「どうりでこれ切れないわけだわ。能力で移動さすこともできない

し」

「あの鎖に捕まれば勝負が決まるかもしれませんがね…」

その後は沈黙が続くだけだった。

ビュッ!ビュッ!ビュッ!

槍などを製造し、鎖をかわしている彦一に投擲する。

かすりながらも避け続ける彦一。

それを見てさらに怒る亜理子。

「それなら、これで!!」

狙われたのは緑と香美市ではなく反対側に居るみゆきだった。

「みゆきさん! 危ない!!」

遠時がみゆきに呼びかける。

しかし、みゆきは鎖で動けない。

「クッソタレーー!!」

彦一が地面を蹴りつける。

大爆発を起こす大地!!

緑の高速移動を超える。

みゆきの周りに土煙が上がる。

彦一の血しぶきが上がる。

投擲された槍が右肩を貫く。

「彦一!!」

彦一の動きが止まった瞬間にいくつもの鎖が身体を覆う。

「彦一さん! 今行きます」

公園の中に走りだそうとする遠時。

「来るな!!」

彦一の叫び声。

遠時の脚に急ブレーキがかかる。

「まだ能力を解除していませんから。 中に入れば傷はもとに戻りますよ」

武器を製造しながら言う亜理子。

「大丈夫だ遠時。 なんとかする」

彦一はたくましい笑みでこちらを向く。

「大丈夫じゃないよ。 その鎖は絶対に切れないんだから」

製造した武器をいつでも発射できるようにする。

彦一は鎖の状態を確認するかのように観察し、「よし!!」と一言。

「『アタラクシア』発動！」

声と共に彦一の左手の筋肉が膨張を始める。

「無駄だって言っ -

ピキッ！

鎖にヒビが入る。

「そんな馬鹿な！？私の心が負けてるって言うの？」

ギギギギー！

「ああああー！ー！」

ブチーン！

身体を覆っていた鎖が全て壊されていく。

「どうして？その能力は身体がもたないはずでしょ」

彦一は遠時と戦い、亜理子に刺されていても顔色一つ変えることなく能力を使っていた。

「俺の能力は確かに何度も使えるわけじゃない。だがな、それは能力の力全部を本気でやったらの話だ」

「なっ！？本気じゃなかったの」

彦一は肩の槍を抜き回復させる。

「使っていても遠時の時は40%ぐらいだったしな。まあ、お前に刺されたのでかなり使っちゃったけど」

傷は完璧に治り、彦一は何度か肩を回す。

「ふざけないでよ。これじゃ私の…私の作戦が台無しよ」

頭に手を押さえ込む亜理子。

「鎖を壊せるようになったのがいい証拠だ。今のお前は戦えない。

おとなしく敗けを認めろ」

一歩近づく彦一。

その動作だけで威圧感があった。

「敗け？敗け！？敗けー！！！？私がまた劣るって言うの？自分には勝てないって言うの？嫌だ嫌だ嫌だー！！もう私は敗けたくない

「！！」絶叫する亜理子。

そして、彼女の周りの地面からは無数の鎖が彦一とみゆきを囲むようにして現れる。

「想い欲するのは大地を壊す砲弾。雷のごとき速さで姿をなせ！！」

亜理子の製造！

生み出されたのは銃弾。

それも五階建てのビルに匹敵するほどの大きさ。

亜理子の全ての憎しみがその銃弾にこめられた。

「潰れ死ねー！！」

超スピードで放たれる銃弾。

その姿は巨人が手を振り下ろすように思えた。

「彦一！逃げて」

みゆきが彦一に話す。

「みゆき！！絶対に動くなよ」

手を前に突きだす彦一。

そして口から一つの言葉を言う -

「『完璧を嫌悪した実像』！」  
イジス

その瞬間、亜理子の時と同様に光が集束し丸い盾が現れる。

ドガシャーン！

何十倍もある弾丸が一枚の盾によって碎け散った。

「なっ、なんやて！？」

眼を疑うみゆき。

そう、それはまさしく -

「彦一さんの固有スキル」

言葉が漏れる遠時。

「そのスキルは…どうして？」

眼を丸くして聞く亜理子。

「兄弟なんだ。似るのは当たり前だろ」

彦一は右拳を強く握る。

「さあ、最後の勝負だ！！」

走りだす彦一。

亜理子は武器を投げつける。

多くの刃物が止まることなく発射される。

あらゆる攻撃を紙一重でかわし、突き進む。

その瞳は勝利を確信している輝きがあった。

亜理子は手を前に突きだす。

「固有スキル『完璧求めた虚像』<sup>イージス</sup>！！」

発動する技に最後の希望をこめて。

亜理子の前方に光の盾が発生する。

全ての攻撃を返す最強の盾。

しかし、彦一は一瞬も躊躇することなく拳を放った。

ベシャーーン！！

殴りつけた力、全てが右拳に跳ね返る。

それでも…

「あの人の拳は止まらない」

戦い誰よりも強さを知る遠時には勝利の結果は見えていた。

「『アタラクシア』最大解放！！」

彦一の右腕が爆発する！

吹き飛んだ腕の中から筋肉と骨だけの腕が攻撃を続けていた。

「筋肉の急速な活発化に周りの皮膚が耐えられなくなったのか！？」

血の滴る右腕を見ながら遠時は言った。

彦一は一步に力をこめてただ前に突き進む。

ピギッ！

鏡の周りに亀裂が生じる。

「そんな！？全ての攻撃をそのまま返す盾なのよ。どうして防げないの？」

ピギッ！ピギギギー！

一つの亀裂が盾全てに侵食していく。

自らの力に耐えられず崩壊していく状態のまま、その腕を振り抜いた！

盾が砕け散る。

彦一の右腕と同じく盾も攻撃を返せる限界をこえた。

呆然と立ちつくす亜理子。

能力が解除されたのか、みゆきと香美市を捕らえていた鎖が消える。

彦一はゆっくりと亜理子に向かって歩き始める。

「…殺してよ」

消えてしまいそうな声で亜理子は言った。

彦一の足が止まる。

「どうしたの？お兄ちゃんの勝ちよ。早くお兄ちゃんを殺そうとした犯人を殺せばいいわ」

今度は小声ではなく声を張り上げて言った。

「私はお兄ちゃんが憎かった。何でもできて、誰からも頼りにされて、自分の兄だと思えないくらい完璧だった。それなのに…」

亜理子の言葉が詰まる。

彦一の右腕は剥がれていた皮膚がビデオの巻き戻しのように治っていく。

「どうしてあんな風になっちゃったの？どうして母さんを自殺まで追い込んだの？」

亜理子の瞳から大粒の涙が溢れだす。

「違うで亜理子ちゃん！あんたのお兄さんはのせいやない、悪いのは周りにいた -

「みゆき！！」

亜理子よりも声を張り上げてみゆきの言葉を消す。

「いいんだ」

その表情は怒りでも悲しみでもなく、満足げな笑顔だった。

「私はどうやってもお兄ちゃんを許せない。何度考え直してもさらに強い憎しみが生まれるだけなの」

涙が亜理子の顔を壊していく。

今まで見たことないほど感情が表に出ていた。

彦一は静かに目を閉じ、亜理子の目の前に立つ。

「亜理子」

何よりも透き通った声で彼女の名を呼ぶ。

「俺を許してくれとは言わない。むしろ許さないでくれ。それは俺の罪だ。償うことはできない。だからな -

亜理子の頭に手を置き優しく撫でる。



「俺を憎むことが生きる理由になるならその答えを俺は否定しない」

「えっ!？」

予想外の言葉に驚きを隠せない亜理子。

彦一は頭を撫で続ける。

「どんな理由でもいい。生きる答えがあるならお前はずっと笑っていてくれ。俺の目が見えている間は涙を流さないでくれ」

その笑顔は今まで一度たりとも見せることがなかった彦一の心が現れていた。

亜理子の涙が止まる。

「お兄ちゃんのたった一つのお願いだ」

「うん!! 約束する。絶対に破らないよ」

その言葉と同時に亜理子は気を失った。

彦一は地面に倒れる前に亜理子を支え、背負って公園の出口まで歩き始める。

途中、回復した緑が呼び止める。

「彼女を戦いから外さないんですか？」

「俺が生きてるんだ。無理矢理やめさすことはない。全部はコイツに決めさせるよ」

そう言い残して出口に向かう。

出口には神谷遠時が立っていた。

「大丈夫なんですか？」

「大丈夫だろ。ただ血を無くしすぎただけだろうし」

亜理子を軽く背負いながら公園から出て行く。

「なあ、遠時」

すれ違い様に呼ばれる。

「なんですか？」と振り返って言う。

彦一は振り返らずに歩を進めて呟くように話した。

「もし、お前が自らの正義を語るのなら、もっと強くなれ」

「強く……」

「自分の正義を貫けば、その分自分の大事な物を失っていく。俺はその事が耐えられなかった。でもな、お前なら――」

誰よりも正義を知る者は少年に言う。

「自分の正義を守れると信じている。だから、強くなれ！！戦えば自分も含めて全てが悪だ。しかしな、悪の中の正義を見つけろ。それが出来たなら俺のカードをくれてやる」

いずれ越えなければならぬ壁は大切な者を背負いながら消えていった。

「ありがとうございます」

遠時の声が大きく響き渡った。

「だからな、これをこうして――」

「わかんねー!!」

「図書室では静かにしてください!」

あまりにも酷い自分の学力を直すためにみゆきと一緒に勉強をしている今日この頃。

進展がない自分の頭についてしびれを切らして叫んでしまった。

「神谷先輩!ここは図書室ですよ。勉強するなら静かにやってください」

隣で読者をしていた後輩の亜理子に注意を受ける先輩の遠時。

「遠時くん、どうやってこの高校入ったん?数学は壊滅状態やで」

「言わないでー!!」

「静かに!」

今日の図書室は大変賑わっている模様。

さらに、賑わいに油を注ぐように図書室の扉が緑について強く開かれる。

「彦一さんと香美市さんが決闘をするらしいですよ!!」

「なにー!?」「」

急いでグラウンドに向かうと激しく息を切らしている香美市とかなり離れた所でバットを構えている彦一、そして呆然と立ちつくす野球部がいた。

「緑さん?」

「いや、私は決闘と聞いたので…」

「緑?」

「あゝ、その……」

「緑先輩？」

「どうもすみませんでした」

誰がどう見ても二人は野球をしていた。

それも一方的に彦一が優勢だった。

「これで0対48なんだがいい加減諦めてくれないか？」

「うるさいわね！！まだ一回の裏よ」

「逆に言えば、一回の裏でこの結果なのか。コールドは？」

「そんなもんじゃないわよ！どっちかが自分に負けるまでよ！！」

言い終わると同時にボールを投げる。

卑怯だろ！

カキン！！

見事なホームラン。

卑怯ではなかった。彦一にとっては…

「0対49ですね」

「彦一って確か小学校のころ野球してたんやろ」

「それより、自分に負けるってなんですか？ルールおかしくくないですか？」

まず、野球部からグラウンドを奪っている時点でおかしいんだよ！！

仕方なく二人を止めに入る遠時。

「ハイッ！やめましょう二人とも。迷惑かかってますよ。主に野球部に」

「だから、俺はやめたいんだって」

「ヤレヤレと首を振る彦一。」

「止めないで遠時。今は黙って私の勝利を待つ時よ」

一生来ねーよ。

お前の勝利は…

「これ以上やっても絶対に一回の裏は終わらない気がするんだが」  
「うん。私もそう思うわ」  
マジ顔で言う香美市。

馬鹿か？

「とりあえず違う形で勝負をつけましょう」  
緑がグラウンドの端から言う。

「じゃあジャイケンでよくないですか？」  
続いて隣の亜理子が言う。

「ジャイケン？私の得意分野だわ。この勝負もらった」

馬鹿だ！

「ジャイケンだと？本気か？命を賭けるんだな？」

馬っ鹿！

この人ジャイケン勘違いしてない？

「じゃあ、野球部の為にも早くやろ。せーのっ！！」

「最初はグー」

掛け声が始まる。

二人の拳が前に出る。

「ちよつと待って」

「ジャイケン！！」

彦一の血が出るんじゃないかと思うぐらい強く握りしめた拳を  
香美市のいつの間にか取り出したカッターを

「グー!!」

「チヨキー!!」

「予想どうりー!!」

奇跡的に双方とも攻撃をかわす。

二人の間に入って止めようとする遠時。

「どけー! 遠時。決闘の邪魔をするな!」

「うるせーよ! さっきまで嫌がっていたのになんで今ノリノリなん  
だよ!? て言うか誰か止めるの手伝ってー!」

危険すぎる二つの攻撃を止めるのは不可能だった。

しかし、助けを求めた相手達は -

「試合があるのです怪我はちよつと...」

「アッハハハハハハハハハハ!!」

「香美市先輩ー! チヨキはハサミですよー!」

全部人任せだった。

「あつそうか」と言つてカッターをハサミに持ち変える香美市。

「だゝから! やめるー!」

夢を叶える戦い - ゲットバトルドリーム -

この戦いでは自らの夢のために他の人間を傷つける。

仲間は一人もなく。

頼れるのは自分の力。

その戦いの中で彼らの楽しげな笑い声は少し長く続いていた...

#### 第四話『完璧を求めた虚像』（後書き）

すいません。また少し長くなりました。

今回の話は遠時よりも彦一の出番の方が多かったですね（笑）  
自分でも彦一は気に入ってます。

では、まだ続きますのでこれからもよろしく願います。

## 第五話『バトルバケーション』前編（前書き）

彦一との事件も解決し、遠時達の学校に夏休みが訪れる。

しかし、仲間との楽しい旅行で待ち受けていた新たな戦いとは！？

ゲットバトルドリーム第五話始まります。



## 第五話『バトルバケーション』前編

「うわ~~~~！すごいわよ遠時。高いわ〜」

「ああ、高いな。周りの市民から苦情がきそうな高さだな……」

「あんなところに泊まれるなんて感激やな〜緑」

「そうですね。中にもいろいろあるみたいですしね」

「フフ。喜んでもらえて嬉しいね、お兄ちゃん？」

「……………眠い」

『日夜タワー』

ここ最近、海の上に建てられた高層ビルで真ん中に小さいビルがありその左右に巨大なビルが建っている。

内部には宿泊できるホテルのほか温泉やプール、水族館にゲームセンター、ショッピングモール等々をそろえた建物で開園二週間で世界中からの予約が殺到する大人気スポットである。そんな場所に何故俺達が向かっているかって？

それは今から十日前の出来事がきっかけだった。

七日の命をかけて必死に鳴く蝉の声が校長の話をかき消す体育館に「神谷遠時」はだらけていた。

夏休み前日の終業式ほど時間の無駄と思えるものはない。

そんなことを考えていると校長の話も終り生徒会長の話に移る。

だらけていた背中が一気に伸びて見事な直立不動になる。

檀上に上がった黒髪の青年「神童彦一」の目がコチラに向けられたからだ。

あの生徒会長は俺の場所を覚えているみたいで檀上に上がるたびに睨んでくる。

彦一の話中にすっかり寝てしまつて、顔面にマイクが飛んできて以来、生徒会長の話だけはしっかり聞かなければならなくなつてしまつた。

「なので、いくら夏休みだからと言って我が校の恥になるようなことは絶対にするなよ。特にバイクの免許とるとか」

ああ、お前がな！

「遠時〜！夏休みやで、どっか遊びに - グエッー！？」

「遠時！夏休みよ。遊びに連れてつてよ」

集会が終り、さあ帰るぞつというところで勝岡と香美市の攻防が始まる。

今のは香美市のローキックが勝岡にジャストミートした模様。

「酷いやないか香美市ちゃん！いきなり蹴るなんて」

「私にちゃんを付けるんじゃないわよ。気色悪い！虫酸が走るのよ

！！」「じゃあ絵里」

「死ねー！！」

俺に当たつたマイクよりも強烈な右フックが顔面に直撃する。

「なんで殴るの！？香美市ちゃん自分で言つてたやないの、遠時が何時までたつても名前で呼んでくれへんって！だから、僕が呼んだあげてるんやんか」

「滅びろ！ゴミくずー！！」

そろそろ刃物が出できそうなので止めに入ろうとするとクラスの男子に呼ばれた。

「おい！神谷。可愛い子ちゃんが教室前に待つてるぜ」

可愛い子？

俺の知り合いの女子に「可愛い」はいても子はいたかな？

周りに茶化されながら教室を出る。

そこにいたのは生徒会長の妹「神童亜理子」だった。

「ああ。確かに子だ」

「あの…何言ってるんですか？」思わず声にでたので「なんでもないぜ」とカッコよく誤魔化す。

後半の方は嘘です。

「で、何のよう？」

話を変える。

「えっと、あのですね」

「うわゝこの子めっちゃカワイイな！！今度遊びに行かへん？」

ハイ！勝岡登場

かなり驚く亜理子。

香美市の方はどうやら暑さに耐えられずに水分補給を行っていた。

「なっ！いいやろ？遊びに行こうよ」

「ええゝいやゝちよつと…」

助けを求める視線を送ってくる亜理子。

仕方なく蹴りの準備をした時だった。

ガシッ！

勝岡の頭がつかまれる。

「誰の妹口説いてんだ？」

最強の生徒会長「神童彦一」が勝岡にアイアンクローをかける。

「うわっ！お兄ちゃんどこから出てきたの！？」

「その窓から」

ここは二階ですけど！？

つかんでいる手に力がこめられる。

「ギャーーン！」

メシメシメシつと普段では耳にしない音が教室中に聞こえる。

「彦一さん！勝岡が死にますよ！？」

「大丈夫だ。こんなに生徒がいるんだから一人ぐらい消えても誰も気付かないさ」

白い歯キラーン！

「ぜんぜん大丈夫じゃねー！！」

止めようと彦一のもとに駆け出す。

ガシッ！

「なるほど。お前も消えたいんだな？」

ギリギリギリギリ…

「痛たたたた…」

今、彦一の両手には二人の男子高校生がわしづかみされている状態である。

「もう！！お兄ちゃん。そんなことしに来たんじゃないでしょ！」

「あつ…そうだったな。チッ！！」

なぜ舌打ち！？

彦一のアイアンクローから開放され頭蓋骨が無事かどうかの 確認  
をしていると、亜理子から紙が渡された。

「『日夜タワー』 宿泊券？なんですかこ…」

「遠時！！ちよつとそれ見せて！」

言い終わるよりも先に香美市は叫び声あげた。

宿泊券を強奪し、凝視するほど約二秒。

香美市の肩がプルプルと震えだす。

「間違いないわ！あの『日夜タワー』の宿泊券じゃない！？どうしてあなたが持つてるの！」六枚の紙を亜理子に突きだす。

「『日夜タワー』ってなんなんだよ？」

亜理子にしようとした質問を香美市にする。

「なんでしないのよ！新しく海の上に建てられたホテルでね、すつごく楽しそうなのよ。私も行きたかったんだけど予約がいっぱいだったのよ」

そういえば世界的な建物を建築したってニュースを聞いたことがある。

「なんでそんなスゲーもん持ってるんですか？」

香美市と同じ質問をする。

「それはですね。父が日夜タワーの建築に関わっていてですね。えっと、何の仕事だったかな…」

「タワー内部の防犯セキュリティだよ」

間一発に彦一のフォローが入る。

「あつ！そうそう。それ」つと亜理子は言った。

「防犯セキュリティですか。彦一さんの親父さんすごいですね。そんなの作れるなんて」

やっぱり親父さんも天才なんだな

「まあ、作ったの俺だけだな」

「あんたが作ったのかよ！？」

「父さんがどんなに考えてもうまくいかないから俺に頼んできたんだよ」

「それで、作れてたのかよ…」

訂正。やっぱりこの人だけが天才！！

「お父さんに経営者の人から贈られたものですが、事情が事情ですから、私達に譲ってくれたんです」

ニコニコ笑いながらコチラを見る。

「夏休みお兄ちゃんに行くんですけど、それでも四枚余るんでこの前の謝罪もかねて一緒にどうですか？」

「「いいの!？」」

顔を見合わせて声もそろえる。

「渋々だな」

ボソツと彦一は呟いた。

「それやったら、僕も一緒に」

「ああ!!」

「なっなんでもありません。ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

でしゃばった勝岡を一言でねじ伏せた彦一であった。

「それだったらみゆきさんと緑さんも誘うんですよね？」

「ええ〜!別に誘わなくてもいいよ」

香美市がブツブツ言う。

「そう言うこと冗談でも言うな!」

「マジなんだけど？」

「オーイ!？」

この女はまた失礼なことを……

「いいじゃないですか亜理子先輩。音羽先輩おもしろいし」

「その通りやな〜。香美市ちゃんも酷いこと言うなあ〜」

「うわっ!？音羽先輩!どこからでてきたんですか？」

「その窓から〜」

だからここは二階!!

「聞いてたけど、『日夜タワー』に泊まれるんやって?」

ズイツと亜理子にせまって言う。

「チ、チケツトはあと二枚残っ」

「じゃあ私と緑で決定やね。私達部活あるからえっと……じゃあ十日

後の9時に学校集合な！うわゝ楽しみやわ。それじゃバイバイ」  
廊下をスキップで移動しながらみゆきは消えていった。

「……なんだったんだ。あの人は」

「少なくとも、みゆきが喋ると文字数が多くなるのが問題だな」

えっ！？文字数ってなんですか？

「ホントだね。読者に申し訳ないね」

「ストップ！！もうだめだから！この話終了！！」というわけで俺達は『日夜タワー』に宿泊することになった。

「遠時！遠時！魚がいるわ」

香美市が当たり前のことを言う。

「ガラスが割れないか心配です」

「大丈夫だろ。世界的な建物だぜ」

駅には大勢の人が電車から降りてそれぞれに歓喜の声を漏していた。

宿泊するホテルに案内され、俺は彦一さんと一緒だった。

「イヤー！広い部屋ですね。眺めもいいし」

「これでも小さい方だぞ。もっとでかい部屋もあるしな」

荷物をベッドに置き着ていたコートを脱ぐ。

「やっぱり一番広いのは最上階ですか？」

「確か俺達がいるビルの最上階はパーティー会場のはずだ。もう一つのビルの最上階はセキュリテイルームだと思うが」

彦一は独り言のように呟いた。

そして、鞆から水着を取り出した。

「よし！行くか」

「了解っす！！」

俺達の楽しい夏休みは始まった。

プールでの遊びも終り昼食を食べていると彦一の携帯が鳴った。

「もしもし。あつ父さん？なに………わかった。まかせて」

携帯を切り、荷物をまとめ始める彦一。

「お兄ちゃんどうしたの？お父さんから」

「ああ。ちよつと問題が出たらしくてな。俺が見てくるよ」

そう言つて店から出て行こうとする。

これはマズイ！男子が一人になつてしまふ。それは気まずい！

「彦一さん！俺も行きます」

「ちよつ？遠時！」

有無も聞かずに店から出ていった。

「来てもすることはないぞ。まあ、男一人はつまらんか」

なんとなく察してくれた彦一であった。

地下駅の従業員専用通路の扉の前に遠時は立っていた。

彦一と違い遠時は中に入れないため電車から出てくる人達を眺めていた。

ここにいれば世界中の人間に会える気がした。

「ん？」

降りてきた人達の中でひときわ目立つ二人組を見つけた。

一人の男は金髪のオールバックで黒いマントのような物を着ていた。もう一人の男は絵に書いたような中国人で小さく髪を結んでいた。

「ここのホテルの人かな。おもしろい服装だし」っと独り言を呟い



た。

その時だった。

ドゴーン！

上の方から轟音と震動が訪れる。

周りから溢れだす悲鳴。

「なんだ？何が起きたんだ？」

その答えを教えるように覆面を被り銃を持った奴等が現れた。

「俺達はテロリストだ！死にたくなければ言う通りに動け！！」

俺達の地獄のような夏休みはこうして幕をあげた。

十分前 -

「で、何があっただんですか？」

地下駅の制御室で彦一は画面を監察していた。

「あのですね。最上階のセキュリティホールと連絡がとれないんです」

役員の人間が状況を報告する。

「そうですか。ちよつと貸してください」

キーボードを叩き始める彦一。

カタカタカタ -

「これはメインコンピュータになにかあるな…。ハッキングかなんだこのボックスは？」

独り言をブツブツと言いながらクリックする。

すると三十秒から減っていくタイマーが表示された。

「おい！まさか、これ…」

操作スピードを高速化しタイマーがかけられている場所を調べる。

設置場所は陸からホテルをつなぐ道路と全ての制御室だった。

タイマーが十を切る。

「伏せるー！！」

ドゴーーンー！

設置された爆弾が爆破された。

「クッソ。こつちにもか」

物影に隠れながらテロリストの様子を伺う遠時。

宿泊客はエレベーターに乗らされ、テロリスト達は探索にあたっていた。

（捕まえられるのが嫌だったから隠れたものの、見つかったら殺されるかな？）

その場から移動しようとした。

ガバッ！

「ぐむうー！」

口を押さえられ、引きずられていく。

「ぐう！ゆむー！」

「うるさい！黙れ」

その声の主はボロボロの服を着た彦一だった。  
ある程度まで遠時を運び口から手を離す。

「大変です、彦一さん！爆発が起きてテロリストが」

「知ってるよ」

「あっ…そうすか」

彦一は辺りを確認する。

地下鉄の入り口のシャッターが降りており電車が出れない状態だった。「あのシャッターを開けないと不味いな」

「どうしてです？」

「さっきコンピュータで状況を見たが陸に続く道路は破壊されている。となると警察が入って来れるのはこの道だけだ」

辺りを再度確認して彦一は言った。

「じゃあ、シャッター壊すんですか？」

「あのシャッターはそう簡単には壊れないよ。無理に壊そうとすれば周りのガラスが割れて、みんな仲良く海の底だ」

そう言つて物影から立ち上がる。

「えっ！何やってるんですか？見つかりますよ」

「シャッターを開けるには最上階のセキュリティホールで操作しなくてならないんだ。行くしかないだろう」

堂々と歩きだす彦一。

「なら隠れて行きまー」

「貴様ら！そこを動かんなー！！」

「ほら、見つかった」

ドゴッ！バキッ！グチャー！

「問題ないだろ」

テロリスト瞬殺！

物影からゆっくり出ながら「能力使って大丈夫なんですか？」と言  
う。

「神の奴がなんとかするだろ」

彦一は遠時に眼もくれずに歩きだす。

「待ってくださいよ」

後を追う遠時。

「こいつは驚いた」

静寂を打ち破る声が響く。

振り向くとあの妖しげな二人がいた。

「私達ノ部下ハミンナ殺ラレタヨウネ」

「まあ、能力者とただの人じゃ無理だろ」

金髪のオールバックと中国人は暗く笑う。

「お前らは何者だ？能力者か？」彦一が間合いをつめ始める。

「そのとおりだな。まずは自己紹介だ。俺の名前はヴァン・デプレス。こっちの方はキム・コウガ。よろしくな」

ニヤツと笑いだす。

コウガと言う男はペコリと頭を下げる。

「神谷遠時です」

「生徒会長だ」

自己紹介じゃねー！

ヴァンは大笑いをする。

「貴様らの目的はなんなんだ？」

彦一は切り替えて二人を睨む。

「おおっと！？怖い怖い」とおどけるヴァン。

「簡単ダ。理想国家ノ建国ダ」

「今回こそは叶えてみせるぜ」

コウガとヴァンは真っ直ぐ彦一を見て言った。

「理想国家だと？」

「俺達は全員、政府や国に裏切られた奴等の集まりなんだよ」

ヴァンは悔しそうに言い、さらに続ける。

「だから、俺達は裏切った国への復讐と自由を求めてるんだ」

コウガは目を閉じてうつむいている。

「そうか…」と彦一悲しそうに言う。

「ちょっと待てよ！ヴァンさん、今回は叶えてみせるってどう言うことですか！？」

二人はキョトンとした顔になり、その後にもた笑いだす。

「ソウカ。オ前ハ始メテナノカ」

「横の生徒会長さんもそうなんじゃねーの」  
ケラケラと笑いながら彦一を指差す。

彦一はなにも言わず攻撃のタイミングを測る。

「この戦いは今回が初めてじゃねーんだよ。これで三回目。俺達は前回は参加してたんだよ」

「こんな戦いがもう二回もあつたのか……」  
信じがたいことだった。

「ソロソロ始メルゾ。アマリ時間ヲ、カケルワケモイカナイ」

手を袖からだして構える。

「やるしかないのか！」ビシュー！

ヴァンと遠時は啞然とする。

向かつて来ようとしたコウガを彦一が蹴り飛ばしたのだった。

「おいおい、生徒会長さん。いきなりすぎだろ」

ヴァンは苦笑しながら黒いマントで身体を包む。

「遠時！そいつは任せた。俺は中国人の方を殺る」

言い終わるよりも速く走りだす彦一。

「クツソ！戦うしかないのかよ」

戦場に足を踏み出した。

「へえー。やっぱり生きてたか」

瓦礫の中から出てくるコウガの前に彦一は立つ。

服の埃を払いながらコウガは彦一に近づく。

「生徒会長ノ癖ニ礼儀ヲ知ラナイ奴ダナ。イキナリ蹴ルトハ」

「戦いなんだ。礼儀なんて糞喰らえだ」

拳を構え敵を見据える。

「行くぞ。『アタラクシア』発動！」

脚のリミッターを外し高速で攻めにかかる。

右に周りコウガの顔面に向けて腕を振り抜く！

だが、コウガは避けない。

右手の一撃が直撃する。

ベキッ！

「なっ！？痛っー！」

放った彦一の拳から異様な音なる。

殴られた箇所を気にすること無くコウガは指を突き立てて彦一の胸を貫こうとする。

それをかわすべく後ろに大きく跳躍する。

「ヨク、カワシタナ。普通ナラ動揺デ動ケナイ、ハズダガナ」

「その能力：“硬化”か？」

砕けた拳を再生させる。

フツとコウガは笑い上着を脱ぎだす。

「ソノトオリダ。私ノ能力『アトミツクアームド』ハ貴様ノ攻撃デハ傷ツケルコトハ、不可能ダ」

コウガの身体が鉄のように硬くなっていく。

両者共に走りだす。

コウガが左手を、彦一が右手を突きだす。尋常ではない速さで放たれた二つの拳がぶつかりあう。

「ぐっ！」

「無駄ダト言ツテイル。貴様ガ勝ツコトハデキナイ」

余裕の笑みでさらに追撃を試みる。

顔面に向けての右の脚の蹴り！

当たれば顔は粉碎されるだろう。

「……ガードは無理か」

両腕を前にだし、防御の姿勢をとる。

ボギッー！

右腕が折れた感じがした。

「チッ！」

体制を立て直す彦一。

「貴様八変ワツタ奴ダ。腕ガ折レテイルノニ悲鳴モアゲナイ。貴様ハ何者ナンダ？」

異形な物を見る目で彦一を睨む。

「何者でもねーよ。ただの生徒会長さ」

彦一の目付きが変わる。

「『アタラクシア』70%開放!!」

左腕が膨張を始める。

「行くぞ。コウガ！俺の一撃、受けきれるか!!」

「オモシロイ。来イ！」

両手を広げて胸を硬化させる。

「おおおおおー!!」

彦一の拳が振り抜かれる。

その拳は真っ直ぐにコウガの鋼のように強化された胸に直進して、激しく衝突する。

鼓膜を破るような轟音がビル中に木霊する。

「ガアアア!？」

胸を押さえて膝を付くコウガ。

彦一が繰り出した一撃は鋼を貫き体内部にまで貫通していた。

「ドウナツテイル？貴様ノ左手ハドウナツテイルンダ！」

吐血を繰り返しながらも話す。

「だから、何もねーよ。ただ、昔の古傷が消えてないだけだ」

右腕の骨折を再生させ、無傷の左腕で服の汚れた箇所を払う。

「じゃあな！運がよかったら助かるところうぜ」

言い終わると背を向けて歩き始める。

新たな戦い場へと男は歩き始める…

崩壊した地下駅で二人の戦いが続いていた。

「すげな、お前。俺をここまで殴れるなんて思ってもなかったぜ」  
口の血を拭いながらヴァンは微笑む。

マントの中に収納されていた二本の警棒を握り全力で向かって来る。  
先程のように自らの時間を外し、敵を迎え撃つ遠時。

大きく横に振られる警棒をしゃがんでかわす。そのカウンターで右  
手の拳を放つ！

拳は真っ直ぐヴァンの顔面へと直撃する。

「うぐっ！」

ヴァンはうめき声をあげながらのけ反る。

「降参してください。あなたでは俺には勝てません」

能力で全てをスローで見ている遠時にとってヴァンがどれだけ強か  
ろうとも結果は一目瞭然だった。

「へへへ……なら、俺も本気だすかな！」

叫びながら二本の警棒を一本につなげる。

「『エナジーソーサー』発動！」

その瞬間、遠時の視界が黒に覆われる。

能力の力ではなくヴァンのマントが遠時の視野を奪っていた。

これは危険だ！

すぐさま横に跳ぶ。

マントの上から何かが一閃し両断する。

少し飛び退くのが遅く、左脚が浅く出血する。ヴァンの姿を捕らえ  
る。



ヴァンはつなげたことで長くなった警棒を片手にいやらしい笑みを浮かべる。

「よく避けたな。一撃で終わらせるつもりだったのに」

長くなつた警棒の先からは紅色の炎のような刃が放出されていた。その形はまるで鎌のようだった。

「俺の能力『エナジーソーサー』は自分の生命エネルギーを武器にできる操作型だ。死にたくなかったら命乞いでもするんだな」

「悪いんですけど、そう言うの嫌いなんですよ」

「そいつは残念だなー！ー！」

さっきの繰り返しのように全力で向かって来るヴァン。

「行くぜ！俺の能力の真骨頂」

間合いを詰められる。

遠時は攻撃を避ける体制を整える。

「二重奏<sup>デュオ</sup>！ー！」

素早く上からと横に振られる鎌。

だが、

「甘い！」

ギリギリまで鎌をひきつけ一歩で後ろに回避する。

この一発で終わらせる！！

拳を握り締め前方に飛び出したその時だった…

振りおろされたはずの鎌の刃だけがそのまま直進してきた。

「なつにー！？」

いくらスローに見えていても前方に飛び出た身体が止まらない。

紅い刃は遠時の胸に十字の傷をつけ、体ごと吹き飛ばした。

地下駅の柱にぶち当たる遠時。

「こぶっ…」

想像以上に傷は深かった。

「侮ったな神谷遠時。だから言っただけ死にたくなかったら命乞いしろと」

ヴァンは鎌をクルクルと回しながら近ずいてくる。

脚に力をいれ、なんとか立ち上がる。

「まだ、ここからです」

今度は遠時から走りだす。

鎌から紅の刃が放たれる。

軽くかわして自分の攻撃場所に移動する。

ヴァンの目の前にピツタリとくつつく。

「これなら、鎌は振れない！」

一気に攻撃を仕掛けようとする。

「俺に死角はない！」

左手を腰に回して三本目の警棒を取り出す。

「三重奏<sup>トリオ</sup>！！」

新しい警棒からも刃が現れる。

下から上に一閃される鎌。

遠時はギリギリの所で反応し、かする程度ですまされる。

が、新たな鎌の刃も遠時に向け放たれる。

「くっ！そー！！」

遠時は転がりながらも攻撃をかわす。

「よく避けた。だが、これならどうだ！！」

何度も鎌を振り続ける。

それに合わせていくつも刃が飛び出す。

「おらおらおらおらー！！」

崩壊した地下駅が紅色に染まっていく。

「嘘だろ！？畜生ー！！」

スローに見えていても回避する場所がない！

ドゥーー！！！！

刃は弧を描きながら遠時に直撃した。

「終わったか…」

ヴァンは煙が立ち上る方を見ながらゆっくり歩きだした。命中しなかった刃が地下駅を壊していく。

瓦礫が崩れ落ちるなかで「神童彦一」は戦いを見続けていた。いまだに煙が上がる場所では人の気配はない。

「こんなものじゃないだろ遠時。お前の言う正義を証明してみろ」  
誰にも聞こえないぐらいの小さな声で彦一は呟いた。

何も見えない真つ暗な世界で頭の中で誰かが叫ぶ

「ここから逃げろ！」

うるさい！

「速くしないと死んでしまう」

黙れ！

「生きることが何よりも大事だ」

そんなこと分かっている。

「死にたいのか？」

違う、俺はただ -

「貴様は、ただ？」

目の前の人達を救いたただけだ！

「目の前の人達？誰だ？」

香美市やみゆきさん、緑さんに亜理子。今捕まっている人達。そして、このテロリストだ！

「テロリスト？何故救う？こいつらは敵だぞ」

この人達は間違っている。裏切られても復讐はしてはいけない。他の人達を傷つけてはいけない。だから、それを今伝えたい。

「何故そこまでする？」

「それが俺の正義だからだ！」

一気に視界が明るくなる。

「なら、その正義に力を貸そう。我が剣貴様に使えきれるかな？」

「上等だ！さつさと力を貸しやがれ！！」

立ち上る煙が一瞬にして晴れる。

驚いて振り返るヴァン。

瓦礫の中より立ち上がった遠時はヴァンを睨み付ける。

「さあ、全力で向かって来てください。それを俺が全力で叩き潰します！！」

遠時が右手を前に突き出す。

「行くぞ！固有スキル『英雄の試練』ランスロット発動！！」

その瞬間に強烈な閃光が走り、台風を思わせる突風が吹き抜ける。

風が集まり遠時の右手に一本の刀が現れる。

「なんだよ。それ？」

刀は西洋風な感じで黒色の鞘に収めてあった。

「この刀は俺の正義の形だ。見ろ！この刃ー！」

遠時は刀を抜こうとする。

ギギ…ギギギー…！

「抜けない！？」

「ぶあっははははははー！！」

腹を押さえて床に転がりながら大爆笑するヴァン。

遠時は何度も抜こうとするが鞘から刀は離れない。

「クッソ！どうなってるんだよ」

ヴァンは床から立ち上がり鎌を構え始める。

「忙しい所、悪いな。俺も時間が無くてね。恨むなよ！」

間合いを詰めて一気に攻撃を仕掛けてくる。

今は能力を使つてない！！

通常のスピードで振り下ろされる鎌を避けることは不可能だった。咄嗟に鞘に入つたままの刀で鎌を防ごうとする。

紅の刃が鞘にぶつかった時だった。

紅い刃がまるで粘土のように形を変えて二つに解れていった。

鞘はそのまま先の警棒を難なく切り落とした。

「……………はあ？」

ヴァンの表情が驚愕の色に染まる。

「そこだ！」

隙を見てヴァンの腹に鞘のまま斬りつける。

ドゴッ！

ヴァンの身体も真つ二つに斬り落とした。…ではなくただの峰打ちだった。

「……………はあ？」

自分の顔も驚愕に染まる。

腹を押さえながらヴァンは後ろに下がって距離をとる。

「どうやら、その刀は人間には意味無さそうだな」

「そうみたいです。でも、-

刀を握り直す。

「勝てる見込みは出てきました」

お互いに顔を見合わせてニヤツと笑う。

「面白い。なら、俺も最高の技を見せてやる！」

どこからともなく四本の警棒を取り出して、二本につなげる。

つながれた警棒からは今までに無いほどの紅の刃が燃え盛った。

カルデット  
「四重奏！」

二つの鎌を振り回し、刀を放ち続ける。

逃げる場所など何処にもなかった。

「俺は逃げない。立ち向かつてみせる！」

飛び交う刃全てを弾き落とす。

しかし、それよりも速く地下駅が紅く染まっていく。

「消え失せるー！」

ヴァンの鎌を振る力が強まる。

紅の刃が遠時に傷をつけ始める。

「数が多すぎる！」

このままじゃ負ける！！

「貴様は何を勘違いしている？それは斬るための物じゃない。貴様の力はなんだ？」

突然聞こえてきた声。

「俺の力？デステイニ・チョイスのことか？ってことはもしかして

……」

一人で呟きながら一つの答えにたどり着く。

持っている刀を前方から迫りくる鎌の刃にむける。

「能力発動！我が剣『英雄の試練』ランズロットよ、視野の全ての物質の世界軸を凍結！！」

知らず知らずの内に頭に浮かんだ言葉を発する。

刃は言葉通りに動きを止め、空中に浮かんでいた。

「どうなつてやがる！？」

今までに聞いたことの無いような声でヴァンは叫び声をあげる。

遠時は刃をかわしながら敵のもとに全力で走った。

「俺は負けるわけにはいかないんだー！！」

ヴァンも同時に走り始める。

両者との距離が縮まっていく。

遠時の剣の間合いより先にヴァンの鎌の間合いに入る。

「もらったー！！」

二つの大鎌を一気に振り下ろす。

刃は体制を屈めて走っている遠時を完璧に捕らえていた。

遠時は避けずに屈めたまま、剣を頭の上に構え、直進した。

ギギイイーン！

紅く燃える刃が鞘と衝突する。

今度は斬り裂けずにぶつかり合いが続いていた。

「どうしてだ！？何故防がれる！」殺せない悔しさに言葉を荒げる。

「悪いんですけど、あなたと俺じゃ背負ってるものが違うんです！」

自分の叫び声と共に刀を横に大きく振る。

ズバーン！

二つの鎌が綺麗に両断された。

「ぜあー！！」

ヴァンの肩に目掛けて一閃。

バキッ！

ヴァンは肩の骨が砕け、口から血を吐き出し地面に膝を付く。

吐き出した血が自分の頬にかかる。

「クッソ！俺はまだ負けてねー！！勝負だ、こらっ！」

「あなたは誰のために戦ってるんですか！！」

叫ぶヴァンを一喝する。

「あなたは分かってるはずですよ。こんなことしても無駄だと。理想

国家なんて造ろうと思ってないはずですよ」

「そ、そんなことは……」口ごもるヴァン。

さらに追い討ちをかけて言う。

「復讐をする人があんな楽しそうに笑えません。あなたはもう裏切られたことを許しているはずですよ」

「……………」

ヴァンは何も言わず遠時をじっと見つめる。

「今のあなたはどうすればいいか分からずに戸惑っているだけですよ」

167





轟音と共に吹き飛ばされ、壁に直撃する遠時。

「やはり世界に呑み込まれたか…」

彦一は壁に寄りかかっている遠時を眺めた。

「痛っうー。ここは？」

「地下駅だよ」

起き上がるとすぐ横に彦一が座っていた。

「そうだ！ヴァンさんだ。あの人知りませんか？」

「死んだよ」

静かに言い、指をさす。

立ち上がり見に行くところには見る無惨な死体が転がっていた。

「そんな……誰が？」

「覚えてないのか？お前が殺ったんだ」

「そんなはずない！！」

全力で否定した。

「俺は倒しはしたけど殺してはいない」

殺すはずがない。

分かり会えたのに殺すはずがない。

「確かにお前は殺してはいないさ。世界が殺したんだ」

「世界だと？」

「そうだ」と言っただち上がりこちらに近づく。

「お前の『デステイニ・チョイス』の能力は人が生きる時間、世界軸を操るところができる。つまり -

彦一は目の前で脚を止める。

「お前は“神”と同様なんだよ」

目眩がした。

自分の力の強大さを理解していなかった憤りと恐怖が込み上げてき

た。

「始めの状態それはまだ世界軸に触れる程度だから、止められるものは限定され、時間も限られる」

話を進めながら後ろに立つ。

「だが、お前の固有スキル『ランスロット』は、もはや神具とも言つていくくらいの能力だ」

遠時はゴクツと唾を飲み込む。

「あの刀はお前と世界軸との距離を強制的に引き付ける磁石のような物だ」

「距離が縮まればどうなるんですか？」

「言つたろ。世界軸とは人が生きる時間でありそこには意思がある。距離が縮まればその意思が自動的に脳に読み込まれていく。一つの脳では世界は処理できない。よかつたな刀が抜けなくて」

「抜いていたらどうなっていたんですか？」

「簡単だ。ただでさえパンパンの風船にさらに空気を入れたらどうなる」

遠時は沈黙した。

パーン

彦一は手の平を叩いて音をだす。

「まってるのは崩壊だ」

言い終わると階段へと歩きだす。

「速く来い。亜理子達を助けに行くぞ」

「彦一さん」遠時は死体見て涙を流しながら尋ねる。

「なんだ」と後ろを向いたまま言う。

「何故、そんなことを知ってるんですか？」

神童彦一は確かに天才だが、これは知識とかの話ではない。知っていることがおかしいことなんだ。

「そんなことか。知ってる、もなにも当たり前だろ？」

振り返り微笑みながらその言葉を告げた。

「俺の前の能力は『デステニー・チョイス』。そして、前回のゲットバトルドリーム優勝者だ」

その微笑むを俺は忘れないだろう……

続く

## 第五話『バトルバケーション』前編（後書き）

遅くなっちゃってますいません。

どうも、青春太郎です。

今回の話も長くなりそうなのでお付き合い願えたら幸いです。

第六話『バトルバケーション』CRAZY SWORD』中編（前書き）

ゲットバトルドリーム第六話！

戦場と化した『日夜タワー』で死闘を繰り広げる遠時達。

終にテロリストの目的があきらかに！？

そして、緑の真の力とは？

第六話『バトルバケーション』CRAZY SWORD』中編

豪華なシャンデリアは崩れ落ち、照明も消えた『日夜タワー』のメインホールで香美市、亜理子、緑、みゆきは隠れていた。

「けっこうな時間こうしてますけど、まだ動けませんか？」

「速く遠時と合流したいのに…。ジレンマね」

ビルを支える柱の後ろで周りの様子を伺う。

その時 -

ドギューー！

静寂を撃ち破る銃声。

柱が砕けさる。

「大丈夫かあ？姿勢を低くしときや」

「狙撃主の場所がわかってませんから、無闇に飛び出さないでください」

「わかってるわよ！」

ドギューー！

今度は香美市の足下の地面が決れる。

「クッソ！」

「香美市先輩。気を付けてください」

彼女達は一人のスナイパーに狙われていた。

「……ふっ」

スナイパーは静かに笑った。

敵は四人だが居場所は知られていない、ゲットバトルドリームの参加者のようだがコチラの有利には変わらない。

ゆつくりと確実に殺していけばいい。  
狙撃主はいくつもある武器一つのライフルを構え直した。

「ちょっと彦一さん。待つてくださいよ!」

神谷遠時と神童彦一は地上に続く階段を上っていた。

「五月蠅いぞ。さつさと上れ」

「優勝者ってどう言うことですか?」

「言葉通りの意味だよ」

「じゃああなたはいつたい何を願ったんですか?」

「……………反応はない。」

「彦一さん!」

「黙れ!お前には関係がない!!」

叫び声が階段中にこだまする。

「関係あります。もし彦一さんが自分の夢のために人を殺していたなら俺は……………」

「お前はとうするんだ?」

振り返ってコチヲをジッと睨んでくる。

「自分のために人を殺す?なら、お前もそうだろう?」

「ッ!」

一番痛いところを突かれる。

どんな理由でも、遠時は一人の男を殺してしまった。

「自分の気持ちすら整理できてない奴に言える話じゃないだろ」

前に向き直り、ゆつくりと階段を上り始める。

「じゃあ彦一さんはこの戦いで死んだ人達を割りきってるんですか?」



「まさか」っと彦一は笑う。

「何もかも忘れてはいない。俺が殺してきた全ての人の顔と記憶。俺の背負うべきものだ」

その横顔は今まで見た中で一番哀しそうな表情だった。

その時だった。

「動くな!!」

上の階段からテロリストが現れた。

銃を構えたままコチラに近づいてくるテロリスト。

「遠時」

彦一は体勢を屈め始ながら名前を呼ぶ。

「何ですか？」

「お前の固有スキル『英雄の試練』ランズロットは連続使用しなければ暴走はしないはずだ」

「ホントですか!？」

「ああ。だから援護を任せたぞ!!」

そして、また戦いの幕が開かれた。

狙撃主「クアットロ」は一人の男と連絡をしていた。

「こちらはまだ片付いてはいないわ。地下担当のヴァン達はどんなつたの？」

無線に声をかける。

「彼等は失敗したようだ。通信がとれない。お前が狙ってる奴ら以外にも参加者がいるようだ」

雑音じみた音から聴こえてくる言葉に耳を疑った。

「ヴァンが殺られたの!?!無線機の故障じゃないの?」

「間違いない。現に向かわせた部下達から連絡がない」

「……そう」

クアットロは静かに溜め息をつく。

ヴァンを少しは認めていたけど買い被りだったようね。

そう心で思いながら改めてスコープを覗き直す。

「ヴァン達を倒した奴らはそちらに向かっている。さっさと片付けろ」

「うるさいわね！わかってるわよ」

怒鳴り声をあげ無線を切る。

「そんなに速く殺って欲しいなら殺してやるわよ」

クアットロは背中の中型の大型のギターケースからロケットランチャーをとりだした。

メインコンピュータの前に立つ男「ゼノ・ウィング」はゆったりと景色を眺めていた。

外では警察やマスコミで溢れかえっている。

クアットロに怒鳴られた耳が痛い……。

ちゃんと仕事をするか心配だった。

そういえば先程かかってきた警察からの電話では要求は何だと聞かれた。

答えずに切ったが考えてみると自分の要求は何なんだろうか。

実を言えば自分は国に裏切られてなどいない。

この世界に憎しみを持っているわけでもない。

初めは普通の名の知れないサラリーマンだった。

しかし、この戦いに参加して自分の力に感動をした。

自分はこんな神がかった力を持っているんだと喜びまわった。

そして思った。

普通の人間ではできない神がかったデカイことをしようっと。

世界の誰もが驚くような事件を起こそうと。

幸いなことに人員を集めることに苦労はしなかった。

政府に恨みのあるテロリストを上手く丸め込めてこのテロを計画した。

そして今、俺の計画は成功に近づいている。

ゼノは人質を捕らえている部下に連絡をした。

「次に俺が連絡をしたら人質を一人ずつ殺していけ。マスコミに見えるようにな」

「了解」

ゼノ・ウィングは飛び交うヘリコプターを見つめて不敵に微笑んだ。

「じゅ、銃声はやみましたね」亜理子は周りに告げた。

「油断は禁物です。おそらく敵はプロの殺し屋ですから」

机の影から顔をだす緑。

「怖いわ」つと続けて顔をだすみゆき。

「今の内に逃げた方がいいんじゃない？」

「いえ。相手側もそれを待っているのかもしれない」

柱にへばりついていた香美市が提案をするが緑に即却下される。

「うゝん。残念だけどちょっと違うわよ」

その時、四人の後ろにクアットロが姿を現した。

「何！どこから？」

「正解はただ私が移動してるだけでした。不正解者にはこの“RPG”をプレゼント！」

クアットロは愉快に笑いながらトリガーをひいた。

発射されたロケットは柱に隠れていた香美市に一直線で突き進む。

「香美市ちゃん、逃げてー！ー！」

叫ぶみゆき。

一番香美市と距離のある亜理子は「能力が間に合わない！」と嘆く。  
「伏せてー!!!」

緑の声と共に頭を下げる香美市。

「無駄よ。まず一人め」

クアットロが勝利を確信する。

ドゴーン！

ロケットの爆発の音……ではなくクアットロのいた場所の隣地下に  
続く扉が蹴破られた。

「遠時！あのロケットだ」

「わかつてますよ」

蹴破った勢いのまま超スピードで香美市のもとに駆け寄る。

「今からじゃ遅いつての！」

「それはどうかな？」

横を通る時に言葉を交わす。

確かにいくら超スピードでも発射されたロケットには追いつけない。

「その為に俺がいるんだろっが！」

右手を前に突きだす。

「固有スキル『英雄の試練』ランスロット 発動！」

激しい光と一緒に鞘にしまわれた刀が姿をみせる。

「能力『デステイニ・チョイス』発動！。目標物質の時間の凍結を  
開始」

香美市に向かうロケットのスピードが減少していき、終には止まる。

「凍結完了。今です彦一さん！」

「おおおお!!!!!!」

雄叫びを発しながら香美市の前に立つ。

「固有スキル『完璧を嫌悪した実像』イジス」

彦一の手の前に円上の盾が製造される。

ロケットが動きだし彦一の盾に命中するが爆煙だけを残して消えた。  
「あんたらね？ヴァン達を殺ったのは！」

憎々しくクアットロは彦一を睨み付けた。

「早急に武装解除し、人質を開放しろ」

彦一は冷静に淡々と言う。

「嫌に決まってんでしょうがー!!」

「……だろうな」

クアットロは両手に拳銃 ベレッタ を構えトリガーに指をかけた。

「飛び道具は卑怯だろっ！」

大きく跳躍し物影に隠れる彦一。

隠れているコンクリートが銃弾によって削られる。

「彦一さん！」

走りだす遠時を緑が止める。

「何で止めるんですか!？」

「ここは私がやります。『ユーセイバー』発動！」

先程の彦一にも負けないスピードでクアットロの所に向かう。

クアットロも気づくが紙一重で緑のスピードが上回る。

「ぜあー!!」

緑の蹴りがクアットロの頭部を捕らえて直撃する。

「ぐあっー!!」

クアットロは蹴られたことよって吹っ飛び、体勢を立て直す。

「ここは…一時撤退ね」

そう言つとクアットロの姿が消えていく。

「なんや？消えてもつたで」

「アイツの能力かしら」

「少なくとも、チャンスだ。全員集まろう」

全員が物影から出てきて一ヶ所に集まる。

「どうしてこんなところに居たんですか？」

「みんなで買物してたらな、いきなりテロリスト来てみんなを捕まえてこのホテルの最上階に移動させようとしたんや」

「それを私達は止めようとしたんですが、テロリストを倒してる途中にあの狙撃主に狙われていた」

「動けなかったと言うわけか」

「はい」と虚しく答える緑。

「お兄ちゃん達は地下で何してたの？」

「地下でも同じような事だったさ。能力者が居てそいつらを倒すのに時間がかかった」

「ふーん」

遠時の表情が少しだけ暗くなる。

「これから私達はどうするの？」

香美市が一拍空けてから問いかける。

「そうだな。……緑、人質が移動されたのはどちらのビルだ？」

「えっと、私達が泊まっている方だと思います」

彦一の質問に答える緑。

「それならパーティー会場のほうだな。よし、こうしよう」

彦一が全員に作戦を伝え始める。

「まず俺と香美市で人質の救出に向かう」

「ちよつと！なんで私があんたとなの？」

すぐさまに反論する香美市。

「救出するのにお前の能力は役にたつからだ。遠時とみゆきはメイソコンピュータに行つてシャッターを開けてこい」

「シャッターを開けるつて操作法がわかりませんよ」

「俺が電話で指示するから大丈夫だ。それにお前は人質の救出なんてできないだろ？」

「うつ！」つと口ごもる遠時。

香美市はまだ納得いかない様子でブツブツと独り言を言っている。

「お兄ちゃん、私と緑先輩はどうするの？」

「お前達は -

チューン！

言い終るよりも速く彦一の頭上の柱に穴があく。

「人質を助けた後、移動させる時に邪魔になると思っから二人でアイツを倒せ」

「わかった」

「了解！」

全員に指令が行き渡り眼を見つめあう。

「さつさと終わらせてこの夏休みを楽しめよう！」

「『『『『賛成！』』』』」

それぞれが各々の場所に散らばった。

遠時とみゆきはメインコンピュータに続く階段を上っていた。

進めば進むほど敵が出てきて時間をロスしていた。

「敵が多くて上に行けませんね」

扉を弾除けにしながら言う。

「ねえ、遠時君？」

みゆきは階段前の窓ガラスを見ながら言う。

「あの窓は外に繋がってるんじゃない？」

見たところ外の景色も見えるので「そうだと思います」と言っておく。

ガッシャーーン！

目の前のガラスがみゆきの矢によって割られる。

みゆきの背中には白銀の翼が生えていた。

「しっかり掴まうときや！最上階まで飛んでいくでー！」

みゆきは遠時を抱えた形でビルの外に羽ばたいていった。

雫緑は電話をしていた。

正確には携帯に電話が掛かってきた。

その相手は神童彦一だった。

「何のようですか？作戦を伝え損ねたんですか？」

穴だらけの柱にもたれながら言う。

「いいや。作戦でなにも伝え損ねてないよ」

息は上がっていた。

恐らくは全速力で走っているのだろう。

「じゃあ、何なんですか？」

チュンーー！

一発の弾が柱を貫通してきた。

もう少しそれっていたら死んでいた。

敵はかなりいいライフルを使っているようだ。

「お前、本気で戦えよ」

彦一は一拍空けて緑に言った。

「と言いますと？」

「とばけるなよ！お前、こないだの遠時との戦いも亜理子との戦いもまったく本気だしてないだろ」

それでも白を切り続け「さあ、どうでしょうか」と言う。

「おい！俺は唯一お前の素性を知ってるんだぞ？」

「その事は絶対に秘密でお願いします」

素早く答える緑。

ハァーっと溜め息をつく音が携帯から聴こえる。

「とにかく、今回は本当に命がかかっているんだ。俺の妹の命もな。だから、切り替えるよ」

携帯の音が途切れてまた戻る。

「戦いと殺しを」

彦一が最後まで言いきる前に電話を切る。

緑も溜め息をつき亜理子のもとに向かう。

「あっ！緑先輩。危ないですよ」

「亜理子さん。ごめんなさい」



「えっ？」

ドッ！

手刀が亜理子の首筋に決まり、気を失う。

「すいません。少しの間だけ眠っておいてください」  
言いながら当たり前のように柱の影から出る。

「さあ、始めましょう。私達の殺し合いをー！」

緑は右手で左の腰を押さえるような姿で動きを停止する。

「固有スキル『生死の選別<sup>ウルキユレ</sup>』！！」

「誰に電話してたの？」

香美市がテロリストを蹴り飛ばしながら彦一に話しかける。

彦一はどうでもよさそうな声で「緑だ」と言う。

この二人はまったく止まることなくテロリストに対して一方は蹴り、一方は殴りを繰り返して進んでいた。

作戦開始から五分もたたないうちにビルの半分近くまで来ていた。

「そんなにあの二人が心配ですか？緑さんはともかく亜理子の能力は強いですよ」

横から急に出てきて敵を回し蹴りで応戦しながら言う。

すると「ふっ、やっぱり気付いてないか」と彦一は呟く。

「はあ！なんのことよ？」

「お前の考えは逆だよ」

文房具店から拝借した（盗んだ）カッターを投げつけながら「意味わかんないんだけど」とぼやく。

「俺は強いよ」

いきなり宣言する彦一。

「緑と戦えって言われても負ける気はしない。でもな」

前方に居たテロリストの顔面を地面に叩きつけるようにして殴る。

「もし、緑と殺し合いをしろって言われたら、俺はまず生きては帰れないだろうな」

平然とその一言をのべる。

「つまり、負けるってことね」

嫌味っぽく言ってみる。

「その通りだな」っとまったくきかなかった。

この階の敵を倒し終えて次の階の階段に向かいながら「俺は天才だよ」とまた宣言する。

そして、相手に対する精一杯の同情を込めて一言・

「だけど、それ以上に緑は殺しの天才だ」

冗談でも嫌味でもなく真剣そのものな表情でそう言った。

緑の手には真つ黒な日本風の刀が握られていた。

黒刀という言葉はこの為に創られたと思うほどその刀は真つ黒だった。

「さて、かくれんぼも終わりにしましょうか」

そう呟きながらホールのご真ん中にゆっくりと歩き始めた。

その時・

ギューン――！

一発の弾丸が緑の頭をめがけて放たれた。

「そこですか……」

キンツという音と共に緑は振り向いた。

飛んできた弾丸は既に二つにわかれて地面に転がっていた。

「『ユーセイバー』発動！」

大きく跳躍してビルの上階の所に突撃する。

「ふしゅっ！」

鞘から刀を抜き何も無い場所を一閃。

何かが落下する音がすぐ近くの地面で聴こえる。

その後すぐに頬から血を流すクアットロが現れた。

クアットロは真つ二つに切断されたライフルの半分を持ち、背中には大きなギターケースを背負っていた。

「あんた私の居場所がわかるの？」

ライフルを投げ捨て驚いた顔で問いかける。

「それだけ殺気をだしていれば気づきますよ。貴女の力は姿を消すだけみたいですから」

刀の持ち手を変えながらにこやかに答えた。

「へえ〜。でも、その刀すごい切れ味ね。さっき撃ったライフルの弾一応、対戦車用なんだけど」

「それは貴女がこの刀に選ばれたからですよ」

刃先をなぞりながらクアットロに向けて話した。

「私の固有スキル『生死の選別』フルキョーレは気まぐれなんですよ」

「気まぐれ？」

「この刀は斬る人物によつて切れ味が変わるんです。刀が殺したい時は鋭く、生かしたい時は、脆くなります」

「て言うことはその刀は私を殺したがつてるの？」

「そうみたいです」微笑みながら黒刀を構える。

ふふふつと笑いながら「悪いんだけど私は絶対に他人には殺されたくないのよ！」と言い、ギターケースから両手にマシンガン AK

- 47 を構える。

「ばきゅーん！」

自分から声をだして引きがねを引く。

弾は全て緑に狂いなく進むがそれを狂いなく緑は叩き斬る。

「やっぱり飛び道具は卑怯ですね」

言いながら地面のコンクリートの破片などを刀にのせ、クアットロに向けて一気に弾き跳ばす。

「うわっ！ちよっ、言ってることとやってること違うくない？」

驚きながらも自分のケースを盾にして防ぎきる。

そして、再びマシンガンを構え撃とおとしたその時、クアットロは緑の異変に気付いた。

「どうゆこと？」

虚を突かれたため言葉がおかしくなる。先程の何倍の驚きが彼女に訪れる。

それもそのはずだった。

クアットロの眼に緑の姿が増えていたからだ。

「何それ？日本人はみんな分身の術が使えるんですか？」

「ふふふ…普通の人にはできませんよ」

合計七人の緑が一斉に言う。

「零流暗殺剣術四の型「望月」。緩急のある速さで身体を動かすことによって残像を相手に見せることができます」

一通りの説明を終え、同じタイミングで刀を握る。

「このことはどうか秘密でお願いします」

言い終えると同時に攻めに来る緑。

しかも×7

「あー！やってられないわよー！！」

七人の緑に向けて銃を乱射する。

「『ユーセイバー』！」

一人が叫び、自らの間合いにクアットロを入れる。

「それを待ってたわよー！！」

残像ができていても能力を使えるのは一人。

クアットロは突っ込んできた相手に銃の引きがねを躊躇なくひいた。銃口が火を吹き、弾が緑に命中する。

否！

弾は緑の身体をすり抜け後の壁に直撃する。

「こっちです」

大きなギターケースの後に立ち、刀を横に構える緑の姿があった。

「いつの間に」

ブシャー――！

胴を下から斜めに斬られる。

もちろん、二つのマシンガンも一緒に――

「畜生！痛ったー！！」

「チッ！浅かったか」

緑は舌打ちしながら次の攻撃に移る。

「霰流暗殺剣術三の型〔十三夜〕！」

刀を横向きの水平に持ち、身体をねじる。

「やっば！」

クアットロは腰に隠していた軍事用の大きめのナイフを又も二つ取り出す。

「ぜあ――！！」

緑の刀から高速の突きが放たれた始める。

ギンギンギンギー――！！

ナイフと日本刀が激しくぶつかりあう。

「……くう――！！」

「その程度の剣術では私には及びません――！！」

鋭い突きがクアットロにくりだされる。

ガギー――！

クアットロのナイフが砕け後ろへ跳ばされる。

クアットロは肩で息をしながら緑と距離をとる。

その様子を見ながら「また能力で姿を消すつもりですか？」と言う。

「何勘違いしてんの？」

クアットロは笑いながら言う。

「私の能力は姿を消すことじゃないわよ。あれは固有スキルの一つ」  
左手で浅い傷口を押さえながら右手で拳銃　デザートイーグルを  
緑に向ける。

「そしてこれが私の真の能力」

引きがねをひき、轟音がビルの中に響く。

が、銃弾はまったく別の方向に跳んでいった。

「なんのつもりですか？」

緑は能力を使い一気にクアットロに近づく。

「これで終わりです！」

刀をクアットロに降り下ろす。

「……能力『サプライズヒット』」

静かにその名を告げる。

ドンッ！

「ごふっ」

緑の口から多量の血を吐き出す。

服が左腹部から徐々に赤く染まっていく。

「こ…これは！？」

銃弾は緑の左腹部を後ろから貫いていた。

「どう…言うこと…ですか？弾は外した…はずです」

酷く出血する傷を押さえ付けながらクアットロを睨む。

「ねえ、跳弾って知ってる？」

先程とはうって変わってにやけずらをしながら声高く言う。

「銃の弾を何かにぶついたりして銃弾の向きを変える技のことよ」

「馬鹿な！あれは本や映画などで出てくるもので、実戦で使えるものじゃない」

「使えるから貴女に当てることが出来たんでしょ？」

ふふんつと言う。

「私の能力『サプライズヒット』はね人の空間把握能力を究極的に跳ね上げるの。つまり、どこに何を当てれば良いかが私には分かる

のよ」

どうだ！つと言わんばかりの顔で笑いかけてくる。

「これで終わりって言ったわよね？そうね。じゃあ、これで終わり」  
右手に拳銃 デザートイーグル そして左手にはショットガン フランキ スパナ12 を手にとる。

「Good bye」

二つの銃口から無茶苦茶な所に弾が撃たれる。

しかし、何度かの反響音と共に弾丸の雨が緑に降り注いだ。

「クッ！雫流暗殺剣術三の型「十三夜」！」

凄まじい突きで弾丸を一つ一つ破壊していく。

「あはははっ！やっぱりやるわね」。でも、跳弾は殺気がこもっていないから分かりにくいでしょ？」

ショットガンのポンプアクションを行いながらクアットロから緑に近づく。

「跳弾ばかり見てると私に撃たれるわよ」

ドカンッー！！

鈍い音が木霊する。

だが、銃弾は緑の残像しか殺せない。

「望月か！？」

クアットロが気付くよりも速く緑が攻撃をする。

（こちらの傷は浅くない。長引けば不利！ならば向こうから近づいてきたこのタイミングで決める）

『生死の選別』<sup>フルキョーレ</sup>がショットガンをさばき斬り、クアットロへと向けられる。

「問題、さっき私の撃った弾は跳弾する or x?」

「ッー！！」

クアットロの元から即座に飛び退く。

が、その場には何も起こらなかった。

「正解はxでした」

「チッ！」

まんまとハツタリに騙された！

緑は怒りが込み上げるのを抑える。

「危ない危ない。やっぱ近ずいたらだめね」

そう言いながらショットガンの切れ端を捨て、ライフル ウィンチ  
エスターM29 をギターケースから取り出す。

「四次元ポケットですか？」

「嫌々。四次元ギターケースよ」

雑談をしつつも戦闘が再開される。

しかし、それも一方的でクアットロが緑の残像を消しながら本人探すことの繰り返しだった。

（まずい。このままじゃこちらがもたない。攻めないと！）

そう思いクアットロの方を向いた時だった。

クアットロの姿はそこにはなかった。

「しまった！距離をとられ -」

ドグアンツ！

右肩に強烈な痛みが走る。

考えなくてもわかる。

狙撃されたのだ。

「うつ……くうー！」

うめきながらも能力で移動し、狙撃された場所から離れた物影で座り込む。

（完全にやられた。殺気がなかったあの弾丸、恐らくは跳弾か。まずい、敵の居場所が分からない以上勝ち目がない）

銃声は無く。ビル内を静寂が包む。

緑はゆっくりと目をつむった。



香美市と彦一は順調に最上階に進んでいた。

「次の次の階が最上階ね。以外と早かったわね」

「人質の救出は俺が指示をだすから勝手に動くなよ」

「うるさいわね。わかってるわよ！」と言いながら階段を上り次のフロアに訪れる。

そこは展示会が開かれていたようで広い部屋にいくつもの絵が掛けられていた。

「誰もいないみたいね。さっさと行きましょ！」

だが、彦一は香美市を止める。

「そこに居るのは誰だ。隠れてないで出てこいよ」

彦一の声と同時にスツと黒いスーツを着た男が現れた。

「女の方はいかにも馬鹿そうだが、お前は切れ者のようだな」

「どうでもいい。そこをどけ」

彦一は敵に一步を踏み出した。

一つの決意と共に緑は目を見開いた。

（あれをするには相手の大体の位置を把握しないと…）

真っ黒な刀を身体の前に突き出し脚を開けたまま真っ直ぐに立った。緑は既に建物の影から出ており恐らくは敵にはまる見えで格好の獲物だった。

それが緑の狙いでもあった。

静まりかえったビル内で聞こえる音は自分の吐く荒い息のおとだけ。ゆっくりゆっくりと時間を欠けて呼吸を戻して集中していく。

そして、ビル内は完全に静寂に包まれた。

その時

……………ドヒューン

「そこだー！」

殺気で敵の位置を知らない状態なら敵の銃声で知ればいい。  
これが緑の秘策だった。

音のした方に振り向き全身を屈め飛び出す姿勢をとる。

「この一撃で終わらせる！固有スキル『勝利からの脅迫』デュルフィンー！！！」

地面の爆発と耳を突き破るような轟音と一緒に緑の身体は敵のいる場所に向かった。

引きがねをひいた後クアットロに待っていたのは後悔だった。

「クッソ！銃声で私の位置を探しだしたってうの？」

今、目の前に迫ってきているのは轟音と一体化したターゲットだった。

クアットロの居る所は先程まで緑の居た場所の三階うえの反対側の場所。

つまり、今緑は重力に逆らいながら空中で進み続けている。

「でも、失敗ね！空中じゃ私の弾は避けられないわよ！！！」

嫌でも耳に入る爆音に耐えながらライフルの狙いを緑の頭に合わせ躊躇なく引きがねをひく。

ドゥーンー！！

発射された弾丸は回転しながら狙い通り緑の頭に向かう。が、当たる直前に塵となって消える。

「何故死なないの！？！」

ドカン！ドカン！ドグアンッ！

クアットロはライフルのトリガーを連続してひき続ける。

しかし、弾は全て同じ様に塵となり消え去る。

そして、二人の差は徐々に縮まっていき音がさらに大きく聞こえる。  
（音！？もしかしてこいつのこの固有スキルは……）

二人の距離は後100mもなかった。

「……まさか音の壁？音速状態で進んでるって言うの！？」

もはや避けることは不可能なほど近づいていた。

「ふざけんなー！こんな所で死ねるかー！！」

懐からリモコンを取り出し全てのボタンを押す。

ドゴーー ーン！！

始めの爆発よりも強力な震動がビルを覆った。

自分のだす轟音にも負けない大きさの音に緑は気付いた。

（この爆発音……。敵の仕業か！）

残り数メートルで握っていた刀で突き刺せた敵は自らの爆弾で足場を爆破させ自由落下を始めていた。

その表情は紛れもなく笑っていた。

（クッソ！この力の弱点をもう見付けたのか！）

緑の固有スキル『勝利からの脅迫<sup>テュルフイング</sup>』はクアットロの予想どおり発動

中は音速で動くことが可能な固有スキル。しかし、その分代償が大きく速すぎるため方向転換することができない。

舌打ちをしながら更に速度を上げ落ちていく相手に刀を伸ばした。

「もう……少しー！！」

緑が伸ばす刀の先はクアットロの額に向かい、終に刃が刺さり赤い血が流れた。

「このまま…行けー！！」

「甘いわよ！」

クアットロが右手に握られていた拳銃 デザートイーグル を上に向けて撃つ。その反動で身体をずらし緑の音速の一撃を避ける。

「なっにー!？」

クアットロは崩れ落ちる瓦礫にぶつかりながら真つ逆さまに地面へと落下していく。

緑は崩壊しかけのコンクリートの地面に着地し崩れる前にその場から離れようとする。

(脚がまったく動かない!?)

音速移動の負担が一気に緑に押し寄せる。

「くっ!うわあああああ」

身体を動かしてその場から逃げることもできず緑も地面に真つ逆さまに落ちていった。

「みゆきさん!今の爆発の音は？」

「多分、緑達のいる場所からや。爆発でいろんな所が壊れ始めてるで」

遠時がみゆきの能力で抱えられながらビルの外側から昇っていると上空からコンクリート片が降っていた。

「急ぎましょう!」

「了解や。もうすぐ最上階やで」

バサッという羽ばたきと共にメインコンピュータ室の窓に近づく。

「ここやな？」

「ハイ。中に入って彦一さんの指示を待ちましょう」

みゆきは弓を構えて窓を壊した。

部屋の中は人気はなく大画面のモニターだけが一人黙々と稼働して

いた。

「あれがメインコンピュータだな。よし、彦一に連絡や」

「おいおい、ちょっと待ちたまえよ」

いきなりの声に驚いて「誰かいるんですか？」と遠時が叫ぶ。

「ああ、いるとも。君達の前にね」

クルツと画面の下の椅子が勝手に動いたかと思うと深々と腰かけた男が座っていた。

「勝手な行動はつつしんでもらいたいものだね。俺は君達に危害を加えないから代わりに君達もなにもしないでくれ」

「あなたは何者ですか？」

「テロリスト達のリーダーだよ。わかったら黙っててくれないか？今は忙しいんだ」

めんどくさそうに言い、椅子を回転させて前の画面を眺め始める。画面にはこの事件のニュースが取り上げられているものばかりだった。

「良いぞクアットロ。もっともっと盛り上げる。事件を大きくすれば大きくするほど世界に名が轟く」

男は独り言をブツブツ呟き満足げに笑う。

「リーダーって！？どうしてこんなことしてるん

ビビューーーー！

遠時が言い終るよりも先に矢が椅子に突き刺さった。

「みゆきさん！？」

「遠時君は甘いわ。敵のリーダー言うてんにゃから倒さなあかんやろ。それに、あの画面見て笑ってる奴が反省してるはずあらへん」  
みゆきはいつもよりも怒った声で遠時に言った。

「さあ、彦一に連絡や。さっさと終わらせるで」

「ハイ。ちよつと待ってください」

携帯電話を取り出したその瞬間

ドシューーン！！

「ごふっ」

みゆきの腹の辺りを何かが抉りとった。

「みゆきさんー!!」

走って駆けつけて抱き抱えると腹からは異常なほど出血していた。

「理解の悪い女だ。何もするなと言ったのに」

男は椅子から立ち上がってこちらを見据えている。

「てめえ！何しやる」

「こっちのセリフだ。何もしていないのに攻撃してきて」

男は長袖をまくりあげ手を伸ばして突き立てる。

「邪魔なガキどもは殺すでしょう」

右手を引いて振りかぶる姿勢をとり始める男。

「すいませんみゆきさん。痛いと思いますが少し我慢してください。すぐ終わらせますから」

上着でみゆきの傷を止血し、男の方に振り返る。

「すぐに終わらせるとは舐められたものだ。俺に勝てると思っているのか？」

「ハア？何勘違いしてるんだよ。すぐ終わるのはコンピュータの操作のことだよ」

一度息継ぎをしてから犯人を見つけた時の様に指を敵と認識した相手に突き立てる。

「あんたとの戦いなんてまばたきしてる間に終わるぜ！」

「ふふふ…よく言った。俺の名はゼノ・ウィング！この手で貴様の無力を証明して見せよう」

神谷遠時の戦いが再び幕を開けた。

崩壊の運命すら知らずに……

続く

第六話『バトルバケーション』CRAZY SWORD』中編（後書き）

投稿するのが遅くてすみません。

本当に主人公が活躍しませんね（笑）。

次はもっと速く書きたいと思います。

これからもよろしくお願いします。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9127h/>

---

ゲットバトルドリーム

2010年12月31日15時55分発行